

# 第三回 銀華文学賞発表

## 銀華文学賞

### 当選作

なし

### 優秀賞

- 「ミツバツツジ」 三好 洋（東京都国分寺市）
- 「水入らず」 山田春夜（大阪府豊中市）
- 「しろいゆめ」 梨場貞人（千葉県千葉市）
- 「天窓の下」 榎木啓子（北海道札幌市）
- 「河津桜は終わった」 柏木節子（北海道苫小牧市）

第三回銀華文学賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで日本全国および海外から一五〇篇の作品が寄せられ、賑やかな選考となりました。力作も多く、全体のレベルも高くなったと実感しております。心から御礼申し上げます。

応募作の中から、選考委員、河林満・大高雅博・八覚正大・小沢美智恵・小浜清志・五十嵐勉による厳正な審査を経て、以下の通り受賞作が決定しました。ここに発表させていただきます。

なお、誌面の都合により、奨励賞以下の作品は一六号以降に順次掲載される予定です。ご期待ください。

第三回銀華文学賞授賞式・祝賀会「文芸思潮」懇親会は二〇〇七年一月二八日午後三時より東京の三鷹産業プラザにて開催する予定です。第二回現代詩賞授賞式・第二回エッセイ賞授賞式ともに行ないます。どなたでも参加可能ですので、ぜひご参集ください。

第四回銀華文学賞は昨年とほぼ同じ要領で行ないます。締切は二〇〇七年七月三一日です。またどうぞ奮ってご応募ください。心からお待ちしております。

## 選評

### 受賞作のたたずまい

小沢美智恵



残念だが、今回は当選作なしという結果になった。各選考委員の推す作品がまちまちで、討論していくうちに各作品の傷も露わになり、「この作品」というふうには決められなかった。それだけ最終候補に残った作品が拮抗していたともいえるし、際立った作品がなかったともいえる。優秀賞、奨励賞の区別はつけたが、それも僅差である。

わたし個人は、榎木啓子氏の「天窓の下」、内山良久氏の「針金」、梨場貞人氏の「しろいゆめ」に高得点をつけたが、内心、受賞作にはならないのではないかと思っていた。受賞作には、受賞作のたたずまいというものがある気がしたのだ。

「天窓の下」は破綻がなく、よくできた作品である。夫を早くに亡くした女性・文が、懸命に育てた一人息子と頼りにしていた男性に去られ、深い寂しさに陥るが、気を取り

### 奨励賞

- 「消えない音」 相川柊子（福岡県大野城市）
- 「忍び駒」 七浦とし子（神奈川県横浜市）
- 「漂流少女」 山口 碧（熊本県八代市）
- 「この戸の向こう側」 木村令胡（福島県会津若松市）
- 「隠れ里」 羽田俊三（愛知県名古屋市）
- 「針金」 内山良久（大阪府吹田市）
- 「果皮の表面」 室町 眞（東京都杉並区）
- 「黒馬」 吉阪市造（北海道網走市）
- 「マルクスは古い師」 平塚壮吉（宮城県仙台市）
- 「カーテンコール」 川畑和嗣（北海道札幌市）

直して立ち直るといふ筋立てである。その気を取り直すきっかけが動物園のゴリラなのだが、動物園は息子が小さい時いっしょに出かけた思い出とつながっている。しかし、惜しいことに、そのエピソードが、構成上はうまく合っているのに、どこか違ふと感じさせてしまう。小説を作る上でラストに希望を持たせるため頭で拵えたものであり、小説内部から必然的に立ち上がってきたものではないからであろう。小説は作るものだが、その手つきが見えてしまつては成功とはいえない。また文がすべてに耐えるのみで、息子とも嫁とも男性とも一度も対決しない点が作品を弱いものにしてている。自分ひとりの胸の内での処理できるほどの寂しさでは、同情を呼ぶことはできても、読者の胸を揺るがすことはできないのではないか。よく書けているだけに欲が出るのである。

内山良久氏の「針金」は、二十枚という短編ながら文学の本質的な力が感じられる。太平洋戦争中、針金を使いゲームに似た感覚で原住民を殺した駒市という男が、戦後その住民の孫・ソンに同じく針金で一族もろとも復讐されるという話である。

「何も息子夫婦や孫の生命を奪うことはないと思われるかもしれませんが、わたしの国の復讐は一族を全滅させるまでやります。そして首を切つて持ち帰ります。国が違いますので首がなくても赦されるとして、これで、国にも村に

も顔向けができるというのですよ」とソンは言う。日本でもついこの間まで仇討ちが正義だったことを考えれば、この行為を残酷だとひとりで片付けることはできないだろう。淡々と描写される殺戮の場面に、わたしは慄然とし、改めて「残酷」の意味を問い直される気がした。しかし、では受賞作かというところ、それにはあるためらいも生じる。越えてはならない一線、その上で作者は綱渡りをしている。その勇氣と心意気は買うが、そこに微妙な危うさがあるような気もまた拭いきれないのである。

梨場貞人氏の「しろいゆめ」は、文章のリズムがよかった。タイトルは夢精を意味し、最初から最後まで精子の話なのだが、今までだれも書いていない方向からセックスの本質に迫ろうとした感覚は評価に値すると思う。ただ、書き出しの「夢」をめぐる男と女の会話のちぐはぐさが、女の妹の名前が夢子であることから生じた勘違いにすぎないというのではどうか。また、男が禁欲の果ての夢精を見せて、女に何を示したいのかが今ひとつはつきりしない。銀蠅やクマノミのエピソードを連ねたり、夢の話(妹の名前は効果的かどうか疑問だが)を繰り返したりして作品にあるムードを作りだしたところは魅力だが、そう感じない委員も多かった(というよりその方が多かった)。欠点をあげればきりがなが、わたしは才能を感じた。

なお、優秀作の三好洋氏「ミツバツジ」は、広島原

爆に初恋と樹木葬をからめた話でなかなか読ませるが、作品内の現在が被爆後三十年と中途半端で、二〇〇七年の今発表することの意味が希薄であった。

山田春夜氏の「水入らず」は親子の情愛の話にとどまっていられるはよかったのだが、近親相姦に話を発展させたところで小説世界がこわれてしまった。

柏木節子氏の「河津桜は終わった」は、旅館の仲居・滋子の人生をたくみな筆で浮き彫りにしているものの、人物や人間関係がみなかつて旅館ドラマで見たことがあるような類型的なものに見えてしまうところに弱さがあった。その弱さは、冨場渉氏の「哀愁のテイラー」、七浦とし子氏の「忍び駒」も同じで、小説運びはうまいのに、どうしても既視感が拭えず、受賞作としての風情に欠けた。

## 当選作の品格

河林 満



「第三回銀華文学賞」は、残念なことに当選作を見ることができなかった。けれども、優秀賞を五篇選び、奨励賞も十篇選ぶ結果となった。それはそれで、今後の可能性を示唆するものと言えるのではないだろうか。

当選作というものは、全体の佇まいの中に品格というか、雰囲気というか、そういうものがおのずから備わっているものである。そういう言い方からすると、それぞれ優秀賞の各篇は、ある意味で突き出た表現の魅力を見せながらも、どこか頼りなげなものも残すという作品であるというふう

に思われるのである。優秀賞・柏木節子さんの「河津桜は終わった」は、ある種古風な作品である。料亭の女将を務める主人公と、父親の妾であった前の女将との奇妙な関係が上手に描かれている。古風ではあっても、確かにこのような人間関係の緊張があると思わせる作品で、我々選考委員の支持を受けたのである。

山田春夜さんの「水入らず」は、なかなか力作。主人公の私と、母と兄のある種の三角関係、といつても私が兄との近親相姦的なものを抱くのでなく、母と兄との母子関係の妖しさを書いている。この母と兄との間に実際の性関係が、セックスがあったというふうには思われる書き方をしているが、それには疑問を持った。そこまで言わないで、どのような関係であったかと思わせるくらいがいいのである。「おかあちゃんはトロの味」兄の最後の言葉、これは

むしろ下品に聞こえてくる。きびしくいうと、親をなめているのだ。人間をなめているのだ。

もう一つの優秀作「ミツバツジ」は、三好洋さんの作品である。八月六日の原爆をテーマにしているが、時間の処理に不整合がみられたのが惜しい。もう少し順を追った時間の構成を考えるべきである。しかし、作品は原爆の焦土にミツバツジを植えるという構想を持ち、その実現に心を砕く主人公の物語であって、非常に共感と呼んだ。出会ったばかりの少女がむごたらしく原爆に殺されていく。

彼女を黒焦げの死体の中に捜す描写は、なかなか真に迫るものがある。原爆を書くとき、いきおいそのテーマの重さに票が集まりがちであって、この作品もそれを免れてはいないが、やはり人間にとってしっかり考え抜かれたテーマを書いているという重さが優秀賞に押し上げることになったといえようか。この作者は、前々回であったか、霊園の社長の話、確か樹木葬の話と記憶しているが、その作品を書いた人であって、その後のその作者の成長というものを考えさせられたのも賞を決める一因となったといえる。あと一步で当選作になるはずであった。今後の活躍を期待する。

奨励賞では、羽田俊三さんの「隠れ里」は、一種の山の鬼伝説を書いていて、なかなか読ませた。また、内山良久さんの「針金」も珍しい素材を書いて息のませるものがある。

## しかし豊饒な作品群

### 五十嵐 勉



残念ながら、第三回銀華文学賞は当選作が出なかった。全体としてレベルが上がリ、二次予選の通過者は増えている、それを落とすか、二次から三次への段階で惜しい気持ちで涙を飲んでもらった作品が多かった。三次予選に残った作品はどれも見るべきものがあり、粒ぞろいの接戦という印象だったが、逆に、単独でホームランという際立ったものがなく、傑出した一作という点では決め手に欠けた。そんななかで、それでもとにかく当選作にはこれを推そうと思つて臨んだのは、三好洋氏の「ミツバツジ」と山田春夜氏の「水入らず」だった。

「ミツバツジ」は原爆で死んだ少女の記憶を、主人公が樹木の再生に託して樹木葬として慰霊を決心する話である。三好氏は以前にも樹木葬をテーマにした作品で優秀賞を受賞している。今回はそれにさらに原爆という重量のあるテーマを重ねて、一步踏み込んだ構築をしてきた。その点を評価した。迫力は前作よりも烈しいものがある。筆者

る。作り方にやや御都合主義的などころもあるのだが、この針金の怖さは十分に我々に迫ってきた。奨励賞としては惜しいくらいであった。もっと評価されてもよいと私は思っている。

「マルクスは古い師」の平塚壮吉さんの作品は、今どきマルクスかという意味で私には面白く感じられた。ただ、このマルクスの登場人物の正体が余りにも書かれなさ過ぎなので、どこか他人の噂話をしているだけで終わってしまうような軽い感じがあったのは否めなかった。

山口碧さんの「漂流少女」は、これも現代の光景といえようか。いくらか世の中を斜めに見た二人の少女と金持ちのおじいさんの物語。少女の生感というか、感性にドキッとするリアルさがあつて、私は支持した。

川畑和嗣さんの「カーテンコール」も妙な魅力があつた。連合赤軍を想わせる一群の山奥でのドラマ。むき出しの野性味がさらに洗練されて、物語の整合性を持つと、もっと深まったと思う。作者は、詩の部門の前回の受賞者だが、それに重なるモチーフを秘めていると思われる。次作に期待する。

は広島での原爆体験者あるいはその家族ではないが、被爆者でなくとも虚構の構築に取り組むことができるというのが私の考えである以上、その点はマイナスの評価にはならなかった。ただ、他の選考委員から、年代の齟齬や前半部の造りの荒さが目立つと指摘されたとき、それを押し切つて当選に推すだけの援護はできなかった。やはり原爆というテーマの重さを考えると、被爆者やその親族ではないからこそ、丁寧に、大事に書いてほしいと思う。手直しして発表してもらおうことにしたが、その点をしっかりと押さえなければ、当選していい作品だった。

「水入らず」は関西弁を溶け込ませた「です」「ます」のやわらかな文体で、そのぬめりのある文体に母親と息子の艶めいた関係を乗せている。母と息子の関係が微妙に男と女の関係を匂わせながら展開していく筋立ては、ある閉鎖空間の孤独を引きずりつつ芳香を放っている。この家の没落の匂いのするなかで、出戻り女性の紡ぐ語り手のそこはかとない厭世観が、男と女の間の湿った通路にナメクジの這い跡のような光沢を放っている。この色艶はただならぬものがある。しかし、最後に母と息子の実際の肉休関係を露骨に言ってしまったのは、味消しだった。蛇足と指摘する選考委員が多く、そこまで言わなくても十分匂ってくる、その微妙さのまま終わってあげば、逆にもっと色っぽくなるという意見を私も認めざるを得なかった。少なくとも

つと他の出し方があっただろう。しかしこのやわらかくしなやかな文体には最後まで魅力を感じた。

他の優秀賞、梨場真人氏の「しろいゆめ」は、男性の性を描いた異色の作品で、この領域を扱った作品は読んだことがない。その意味でも新鮮で、男という性の空白感と虚しさがよく出ている。この白はたんに精液の白さや異性を拒否するところの精夢の白さだけではなく、骨の白さにつながる、あるいは死につながる白さ、精子がほとんどは死んでいく白さにつながるものであるはずで、深読みすぎると思われるかもしれない惧れを踏み越えてあえて言えば、男にはそういう領域があり、死屍累々を越えていく孤独感と屹立感の道が、つねに足元からはるか彼方、天空へと続いている。逆にそれをしっかりと汲み取って描ききれていないところに、この小説の最後の収束の弱さが表れてしまった。その領域を確実に受け止めることよって、逆に異性に向かう強いベクトルも生じたとも考えられる。本来異性に向かう強さはここにこそ真の基盤を持っているものかもしれない。前回の「バンザイクリフに沈む夕陽」も力量を覚えたが、それとはまたちがった世界をこういう形で呈示してくるところに、この作者の大きな力が感じられる。

柏木節子氏の「河津桜は終わった」は、料亭の一人娘と、仲居との愛憎劇だが、茂子というその仲居頭の姿が主人公の料亭の娘を通してよく描かれている。料亭で生きて人生

「消えない音」(相川柊子)は姉妹の愛情をめぐる確執を起点に異質な世界へ入っていく愛憎の緊張感が、不思議な音響を発している。この張り詰めた空気は迫ってくる。最後の破局を決定的な形にしていたら、当選していてもおかしくなかった。筆力は特筆すべきものがある。次作を期待している。

「針金」(内山良久)は、針金で人を殺すという強烈な行為が印象に残った。戦後数十年経っての復讐劇は、鋭いインパクトがあるが、話としてのリアリティは強烈であるものの、現実としてのリアリティをやや欠いているところに、普遍性の不足感がつきまとった。しかしこの筆者は鋭利な何かを持っている。これは推理小説やサスペンスのような領域では、大きな果実を結ぶかもしれない。

「マルクスは占い師」(平塚壮吉)もユニークな視点を持っていて、注目した。「マルクス」というあだ名の人物はおもしろい。ただ、マルクスの大思想が、テーマの開花の邪魔をした。最後に「マルクス」に食堂に出てきてほしかった。しかしこのユニークな造形には明らかに多くの実を結ぶ果樹の立姿がある。次作も期待したい。

「この戸の向こう側」(木村令胡)は、つねに社会の陰に隠れ、ほとんど光を浴びることのない人々にしっかりと光を当てる強靱な筆は、一つの根を得ている。人間の根の領域を掘り起こす力は確かである。大事にしてもらいたい。

を終えていく人物像が刻印深く鮮やかに、まさに桜のような色彩で迫ってくる。この作品の成功がある。人情ものというよくある題材ではあるが、茂子という女性の像は鮮明に立ち上がってくる。憎しみが愛情と愛惜に変わるそこに、この作品が永く生きる力がある。

楡木啓子氏の「天窓の下」は、夫に早くに死なれ、息子を支えに生きてきた女性の、「母と妻と女の」心の空間を鮮やかに描いている。この作者は、熟年の人間の心の空白を描き出すことに長けている。この空白をしっかりと見つけ、それを引き受けることよって希望へと転化していくところにすがすがしさがある。作品のまとめ方は前回よりもうまくなった。歯切れのいい、テンポのいい文章は、感覚の潔さといまわって、シャープな進行感を醸している。この切れがすがすがしさにつながっているところに一つの才能を感じる。

奨励賞の「果皮の表面」(室町眞)は、集計の総合点では一位で上がってきたが、真の愛情を得られない熟年男性の内面を母親の狂奔に照らし出して探ろうとする内面劇を選考委員一同で議論しているうちに、しだいに評価が下がってきた。それは母親が暗示する「青紫の風呂敷包」が象徴的過ぎて具体的な通路を示してくれていないところに不満が残ったからである。しかし熟年のテーマの切り込み方には、鋭い手腕がある。今後も注目したい。

他の奨励賞にも触れたいが、誌面が尽きた。当選作は出なかったが、全体としては豊饒だったと思う。

熟年の経験は、もつともつと多様で奥深く、豊かであるはずである。切り開くべき文学の領域は大きい。年齢とともにその困難も増すが、だからこそ文学としての影りは深くなるはずである。困難を越えて作品を結実させてほしい。

## 水位の上昇とともに

### 八覚正大



今回は、あまり理屈を前面に出さず、素直に一読者としての感想を述べていきたい。

もうすでにこの賞に応募され、何らかの形で実績を上げられている方の文章も散見した。全体的に力は増していると思われる。書き手諸氏はそれなりの努力、切磋琢磨をされているものと敬意を表したい。

しかし人間の目は(脳は)ぜいたくなものであり、評価とは相対的なものだということも述べておきたい。した



がって、その当人の作品が前回を上回るレベルをもたなければ、読み手はスーッと目が冷え、良さにも気づきながら、キズの方が気になったりもする。選者の心に絶対的基準などない。しよせん言葉は、そんな環境・状況・気分の中で捉えられ、揺らぐものなのだ。また言葉には肉体と違つて質量などない。しかしだからこそ、同じく物理的質量をもたない「心」というやっかいな無形の怪物を乗せることもできる、不思議。偶然の出会いの中で、しかし六人の意見を闘わせていくと、不思議な共同読書の輪郭も見えてくる……おっと、理屈は止めよう。今回は水準は上がったと感じる。それだけに飛び抜ける作品は認められなかった。

「河津桜は終わった」旅館を舞台に、女将になろうとしてみななななかった女と、旅館の娘との長年の葛藤。二人の人間の憎しみと老いによる和解が、なかなか読ませた。

「ミツバツツジ」原爆で愛する少女を亡くした少年が、やがて土壌研究の専門家になり、不毛といわれた核の汚染土にミツバツツジを植えようとする話。内容はなかなか感動的。しかし文章の構成が足りない。

「水いらす」母親と兄とが支え合う姿を見つけた妹。そこへの思いの揺らぎがなかなかうまく描けてはいない。

「天窓の下」夫を早く亡くした女の、心の揺らぎと思いをさりげなく、しかししつとりと描いている。地味だが、作

「隠れ里」大正時代、疫病に襲われた村の話。読みやすいうまいが、もののけ姫の世界。

「マルクスは占い師」就職で苦しむ学生が、セクハラで大学を辞めさせられた先生のその後に出会った話。

「漂流少女」老人と非行少女たちとの交流が、うまく暖かく描かれている。好感をもつて読めたし、ドラマになっていく。さらに方言がなかなかいい味を効かせている。ただ、ラストが放り出されたような感じではある。

「黒馬」少年の馬に対する気持ちのみずみずしい。描写もなかなかよく、短編であっても、ズシリと読めた。

「カーテンコール」暴力的な世界を描いている、しかしあまりよく伝わらなかった。

「消えない音」姉と妹との精神的な葛藤がよく描けている。描写もいい。しかし不安や怖れ、罪悪感を抜けて、この姉妹の心がどこかでつながることを望んでしまった。

「浮遊のとき」老人と風俗の少女との心の通い。ほのぼのとしていて、味よく読めた。

「母の帰還」母親の死までを素直に淡々と描いていて好感がもてた。

「哀愁のティラノ」今回、私が押したのは、この作品だった。かつて心中し損なった女のもとへ一瞬帰った男の視点。人生が哀しく、しかししたたかに描かれている。若干説明もあつたり、少しうまく作られ過ぎてはいる。が、なかなか

家としてのまなざしを感じる。

「しろいゆめ」男の性を扱った異色作。女とのセックスが面倒になっていく男の心理は分かる。が、疲れマラ」という言葉の連発は興ざめ。

「この戸の向こう側」はじめは読みにくかったが、没落した家と障害を持ちつつ実直にそれを守ろうとする奉公人の思いが、よく描出されている。ただこの内容はもっと枚数を必要とする。

「果皮の表面」面白かった、というか不思議に新鮮な愛の形が模索されているように見えた。人格的に障害をもったような母親、しかし彼女に愛を注ぐ年下の男、それを奇異に感じながら、しかし血族としてではない人間の愛のつながりに気づこうとしていく息子＝主人公。その構図はよかつたのだが、読み直すと青紫色の風呂敷包みがあるのかよく分からず、タイトルの意味もどこかはつきりしなかった。

ただ、この先、さらに血肉化された言葉で、自らの愛を主人公が語るのを読みたいと思う。

「針金」針金を用いた殺人の設定が凄い。しかし、戦時中のことに端を発したとしても、国際的なあだ討ちにはリアリティが足りない。

「三毛猫と老人」猫との関わりはとてもいい。

「忍び駒」自分の気持ちを押し込めて、他人の恋を支える女がよく描けている。

かの書き手と思われた。ただ、投稿規定に抵触し、受賞外審査となつたのは残念である。そして「ティラノ」の意味も分からなかった。

今回の投稿者たちも選者も、いまの日本文学という、難破しかかった船の縁につかまってさまざまに揺すられながら、それでも「自分の人生」を語りたい欲求を抑えきれず、また「いい作品」を求め、期待する。その性（さが）において、この銀華文学賞は支えられ、我々は生きていくことを実感する。

もはやそれは、舵取り的文壇などというものへの権威幻想や、商業甲板舞台で踊れることへの期待妄想から抜け出した「もう一つの文学」といっていい。そして言葉に賭けてきた人生のこれからを、ここで謳ってみたいと、そんな気にさせる賞でもあろう。

そのために、驚くべき命の噴出を描いた作品を期待したい。それは白鳥の歌、絶唱でもいい。とともに、賞賛励ましの言葉でも手紙でもいい、資金的援助でもいい、知り合いへの紹介でもいい……とにかく読者諸氏には具体的に関わって行為をして欲しいのだ。つまりそれによって第四回の銀華文学賞が支えられるのだから。

## ある種のエネルギーを

大高雅博



今回も又、かなりの時間を要しての選考となった。残念ながら当選作は出なかったものの、全体のレベルは確実に上がっており、最終選考まで残るのが難しくなってきた。この傾向は今後も続くであろうし、下読み段階での基準を上げる必要があると思われる。つまり、応募者は色々なところで修練をつみ、欠点のない作品が多く寄せられたものと思われる。ただし、賞を取るには、ある種のエネルギーが必要であり、突き抜けるような何かが不足していた。

「消えない音」が、面白いと思った。冷蔵庫の音が気に掛かるのだが、それは冷蔵庫を買い換えたとしても「消えない音」つまり主人公の心の奥底の音なのだ。最初から最後まで、ある緊張感があるのだが、惜しいことに、緊張感が途切れた部分があるのと、結末が、明確になりすぎ、面白みが減ってしまったような気がする。主人公は妹の彼氏を結局奪い結婚するのだが、その心の痛みが「消えない音」

「黒馬」は文章の迫力という点では、これが一番だった。次の作品を期待したい。

最初にも書いたが、最終選考に残れなかったもののなかにも、ある水準を超えた作品はかなりある。これからは、もっと最終選考に残るのは難しくなり、応募者の方もそれなりの対応が必要になるかもしれない。ただし、小説は結局、書きたいことを書きたいように書くしかない。結果を気にせず存分に小説を書いて下さい。

### 文芸思潮 銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞 授賞式&祝賀会・懇親新年会

読者の皆様、今年も文芸思潮 銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できます。楽しい文学の集いと思いたいと思います。どうぞご参加ください。

日時●平成一九年一月二十八日(日)

授賞式午後三時より/祝賀会・懇親新年会六時より

会場●三鷹産業プラザ 7F(三鷹市下連雀三・三八・四)

※JR三鷹駅南口より徒歩7分(中央通り三つ目の信号を右折)

会費・飲食費●五千円

問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮

TEL03-5706-7848 池田・五十嵐まで090-8171-9771-

なのだ。つまり、最後は妹がいなくなってもその「消えない音」は残るはずだ。そういう感じの結末が良かったのではないか。だが、この小説では、妹が復讐のために近づいてきているところで終わる。これは何度か書き直しているのだろう。一般論だが最初、小説を書く時、感慨、エネルギーのようなものがある。それは、推敲の段階で、少し、消えてしまう。だが、小説の完成のためには、避けては通れないみちである。それを乗り越えたところに別もののエネルギーを見つける必要があるのかもしれない。

「果皮の表面」は未熟さが目立つがそれを差し引いても僕には面白いと感じさせるものだった。男と母、その同居者の存在そのものが良かった。世の中には「表層の思考」を唱える思想家もいるが、作者はそれを意識したのだろうか、もっと、徹底すればよかったかもしれない。風呂敷の自身が謎になっているが、謎でもよいのだけれど、作者はそれが何であるかは把握する必要があり、それであれば、書き方は変わったかもしれない。文章の未熟さの指摘があり、奨励作に留まったが、技術的なものの克服は可能と思えるので、精進していただきたい。

「水入らず」「ミツバツツジ」は当選に一番近かった。前者は、文章が良く、読ませるのだが、最後、書きすぎた感じがある。後者は原爆の話で、印象的な場面があるのだが、時系列がおかしな部分があり、当選までいたらなかった。



選考会風景

## 第4回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。また埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。

今年もどうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。作品をお待ちしています。

### ●●募集要項

**募集内容**●オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

**応募資格**●2007年7月31日現在において45歳以上の者

### 応募規定

400字詰原稿用紙50枚前後（20枚くらいのもので

も可 / 原稿用紙使用の場合はA4の原稿用紙を使用のこと）。

ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募のこと（コピーのほうを応募するのが望ましい）。

別紙に①タイトル②本名およびペンネーム③年齢・生年月日（年齢・生年月日のないものは失格とする）④〒（郵便番号は必ず明記のこと / ないものは失格）・住所⑤電話番号⑥職業・略歴⑦400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。⑧応募部門（銀華文学賞応募作品と明記のこと）

予選通過者には通知し、希望者はインターネット・ホームページに掲載する。

**応募先**●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

TEL&FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

**賞**●銀華文学賞■賞状・トロフィー・賞金10万円（受賞者複数2名の場合は7万円、3名の場合は5万円）

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金1万円（数名）

奨励賞■賞状・記念品

**選考委員**●作家集団「塊」メンバー

**締切**●2007年7月31日（当日消印有効）

**発表**●予選通過者は2007年11月発売の「文芸思潮」20号に発表する。受賞作は2008年1月発売の「文芸思潮」21号に発表掲載。優秀作・奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

**主催**●アジア文化社

※主催者から

真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、強敵な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。

## 銀華文学賞選考委員プロフィール

### 河林 満

かわばやし みつる

1950 福島県生まれ

立川市役所勤務 のあと文筆に専念

中上健次に師事

90「渇水」文学界新人賞受賞・芥川賞候補

93「穀雨」芥川賞候補

他に「黒い水」「年譜」「塵芥のさなぎ」「海

からの光」など多数 「渇水」文芸春秋刊

「掌の小説を書く会」「文芸いわき」主宰

よみうり・日本テレビ文化センター講師

吉野せい賞選考委員

### 小沢美智恵

おざわ みちえ

1954 茨城県生まれ

千葉大文学科卒

出版社勤務

93「妹たち」で川又新人賞受賞

95 評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作

06「冬の陽」で千葉文学賞受賞

日本ペンクラブ会員

### 大高雅博

おおたか まさひろ

1954 石川県生まれ

日大文学科卒

80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞

他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥー・リメンバー」など

### 飯田 章

いいだ あきら

1935 東京生まれ

58 早大第二政経学部卒。多数の職を遍歴

「文芸首都」会員

74「迪子とその夫」で群像新人賞受賞

87「あしたの熱に身もほそり」芥川賞候補

他に「電線」「向島へ」「初恋」など多数

### 小浜清志

こはま きよし

1950 沖縄県西表島隣の由布島に生まれる

69 県立八重山高校卒業と同時に上京

劇団四季、沖縄海洋博などで、舞台裏方を務める

その後も様々な職を遍歴

87 作家中上健次と知り合い、師事。マネージャーを務める

88「風の河」で第66回文学界新人賞

「消える島」および「後生橋」で芥川賞候補

小説集『火の闇』（集英社）

### 八寛正大

はっかく まさひろ

1952 東京生まれ

早大理工学部数学科・都立大仏文科卒

92「十二階」で新潮新人賞受賞

小説「零度の遊び」「イエロークラスター」

「父のフレーム」「カウンター」など ルポ『夜行光の時計』・など

教育と文学、心理学と精神分析を幅広くつなぎながら文学活動を展開

### 五十嵐勉

いがらし つとむ

1949 年山梨県生まれ

早大文学科卒

79『流謫の島』で群像新人長編小説賞受賞

84-90 タイ在住、カンボジア問題を取材しながら東南アジアを遍歴

「東南アジア通信」「アジアウェブ」編集長

主著に『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）、『鉄の光』（健友館文学賞）他の

小説作品に「ノンチャン、NONGCHAN」、またルポ『微笑みの国タイ』などがある

# ミツバツツジ

## 三好洋

高野陸男は毎年の八月六日、原爆の日がくると、必ず「茂美ちゃん、元気かい」とつぶやく。普段の生活は平穏でも、この日には、原爆による茂美の無残な死を思い出す。

焦土、無数の死体、内臓のはみ出た人間のうめき声、その生々しい記憶の詳細は、年とともに曖昧になるが、心の傷は癒されない。爆心地近くの川べりに並ぶ死体の中から、黒焦げの茂美を見つけ、夢中で抱きかかえて走り、どこかの窪地に埋めた。

八月六日が来るたびにその思い出が甦る。目の前に茂美の姿が浮かび、海岸へ誘う。

三十回目この日も、陸男は「茂美ちゃん、元気かい」とつぶやく、海岸に向かった。もんぺ姿の女学生の茂美が前を歩いている。この心の傷を妻子に悟られないように、

いい」

彼の目には、黒焦げで、のっぺりした茂美の顔が浮かぶ。核兵器廃絶どころじゃない。今までずっと、彼は広島島の爆心地の存在を、心の中から排除し続けてきたのだ。

正志の持ってきた本に、「頭蓋骨の山の前で、手を合わせている四人の女の写真があった。(被爆から七年後の一九五二年写。市内や周辺部で原爆犠牲者の遺骨が次々と発見された)」と添え書きがある。戦後復興の道を辿る広島都心の建設現場からは、多くの被爆者の骨が掘り出されたと、たびたび新聞やテレビは報道している。

陸男が茂美に初めて会ったのは、三十年前の昭和二十年六月二十二日だった。彼は広島高校(旧制)の二年目で十九歳だった。戦況は切迫し、文科系の学生は二十歳になる来年には軍隊に引つ張られる。理科系の彼は大学を卒業するまでは徴兵されないが、勤労働員の連続で授業は殆どない。この二カ月は高校を離れ、軍港に近い軍需工場に動員されている。工場は彼の家のある漁村から近いが、機密と規律保持のため寮に宿泊させられた。

五月五日に、呉市は一回目の空襲を受け、軍港や他の海軍施設は重大な被害を受けた。五月十日の空襲で徳山の海軍燃料廠が全壊し、軍艦の燃料がなくなると噂が流れた。

耐えてきた。妻の藍子だけは、毎年原爆の日、陸男の様子がおかしくなるのに気づいている。

「茂美さんでどなた」と四、五年前に訊ねられた。

「高等学校時代の初恋の人で、女学生の時、原爆で黒焦げになって死んだ」

藍子は息をのんだように口をつぐんだ。彼の顔はよほどみにくく歪んでいたに違いない。それ以後、彼女は茂美のことを訊ねない。

一昨日、中学の同級生の正志が、宮島のもみじ饅頭を持って、彼の家にやってきた。

「お前は、原爆投下の五日後の広島を見た。何十人、何百人もの知人が原爆で殺された。お前も平和記念公園へ行き、被爆者の供養をし、核兵器廃絶の集会に参加した方が

この日は工場が休みなので、陸男は闇市で澱粉粕の饅頭を買って、食べてみようと思った。会社の門まで来た時、空襲警報のサイレンと同時に、激しい爆風を受けた。松の小枝や葉がちぎれ飛んだ。呉市の二回目の空襲だ。彼はグランドの防空壕に駆け込んだ。

警報が解除され外に出てみると、陸男の泊まっている寮が燃えている。陸男は大切な本を部屋に残してきたのを思い出し、寮に飛び込んだ。「アジアの食糧」は学徒出陣で戦死した高校の先輩の形見で、先輩の恩師の著書だ。その本に魅了された陸男は、著者のいる大学を受験する気になっていた。この本だけは失いたくない。煙にむせながら持ち出した。

隣の寮の前で女学生が三人騒いでいる。隣は同じ工場に動員されている女学生の寮だ。

「茂美ちゃんが二階にいる。足い捻挫したけん逃げられへん、一号室じゃ」

騒ぐだけで誰も助けに行かない。陸男は大事な本を二つ折りにしてポケットにねじ込み、防火用水をバケツに二杯かぶり、白練帽を水に漬けて、寮の階段を駆け上がった。

リュックを背負って畳にべたつと座っている女の子に、おい、大丈夫か、と声をかけた。

「みんな、逃げてしもうた。私、捻挫して歩けんの知っておるんじゃけ」



煙はどんどん濃くなり、火の音が近づく。廊下のバケツの水を彼女の頭からかけた。

あつと叫び、蕨掻く彼女にかまわず、陸男は膝の裏と背中に手を回し抱き上げた。背中に熱さを感じながら、彼は階段を駆け下りた。

そこにはもう三人の女学生はいなかった。グラウンドまで走り、芝生の上に茂美を下ろそうと膝をついた。彼の首に巻いた彼女の手は離れない。女学生の匂いがすると思つた。

寮だけでなく、工場全体が被害を受けたらしい。高等学校も女学校も動員隊は散り散りになり、同級生や引率教官は見つからない。死体や怪我人を運ぶ人、人探しに駆け回る人、足音と声が飛びかい、誰も陸男と茂美に見向きもしない。

(これではどうしようもない。家に帰るか)

陸男は半島の反対側の自分の家までの山越えの道を心でたどり、茂美を見た。歩けないの、置いていかないで、彼女は小さな声で言う。立つてみる、怒つたような陸男の声に彼女は体を縮める。彼女をこのままにして、一人だけ逃げるわけにはいかない。

軍港と工場から早く離れないと、第二波の空襲が来る。

陸男は荷造り用のロープで、茂美の体を自分の背中にしっかりと縛りつけた。茂美はびっくりして小さな声をあげ

り上げる。腰のあたりがじとじと濡れた。汗をいっぱいかいたのだろう。

夢中で道のない藪をこいで、斜面を駆け下る。何度も笹に足を取られて転ぶ。その度に茂美の顎が陸男の後頭部をうつ。背中の彼女が重くなると、尻を手で揺すり上げる。小さな胸の膨らみが彼の背をこする。そのたびに茂美は手を突っ張り、体を陸男から離そうとするので、歩きにくい。四時間かかって、陸男はやつと家に辿り着いた。

工場の方から断続的に火の手と煙が上がり、爆発の音がする。前よりも大きい。

庭では陸男の母が休山の方角を見ていた。山からよろよろと下りてきた陸男を見て駆け寄つた。背中の女の子を見て驚いたように訊ねた。

「どうしたんじや、そのおなご」

「足を捻挫して歩けんのじや」

茂美を抱き下ろそうとした母は、あらつと手止めた。そのまま、彼女を家まで運ばせ、自分の下穿きを出して着替えさせた。

やがて、洗濯物が風になびいた。茂美のズロースが太陽の光を受けてきらりと光った。

「火の中から女の子を助け出し、背負って山を越えた。男の子でなければけんことじや」

うちには米がない、と言いかける陸男を、母親は抑え

た。

半島を横切つて彼の家へ行くには、標高三百メートルの休山の鞍部を越え、五キロの山道を歩かなければならない。茂美は小柄だが、背負つて山道を歩くには重い。

峠に着くと海岸の陸男の村が見えた。反対の工場の方から、爆裂音が聞こえ煙が上がる。夢中で笹藪を駆け下る。木の枝を掴み、手のひらが傷つく。痛い気がしていられない。

堰の茂みの下は空から見えない。そこに茂美を下ろし、陸男はぶつきらほうに訊ねた。

「足はどうじや。まだ、歩けんか」

茂美はびくつとしたように首を振り、陸男の顔を見上げた。山道に入つてから、茂美は口をきかなくなつた。ポケットに湿けた乾パンがあつた。二つを口に入れて噛み、残りの二つを差し出した。茂美は首を振る。陸男は少し離れて立ち小便をした。

ぐずぐずしていられない。空襲警報はまだ解除されていない。

茂美の脇の下にロープをくぐらせ背を向けた。彼女は「いや」と言つて背中に乗らない。

歩くかい、と訊ねても返事をしないで首を振る。仕方がない。陸男はロープを力一杯ひっぱつて、茂美を無理遣り自分の背中に乗せ、縛り付けた。彼女の尻に手を回し揺す

た。

「米はのうても、浜には食べ物はある。雑魚や海藻を食べても腹はくちくなるけん」

陸男を安心させてから続けた。

「じやが、足を怪我して歩けん茂美ちゃんを、背中にきつう縛り付け、彼女の知らん山道を走つたのはまずかつた。人のおらん所、それも道のない藪をこいで走る。そがあなたとして、どこへ連れて行かれるか、お前に何なされるか、とても恐かつたと言つた」

陸男は山道で口をきかなかつた茂美を思い出した。

「あまり恐うて、おしっこをちびつたそうな。恐がらのうてもいい、海岸の家には、お父やお母あがいる、と安心させなければいけん。それにお前の走るはずみで、おしっこが止まらうなつた。救け出されてから五時間もたつと。とても我慢でけん。少しは茂美ちゃんのことを考えてやらなくちゃ。でも、女の体を知らないお前には無理じやけん」

陸男は背中の濡れたわけが分かり、茂美には気の毒だったが、急に親しみが湧いてきた。

米はなくても、漁村には海の食べ物があり、芋を作る土地もある。工場の食事よりはずつといい。茂美はすぐに元気になつた。三日もたつと顔は丸く、見違えるように可愛くなつた。左頬に笑窪まである。休山で黙りこくつていた

のを取り返すように、おしゃべりになった。足に傷跡は残ったが捻挫は軽く、五日目には杖なしで歩けるようになった。

陸男は毎朝、海岸に行き海藻や流木を拾う。味は悪くも、殆どの海藻は食べられ、流木は炊事の燃料になる。それに今年には貝が異常に大発生している。漁村は戦争で人手が足りないのので取り放題だ。茂美が歩けるようになると、陸男は彼女を海岸に誘った。

「海岸に貝や海藻を拾いに行かんか。茂美ちゃんは座って見とればええ」

陸男の動悸が早くなった。女の子をデートに誘ったのは初めてだ。休山の時から好意を持っていたが、背中を小便で濡らされたのが恥ずかしくて、誘えなかった。

恥ずかしがりやの二人は、浜に着くまで口をきかなかった。

警報は出ていなかった。陽は波に砕け、緑の鳥が浮き上がっている。美しい朝だ。

陸男は掘った貝をナイフで開けて生のまま食べてみせ、茂美にも食べさせた。初めは気持ち悪かったが、すぐに喜んで食べた。海藻や流木も一つ一つ説明する。戦時中は、彼らのような年頃の男女が、こんなに楽しい会話の時間を持つことは難しかった。

「気に入った花を見つけ、この木を手に入れるまでに十年かかった。この写真がそうじゃ」

父は大きな写真を目の前に置いた。二鉢の満開の鉢の両側に父と母が写っている。日付は今年の三月二十六日だ。

ミツバツジは落葉性で、葉が出る前にピンクの花がいっぱい咲いて木を覆う。陸男は父がこれほどミツバツジにのめり込んでいるの知らなかった。父の好きな花を好きな女の子、陸男は茂美への好感がぐんと増した。

「ミツバツジを植えた土には、自分の木の葉で作った堆肥を入れるといい」

父は話を続けた。その時居間に入ってきた母は冗談めかして言った。

「そんなら茂美ちゃん、あんたうちの子になったらええ、陸男とも気がおうているけん」

陸男は怒ったように文句をつけた。

「そんなこと言々と茂美ちゃんが困るよ」

「それは素敵ね、でも、私一人っ子じゃけ」

陸男は茂美のことを何でも知りたくなった。翌日の夕方、母と茂美の話を盗み聞きした。

「茂美ちゃんのズロース、珍しい刺繍があるのね」

「ああ、あれ、お母さんの刺繍です。こんなご時世でしょ。

何かあった時の目印に、ズロースの両側に、ツツジの花を銀の糸で刺繍したの。お母さんもツツジの花が好きなんで

茂美も貝を採りたいと言い出した。足はもう大丈夫だと言う。

彼女の手に手を添えて、熊手の持ち方を教えた。茂美の手は細い割に柔らかい。彼の顔に血が上った。休山越えの時に感じた、彼女の尻と胸の小さい膨らみを思い出した。

茂美は貝を採るたびに歓声をあげた。楽しさに時間のたつのを忘れ、いつもの一時間が三時間を越えた。母親は干し魚を手入れしている手を止め、帰ってきた二人を見て微笑んだ。

その日の午後、二人は縁側に並んで腰掛け、初めてゆっくり話をした。

「この大きな鉢植えの木、ミツバツジでしょ。私大好き。春早く咲く花の色、明るくてとてもいいわ。私の家の庭にもあるわ。私って、美人じゃなくて、引つ込み思案でしょ、早く咲いて、可愛い大人になりたいの」

水をやろうと如露を持って来た陸男の父は、その言葉を聞いて嬉しそうに言った。

「茂美ちゃんの好きなミツバツジ、わしも大好きじゃ。わしたち、気が合いそうじゃ」

そう言って家上がり、大きなハトロン封筒を持ってきて、中から写真を取り出した。

木の大小、花の色の濃淡はさまざまだが、ミツバツジの写真が、二十数枚も出てきた。

す。お母さんはクリスチャンだから、おしべとめしべの所を十字架の形にしたんです。戦争になってからは、あまり教会に行っていないけど」

物干しの茂美のズロースが光ったのは、銀糸のツツジの刺繍のためだった。

陸男の心は急速に茂美に傾いていった。しかし、母がいくら勧めても、それ以後は海岸へ茂美を誘わなかった。アメリカ軍が日本に上陸したら、陸男は肉弾戦で死ぬ。空襲もある。二人の生命は明日も知れない。愛し合うと、残された方が不幸になると思ひ込んだ。

広島市は呉、徳山と違って、一度も空襲を受けていない。戦後、アメリカ軍の本部にするために空襲しないのだ、と言う人もいる。茂美は早く広島の家に戻った方が安全だ。

市外の電話回線は軍用でいっぱいだし、郵便事情も悪く茂美の家と連絡がなかなか取れない。広島の家から手紙が来て、彼女が家に帰ったのは七月初めになった。

茂美の父は軍需工場の責任者で忙しく、母は病弱なので、陸男が広島まで送っていった。

海岸沿いに三キロ歩いて満員列車に乗る。食糧買い出しの大きな荷物に押され、倒れそうになる茂美を、彼はおぼろげに抱いてやった。敵機来襲で列車から降りて海岸に伏せた時、低空から機銃掃射を受けた。陸男は茂美の肩をしっかりと抱き寄せた。

広島までの三十キロを、列車は五時間もかかった。市電を乗り継いで茂美の家に着いた時は夕方近かった。家に着くと、茂美はすぐに庭のミツバツツジを陸男に見せた。地植えのミツバツツジの木は、陸男の家の鉢植えの木より小さいが、五本もあった。

両親の礼の言葉が長く、二人が別れの話をする時間はいくらもなかった。

夜遅い列車の方が空襲に遭わないと聞き、市電の線路に沿ってゆっくり歩いた。五、六年後、勤め人になり、茂美に会いに行く日を考え、一つ一つの停留所の名前を確かめた。

茂美が広島の家に戻って寂しくなったが、それどころではない。

毎日のように警報が出る。呉市に敵機が来なくても、東京、関東、阪神、北九州の空襲の被害の噂が聞こえてくる。空襲は軍事施設だけでなく、一般住宅も対象になり、焼夷弾でたくさんの方が焼かれ、人が死んだ。空を見上げる不安の日が続いた。

広島へ帰った茂美から一回だけ手紙がきた。

足はよくなり、建物の強制疎開に動員されている。食糧が乏しく仕事はつらい。陸男の家にいた頃はよかった。また海岸で一緒に貝を掘りたい。昨日陸男の父に聞いたよう

を受けた模様」

広島市には茂美がいる。陸男は不安を紛らわすため、砂の海岸を全力で走った。

「米軍機が広島に落ちたのは、新型爆弾らしい。広島市は全滅し、市民は全部死んだ」

夕方漁協から帰ってきた父の言葉に、陸男は理学部にいった先輩の話を思い出した。

「日本は新しい爆弾の研究をしている。それが成功すれば、戦争に勝てるかもしれないが、失敗した。実験の失敗で死んだおおだん博士は二階級特進だそうだ」

この爆弾の破壊力は桁外れに大きいと言うから、茂美は死んだに違いない。陸男は茂美の存在の大きさに初めて気づいた。戦争を憎むより、彼女を失った気落ちが大きかった。

広島には百年間植物が育たない、爆心地から百キロ以内の男は生殖能力を失った、一週間以内にアメリカの落下傘部隊が広島に降下して占領する。八月七日は悲観的な噂でいっぱいだった。夕方に広島から逃げて来た人がいた。話は混乱しているが、広島市が全滅したのではないことが分かった。陸男は茂美のことを考え、我慢できなくなった。九日に長崎に同じ型の爆弾を落とされたが、彼は十一日の夜明けに、両親の止めるのを振り切り、家を飛び出した。三キロ歩き、国道で広島へ行くトラックをつかまえ、荷物を

にミツバツツジの葉で作った堆肥を、ミツバツツジにやつた、と結んであった。

陸男は茂美が哀れになった。貝や海藻を持ってゆき食べさせてやりたい。ふつくと丸い彼女の顔は、また痩せてしまったらうか。広島に帰さないで一緒に暮らしていれば、毎朝の貝採りが楽しかったらう。陸男は朝の海藻拾いを一日で止めた自分の頑なさを憎んだ。

陸男もすぐに次の勤労働員に駆り出された。

今度は広島市の東、呉市の北東の水田地帯で、働き手を軍に取られた農家の手伝いだ。農村には空襲の心配はない。アメリカ軍が上陸しても、こんな所で陸上戦はない。それに農家は米をいっぱい持っている。久しぶりに白い米を腹いっぱい食べた。配給の胚芽米や七分搗き米と違い、ねっとり甘くて美味しい。陸男は農村の動員生活を楽しんだ。

動員には二週間に一回、一泊の休暇がある。その日は役場に集まり、点呼後家に帰る。陸男は米を持って家に帰り、魚の干物を下げて援農先に戻る。どちらの家にも喜ばれた。

陸男が家に帰ったその日のラジオニュースは、普段と違い奇妙に寡黙だった。

「八月六日朝、広島市に敵機の敵機が侵入し、相当の被害

の上に乗った。

広島市の中心で車を降りた陸男は呆然とした。一月前、茂美を送っていった時に見た広島の様子は、形もなかった。

一面の焦土に無数の死体が転がり、建物の残骸らしい鉄骨が所々に残っている。場所を確かめようにも、目印になるものは何も無い。大八車に山積み死体の屍を縛って運んでいる。積み上げた死体に油をかけて焼いている。死体を鷹口の鉤に引つ掛けて、大きな穴に次々と放りこんでいる。陸男は完全に言葉を失った。

市電の線路を見つけ、見当をつけて茂美の家の方へ歩いた。停留所の名の黒い部分は焼け落ち、白い部分が残っている。一つ一つ文字を確かめて歩いた。やっと、『あみち』と読める停留所を見つけ、茂美の手紙の住所が小網町だったのを思い出した。

前の月、茂美の家に行った時、小網町という停留所で市電を降りたように思うが、自信はない。そこからどう歩いたか覚えていない。一面の焼け野原だ。これでは、茂美も、茂美のズロースにツツジの刺繍をした母も死んだらう。茂美の家も、教会もない焦土だ。

線路が川を渡っている。橋の手摺りは壊れ、敷石は剥がれている。次の橋の先の川べりに中学生と女学生らしい死体が何十も並んでいる。陸男はそのまま通り抜けようとし

た。上着は勿論、ズボンもモンペもみな焼けて飛ばされ、殆どが裸で焼け焦げている。残った下着や下穿きは白いものだけだ。その中で何かが光った。

近寄ると死体の一つの小さな尻にズロースがへばりついている。両側に銀糸でツツジの刺繍がしてある。花の中央のおしべとめしべの所が十字架の形になっている。茂美だ、慌ててその死体を引っ繰り返した。顔はのっぺりと黒く焦げ、鼻の穴と目の穴が二つずつあいている。髪の毛はない。陸男は顔を背けた。足の傷を思い出し靴を脱がせた。皮膚が剥がれ、ピンクの肉が露出した。彼は必死に吐き気を堪えた。

銀糸でツツジを刺繍したズロース、茂美の母のお手製だ。この死体は茂美に違いない。すべてが混乱しているこの情況では、茂美の死体を葬ってやらなければならぬ。放っておくと鳥に目をつつかれる。陸男は死体を抱き、前方だけを見つめて走った。

焦土の窪地に奇跡のように僅かな緑が残っていた。彼はその窪地に死体を横たえた。炭化した顔や胸の表面が砕けてはがれ、露出した肉に炭の粉がまぶされている。

白いズロースだけが残っている。その下の白い皮膚はせめてもの救いだ。陸男は手をかけたが、すぐに離した。黒焦げの死体のズロースの下にだけ白い皮膚がある。ひどい。

余裕はなかった。

次々に外地から日本人が引き揚げてくる。日本は陸も海も狭くなった。疲弊した田畑は生産力が落ちていく。生きてゆくために食糧を確保しなければならぬ。

日本にはつらい時間だった。日本を建て直すために陸男は頑張った。まず食糧の確保だ。彼は日本の食糧生産のために、自分を役立てようと農学部に入った。

昭和二十五年に大学を卒業し、陸男は姫路の中国農業試験場に就職した。終戦の年の八月十一日に受けた原爆と茂美の死のショックを避けるため、広島市にある県立農試への就職を敬遠した。

陸男には、茂美の死がいつまでも信じられなかった。

昭和二十九年、藍子との結婚を決めるため、広島市役所に茂美とその家族の生存の可能性を問い合わせた。時間はなかったが、市役所は親切に回答してくれた。茂美の家は爆心地に近く、茂美の女学校の生徒は、小網町の川辺で、朝早い動員の点呼中に原爆に遭った。彼女の家も近くの教会も、原爆で消滅した。この報せで、茂美が生きている可能性のないことを信じないわけにゆかなかった。

昭和三十年に藍子と職場結婚をした陸男は、姫路市郊外の農家の離れに新居を構え、原爆の広島には近寄らなかつた。両親に用のある時は、姫路に来て貰うようにした。

陸男の新婚生活は人並みに楽しかった。その間に、日本

陸男は軍手をはめ、土を掘った。可哀相だ、可哀相だ。陸男は夢中で死体に土をかけた。指が痛い。手袋が破れ血が出た。瓦の欠けらで掘った。焼けた瓦はすぐに折れた。ズロースが隠れると、次は胸を、そして顔を土で隠した。四十すぎの男が一人、涙を流しながら手伝っていた。茂美の死体が土に覆われるまでに半日かかった。

手伝っていた男は、名乗らないで立ち去った。陸男は土をかけ続け、土を盛り上げ、軍手で叩いた。薄暮が近づいていた。立ち上がって、頭上の緑の枝を折って、その上に立て、もう一度しゃがんで長い間手を合わせた。

頭を強く振って立ち上がり、来た時のように線路を伝って戻った。涙は出なかった。

家に帰った陸男は、夜明けまで両親相手に、その日のことを詳しく話した。茂美の死体を窪地に埋めた話をした時に、初めて涙が流れた。

彼女の死体を土に埋め葬ってやった。それが茂美に対して、陸男ができた精一杯の供養だった。裸で黒焦げのまま野ざらしになるより幸せだ。顔は見分けがつかなかったが、ズロースに銀糸のツツジと十字架の刺繍があったから、茂美に間違いない。

その四日後に、戦争は日本の敗戦で終わった。敗戦に茂美を失った悲しみが重なったが、陸男はそれに負けている

は一年毎に明るさを取り戻した。昭和三十一年には「もはや戦後ではない」という言葉が政府の白書に使われ、日本は戦争の痛手から完全に立ち直ったと思われた。東京オリンピック開催を引き金に、物凄いスピードで経済発展を遂げた日本は、世界の経済大国の仲間入りをした。

夜の繁華街は色とりどりのネオンに輝き、デパートには高級婦人服や毛皮が並び、街には食料品が溢れた。若い男女は屈託なく、気ままな服装で腕を組んで街を闊歩する。広島は原爆どころか、戦争のあったことさえ、人々は忘れていた。

原爆のために焼き尽くされた街、無数の死体と怪我人の生々しい光景は、時間とともに陸男の記憶から薄らいだ。両親も姫路にくるたび、嫁の藍子を相手に、原爆の恐ろしさを話したが、その回数もだんだんに間遠になった。時間は両親の心の痛みを癒す最高の薬だった。しかし、陸男が茂美の死から受けた心の傷はなかなか回復しなかった。

銀糸の刺繍のズロースを穿き、顔を失った茂美を埋めた記憶にうなされる夢は、月に二、三回繰り返された。茂美を埋めたあの広島は窪地はどうなったかその度に気になった。

原爆から三十年後の陸男は、四十九歳のベテラン研究室長になっていた。



この三十年間、無残な茂美の死を思い出すのがつらく、広島市の爆心地に近づくことを避けてきた。しかし、その年の七月、陸男の勤める国立農試が企画し、中国地方の県立農試の土壌研究者を集め、広島市で研究会を開くことになった。日本農業は食糧需給のバランスがとれるまでに回復した。今後の土壌研究をどう進めるか、討議する重要な会議だった。

彼は呉の実家に帰り、そこから広島市の都心に通った。会議終了の翌日、市の中心の開発現場で、陸男は被爆者の骨の発掘を見る羽目になった。

開発現場では先ず重機で土を掘る。太田川によって堆積した土層の断面を深くまで見ることが出来る。土壌研究者にはいい勉強の機会だ。広島県農試がお膳立てをした。

前日の夕方になり、開発予定地は原爆被災者の死体を大量に埋めた土地であることが分かった。見学は遠慮したい、と広島県の担当者は会議の席で謝った。しかし出席者の何人かは、被災者の骨が発掘されるなら、彼らの冥福を祈り、核兵器廃絶の誓いを新たにしようと、見学を強硬に希望した。自由参加ということになり、研究会は解散した。

陸男は原爆投下の五日後、多くの死体を穴に放りこむのを見た。この日は茂美と同じように、名も分からぬ人々の骨が出てくる。茂美の供養のためだ。彼は勇気を出し参加した。

十一日の一コマが、鮮やかに甦った。

その日呉に帰った陸男は両親と藍子に、遺骨発掘の様子を話した。徳島に生まれ、姫路で結婚し、広島を知らない藍子は、両親と一緒に眉をひそめて聞いていた。両親の顔色をうかがった彼は、悪いことを思い出させたと後悔した。母は言った。

「原爆が投下された五日後の八月十一日、お前は広島へ行ったけん。大きな穴に被爆者の死体を次々に放り込んでいるのを見た。それが今日の骨となって出てきたんじや。そんなみつともない骨を見られるのは、私はごめんじや。お前はたくさん骨を見て、どう思ったか知らん。私は死んでも土葬は嫌じゃ。そんな骸骨をお前や藍子さん、孫、曾孫たちに、見られとうない」

「今は土葬は禁止されているよ。焼いた骨は骨壺に入れて墓に納めるから、建設現場や、土葬墓地のように、土を掘ったら、骨がぞろぞろ出てくるようなことはないよ」

最近めつきり弱ってきた母の顔を見ながら、陸男は遠慮がちに言った。

「でも、骨壺も墓の中も、狭もうて窮屈そうで嫌じゃ。もつとのびのびとでけんもんかのう。生きてる間は、戦争、食糧難、敗戦、貧乏暮らしでつらい思いばかりしたのだから、死んでからは、のんびりしとうなる」

開発現場は平和記念公園の南、爆心地から一キロあまりの国有地で、長い間開発されなかった。最後の被災者の遺骨発掘と言われ、報道陣も集まった。数珠を手にした人も何人かいる。土壌研究者は十人足らずだった。

パワーシャベルの掘る深さが一メートルくらいになり、骨らしい白いものが持ち上がる。パワーシャベルが後退し、十人ばかりの男がスコップと竹箒とバケツを持って入る。

土を掘り、払う。次々と人間の形をした骸骨が表れる。何層にも重なっている。大きい骨、小さい子供の骨、絡み合い、重なり合って離れない。

一体一体丁寧に持ち上げ、トラックに積む。数珠が擦られる。唾を飲む音が聞こえる。

終戦から十数年までは、広島市内のあちこちで、さかんに原爆犠牲者の遺骨が掘り出され、昼の光の下に曝された。陸男が埋めた茂美の骨も、同じように掘り出され、誰の骨とも分からないまま、処分されたのだろう。茂美をあの窪地に埋めたことは、陸男と手伝ってくれた見知らぬ一人の男以外は知らない。陸男は黙って遺骨の発掘を見続けた。

黒焦げの茂美の死体を、今、高校生の彼が、窪地に埋めているような錯覚に捉われた。衣類は熱線に焼かれ、爆風で飛ばされた。白と銀のズロースは熱線と爆風に耐え、茂美の尻にしがみついている。忘れようと努力してきた八月

ことがことだけに逆らにくい。分かった、何とか考えるよ、と陸男は約束した。

母は陸男の言葉を聞いて安心したのか、その秋、七十五歳の誕生日を待たずに死んだ。

母の死んだ翌年、陸男は中国農試から広島県農試へ転動し、呉の家に戻った。母の言葉が気になり、母の骨を墓に納めないで、骨箱を白い布に包み、仏壇の下に入れた。

陸男が広島県農試へ転動した五年目の三月下旬、出先から戻った父は嬉しそうに話した。

「いい話を聞いてきた。死者を焼いた骨と灰は壺に入れず、直接土に埋める。そこに故人が好きだった樹を植える。骨と灰は土に還り、水に溶けて生き返る。樹はそれを吸い、葉を茂らせ花を咲かす。婆さんが喜んでくれそうじや。俺はミツバツツジがいい。春早く鮮やかにピンクの花が咲く。地味な漁師暮らしをしたけん、死んでからは華やかに咲きたい」

父は満開のミツバツツジの大鉢に目をやった。今年もピンクの花をいっぱいつけている。

茂美もミツバツツジが好きで、小網町の家の庭に植わっていた。彼女のズロースの刺繍のツツジは、ミツバツツジだったに違いない。陸男は初めて気がついた。

「ミツバツツジは落葉性のツツジだ。落葉で土は有機物が

増えて黒く肥え、草木はよう育つ。有機物の多い土は水も空気も豊かに蓄える。きれいな水が溢れ出す。人間も土から生まれ、土が育てた物を食べ、死んで土に還る」

父は本で読んだのか、誰かに聞かされたのか、すらすらと楽しそうに話した。

自分と妻の埋葬方法を決めた父は、三ヶ月後の秋の彼岸に八十五歳で死んだ。

睦男は仏壇の下に収めた両親の骨だけでなく、茂美の供養もしなければならぬと、改めて思った。茂美の死体は広島のごく分らない窪地に埋めた、その上に彼は、原爆に焼け残った一本の緑の枝を折って挿した。あの枝は、昭和二十年の八月の陽射しに枯れただろう。茂美を葬る時は、両親と同じに、彼女の好きだったミツバツジを植えてやろう。

ミツバツジを植えて三人を供養するのは、彼に残された仕事だ。休山の中腹に父が購入した土地がある。そこは景色がよく、両親や茂美を葬るのにいい。骨を直接土に埋め、墓石を立てない葬りには、親戚がうるさく言うだろうが、気にすることはない。

茂美の骨はあの窪地にそのまま埋まっているわけがない。掘り出されて処分されただろう。あの窪地はどうなっただろうか。睦男はやつとその窪地を探す気になった。

原爆に被爆した樹木を調査し続けた高校生の記録が載っている。彼は引き込まれるように読み始めた。本を持って、ベツドから書斎に移動した。

爆心地から千メートル以内の樹木の大多数は樹勢が衰えて枯死したとある。しかし次に、

「爆心地から千〜二千メートルの範囲内の樹木は、熱線によって、爆心地側の枝、幹は焼けたが、樹そのものは生き残った場合が多い」という文を読んで、睦男は息がつまりそうになった。睦男は六つの樹木の記録を一気に読んだ。

その中で、基町のエノキの記録が一番心が惹かれた。

爆心地の北一キロメートルのこのエノキは、幹の周囲が二・五メートルもある。このエノキに近い小学校ではこの樹を守り続けた。当番を決め、樹の周りを掃除し、水をやり、落葉を集めて作った堆肥を根元に埋めた。札も立てた。

「原爆は罪のないエノキまで見苦しい姿にした。今日まで本当によく生きてきてくれてありがとう。生命の強さと尊さを私たちに教えて……」

一九八四年の台風でこの樹は根元から四メートルの所から折れた。しかし、生徒たちの祈りが聞こえたように、エノキは翌年の春、新芽を吹いて育ち続けた。

ここまで読んだ睦男は、思わず本をふせて目をつぶった。

広島市に近い呉に生まれて育った睦男は、原爆後三十五年の長い間、意識的に広島市の爆心地を忘れようとした。

広島市が原爆後に歩んだ歴史について、睦男は目をつぶり耳をふさいできた。その彼が、やつと翌年の正月から図書館通いを始めた。

広島市の原爆については色々の考えがある。「ノーモアヒロシマ」、「核兵器廃絶」の平和願望のものが大部分だが、少数の反対意見もある。しかし、睦男にとっては、原爆の広島には、茂美の黒焦げの死体を窪地に埋めた記憶しかない。

広島市内の本には、宮島、お好み焼き、もみじ饅頭、島の蜜柑狩り、名所や食べ物、土産物のことばかり書いてある。原爆の悲劇は忘れられている。原爆ドームと平和記念公園の名は載っているが、お好み焼きのうまい店の紹介と同じスペースしかさいていない。

広島と原爆をキーワードにして本を探した。前に友人の正志に見せられた写真が出てきた。たくさんの頭蓋骨の前に四人の女が合掌しているあの写真だ。正志の見せられたのと同じ本だろうか。同じ写真が別の本に転載されたのかもしれない。虫眼鏡で見ても、茂美の頭蓋骨を発見できるわけではないが、睦男はその本を借りて帰った。

その夜、ベツドに腰掛けて本をめくった。

巻頭の写真集の次に、「第一章、被爆樹の記録」と題して、

添えられたエノキの年輪のスケッチを見ているうちに、何が睦男の胸を突き上げた。

一九一〇年からの年輪を特定してある。それ以前の年輪は空洞で失われている。一九一〇年は睦男が生まれる十五年以上前の明治の末で、父はまだ十四、五歳だった。そのエノキは原爆に耐えて、今もなお年輪を重ね続けている。

広島城のユーカー、中国郵政局から平和記念公園に移植されたアオギリ、縮景園のイチヨウとケヤキ、天満小学校のプラタナス、どれもが生き続けた。爆心地側はダメージを受けても、反対側の幹や枝から新芽を吹き生き続けたという。そしてさらに続く。

「原爆により、広島の上は今後七十五年は植物が生存できない、死んだ土になったと報じられたが、十年を待たずして、広島は緑の美しい都市として甦った」

睦男は、基町のエノキを見たくてたまらなくなった。茂美だけではない。原爆で死んで広島の上に埋められた多くの人の生命は、広島の上で吸われ、樹になり、葉になり、甦っている。

原爆被災地の樹木には、土に埋められた原爆犠牲者の生命が輝いている。

睦男は自分の心の傷を癒す大事な言葉を、三十五年かかって漸く見つけた。人間が果たせなかった生命の甦りを、樹木が果たした。

両親と茂美の骨を埋めた土の上に、彼らの好きなミツバツジを植えよう。供養の花を咲かせることができれば、長い間続いた陸男の心の傷も癒される。

日本人は原爆被災者を三十年以上も供養し、核兵器廃絶を唱えてきた。しかし、原爆の熱線に耐えた樹木の生命、それを支えた土の力を何人が感じただろうか。

明日は土曜日だ。朝のバスで広島に行き、爆心地を回ろう。カメラとこの本を持って行けばよい。父の愛したミツバツジは、今年も苔をいっばいつけ、色づいている。

昭和五十年代半ばの広島街には、原爆被災の跡はない。他の都市同様に繁栄していた。

陸男は市役所に行つて、本にあった六本の樹の現存を確かめてから、市電を乗り回した。訪ね着くことのできた樹は、六本のうち四本だった。

どの樹にも、本に記載されたような被爆の生々しさは感じられなかった。傷口は新しい細胞で補修されている。爆心地側は穴があいていても、反対側から芽吹き、成長を続けている。伸びた緑が被爆樹全体を覆っているものもある。本で読んだ時ほどの強い感動は受けなかったが、樹々の生命のたくましさを確認することができた。同時に陸男はその樹々がしっかりと根を張っている土を眺めた。土壌調査が専門だった彼は、習慣のようにそれぞれの根元の土を、

ひとすくいずつビニールの袋に入れメモをした。原爆投下から三十年以上経過した土を調べても、何も分かるわけではない。

茂美の骨と灰の成分は、他の原爆犠牲者と同じに、広島市のどこかの樹の葉に輝き、土に染みついている。そう信じてようと努めたが、どの葉も幹もただの緑や褐色で、土は普通の土だ。それらに茂美や多くの原爆被災者の心を感じることはできなかった。落胆した彼はベンチに座り込んだが、それは自分の心の問題だと悟り、樹の緑を見上げながら歩いた。

夕食には早いですが、駅の近くのお好み焼き屋に入り、店員に焼かせながら杯に口をつけた。被爆して広島爆心地の土に埋められた被爆者の体と心が、土に残り、樹に吸われ、樹の緑に輝いている。五十代の男のこんな話を真面目に聞いてくれる人がいるだろうか。科学的に証明できなくてもいい。樹々の生命の魅りと土の力を、感じ、信ずることが出来ればいい。両親と茂美の供養のためにミツバツジを植える陸男の心に、弾みがつく。

四杯目の酒を杯に注ぐとした時に、愛媛県農試の東野を思い出し、あつと声を上げた。東野は研究者仲間として心を許し合っている。この話を彼までが馬鹿にするようだったら仕方がない。慌ててお好み焼きを頬張り、店員に宇品港行きの市電の路線番号を訊ねた。

瀬戸内海の夜は美しい。あちこちの島に灯台が点滅している。その灯が死者を吊う大きな蠟燭に似ていると思つた時、彼は茂美を埋めた窪地を探さなかったことに気づいた。樹木の生命と葉の色にばかり気を取られていた。明日すぐに広島に戻ろう。

陸男は松山港から東野に電話をかけた。夜の十時を過ぎていたが、車で港に駆けつけ、宿に案内した。翌日旅に出かける予定の東野は、宿屋の部屋に酒とつまみを持ち込んだ。

陸男の話聞いた東野は、しばらくの間、頭をひねっていた。

東野も樹木の生命力と土の力の大きさを肯定したが、それには限界がある、そんな物語を作るほどのことはない、と冷静に答えた。がっくりと落ち込んだ陸男に、東野は参考になるかどうか分からないが、と前置きをして話を始めた。

「ヨーロッパのある大学の研究報告に面白いものがあった。堆肥を混ぜた土と混ぜない土に、葉菜の種を播き放射線を当てた。堆肥を混ぜた土は九十パーセント発芽し、順調に成長した。無堆肥土壌は五十パーセント発芽し、半分枯れた。有機物の緩衝反応と水分を多く含んでいるからだ」と考察している。ここでも有機物は土に力を与えている」

小網町という市電の停留所があった。市役所の人停留所の位置は戦争中と同じだろうと言うが、どうも様子が違う。あの時は焼け野原の真ん中で、今はぎっしりとビルと家が建っている。近くに寺があるが、教会はない。三十年以上昔の記憶はあいまいだ。

道路も川も改修され、位置や形が変わっているようだ。原爆の前からここに住んでいる人に聞いてみなければ分からないが、そんな人はいるはずはない。諦めかけた陸男は、停留所から線路の渡っている橋に立って川を眺めた。突然何かが記憶に甦り、あたりを見回した。あの日、橋から世界遺産になっている原爆ドームに似た鉄骨を見たような気がする。目をつぶると、焦土の中にその姿が形づくられてきた。

小網町の幾つか前に「ドーム前」という市電の停留所がある。地図で調べると、あの日の記憶と方角が一致している。昨日もドームが何度か目に入ったのに、気がつかなかった。

原爆ドームという立派な名前は、被爆の時にはなかったが、あんな形の鉄骨が焦土の空にあった。確か、あの鉄骨を右に見ながら川の左岸を遡った。

三十年前の焦土の記憶はあいまいだ。何度も諦めようとしたが、海岸ではしゃいだ時の茂美の声が、陸男を呼んだ。

彼は小網町の停留所から、川添いに北に向かった。

何十人もの中学生、女学生の死体が並んでいた川べりは、次の橋の先だ。

川は護岸され、生徒たちが並んで倒れていた川べりの低地はなくなっていた。陸男はそこが茂美の死体を見つけた場所だと見当をつけた。あの日、死体を抱いた彼は、川から直角方向に、原爆ドームを左前方に見ながら走った。

記憶通りもう一つの川を渡ると、突然平和記念公園に出た。陸男は呆然とした。

公園には供養塔と慰霊碑のほか、時計塔、鐘、銅像、池、噴水、詩碑、原爆に関係する供養と平和を祈念するモニュメントに溢れていた。しかし、茂美を埋めたはずの窪地はない。公園を作るために整地か盛り土をしたのかもしれない。

公園の樹木の中にミツバツツジはなかった。

陸男は平和記念公園にたくさんある樹の根元やモニュメントの近くから、前の日と同じように、一掴みずつ土を取り、ビニールの袋に入れた。登山用のリュックの半分になった。この中の土と被爆樹の下から採った土に、茂美の生命が染みついていると、また自分の心に言い聞かせた。この土を持って帰り、骨の代わりに土に埋め、ミツバツツジを植えよう。

重いリュックを揺すり上げながら、歩いていると資料館

うなっただろうか。急に気になった。

市役所で元の茂美の家の住所を言って、その場所がどうなっているか訊ねた。

茂美の家の後には、茂美の従姉夫婦が住んでいた。道路にも区画整理にも引つ掛からなかったが、正確に茂美の住んでいた家の後かどうか、陸男には不安だった。

陸男が小網町のその家に着いたのは、午後三時をすぎていた。陸男は早速訊ねた。

「突然ですが、茂美ちゃんのミツバツツジは原爆で枯れてしまいましたか」

五十すぎの主婦は、しゃべる相手を見付けたというように、勢い込んで話し始めた。

「私がこの家に移ってきたのは、戦後十年目です。家を建てる三年前に土地を見に来ました。茂美ちゃんのミツバツツジは五本のうち三本が生き残っていました。それだけではありません。何十本もの芽生えが育っていました。ほら」

庭に案内した女はミツバツツジの群落を見せた。陸男は思わず歓声をあげた。

二十数本のミツバツツジの芽生えは、生き残った親木と同じくらいの高に育っていた。資料館の絵本でみた爆心地の草生どころではない。ミツバツツジの木と種の生命力が、有機物を入れた土の力を借りて、原爆の力を乗り越えたの

に出た。資料館に入って訊ねた。

「原爆投下後、このあたりに草が生え始めたのがいつ頃か、知っている人はいませんか」

陸男は土の力にこだわっていた。両親と茂美の葬りには骨壺を使わず、骨を直接土に埋める。その土は死者にやさしく、力が強くなければならない。

唐突な質問だったが、真剣な陸男の顔に、受け付けの人は探してみると約束してくれた。

待つ間、資料館を見て歩いた。本で何度も繰り返し見たものが多かった。一時間くらいしてスピーカーで呼ばれた。受け付けに戻ると、五十歳近い女性が待っていた。机の上に、大きな絵本が開いてあり、そのページを指差した。

「七十五年間、草木が生えないだろうと噂された焼け跡にも、終戦の年の秋には雑草が芽吹き、春になると新しい枝が伸び始めました」

その文字を読んだ陸男は、土は原爆に殺されなかったことを知り感動した。担当者に丁寧な礼を言ったが、何か物足りなかった。

資料館を出てから、東野の土に入れた堆肥の効用の話、父がミツバツツジを植えた土にはミツバツツジの葉を入れるといった話を思い出した。茂美の家のミツバツツジには茂美がミツバツツジの葉で作った堆肥を入れたはずだ、ど

だ。

（これで両親と茂美のためにミツバツツジを植え、見事な花を咲かせ、供養をすることができる。ミツバツツジの生命力と土のやさしさが、三人の供養をしると、俺を急がす）

この家の主婦に、茂美は自分の相思相愛の初恋の相手だと打ち明けて、親木一本と芽生え数本をもらおう。茂美の供養のためだといえばくれるだろう。

定年まで後五年、陸男は今年度末に県を退職してもいい。両親の骨と茂美を埋めた爆心地の土を埋め、ミツバツツジを植えて葬ろう。それを囲むように、休山の麓にミツバツツジの農場を作る。みんなが散策できる公園にしてもいい。彼はミツバツツジが満開になった農場の光景を心に描いた。

今夜、藍子と相談しなければならない。

#### 参考文献

- 直野章子「『原爆の絵』と出会う」岩波ブックレット 六二七（二〇〇四）
- 「広島市の原爆爆心地近くに生存したエノキ老木の年輪的観察」電力中央研究所調査資料「四八五〇〇」
- 「広島高校生平和ゼミナール」他「ドキュメンタリー原爆遺蹟」平和文化
- 那須正幹・西村繁男「絵で読む広島原爆」福音館





## 三好 洋

みよし ひろし

1924年香川県高松市生まれ  
 北海道大学農学部卒業  
 1950~88 千葉県勤務  
 千葉県水質保全研究所長  
 千葉県農業試験場長  
 国際協力事業団 JICA (ジャイカ) 専門家  
 バングラデシュ稲研究所 (1988~92) ア  
 ラブ首長国連邦大学 (1992~94)  
 楨の会同人 (千葉市) 代表 1991~  
 一歩会同人 (立川市) 1999~

現役時代、三十年も土壌の研究をしていた私は、何を書いても、心の底辺に土というものが流れているようだ。  
 NHKの深夜放送で、直野章子氏の「原爆の絵」と出会う、という話を聞いて心を惹かれ、その本を手に入れて読み、一層感激した。

広島原爆こそ、究極の小説のテーマだろうが、多くの人が書き尽くしている。とても太刀打ちできないと思った。孫引きで本をあさっているうちに、私にとって大切な言葉にぶつかった。「原爆により、広島は土は今後七十五年は植物が生産できない、死んだ土になったと報じられたが、十年を待たずして、広島は緑の美しい都市としてよみがえった」

これだ。植物もそれをささえる土の生命も原爆の猛威に負けずによみがえった。土の生命と原爆、私にしかかけないテーマにぶつかり、思わず涙ぐんだ。

それから夢中で書いた。原爆の惨状を書くのが目的でないが、ともすればそちらの方に引つ張られる。この程度では原爆を書ききれないのではないかと不安を振り切るのが大変だった。しかし私の考える土の生命をできるだけ書いたつもりである。

これからは何を書いても、心の底辺に流れる土に帰ってゆくような気がする。

## 水入らず

「おたくは水入らずでよろしいな」とよく人に言われるのやけれど……。

母と兄と私の三人暮らしはほんまに何年続きましたやろか。

この春、母が九十五の天寿を全うして逝きました。最後の二、三年はまたらボケでしたが、それまでは年を取っていても、ずっと立派に家庭の主婦を務めてきた人でした。その所為か、兄も私も家庭的に役立たずのまま年寄りになつてしもうて、今、二人の間が険悪になつています。母が生きている間はまだ兄妹で協力して母の介護をしたものの、今となつては何の共通の目的もなく、この広い屋敷で銘々が好き勝手に暮らしているわけですから。

## 山田春夜

とは言うものの、兄が掃除や洗たくをするでなし、家事一切は私に押付けです。

つまり私は兄の体のいい召使いですやろ。これからこの生活がいつまで続くのやら余生はだれにも分からしませんが、これはちょっと困ると思うのです。現在兄は七十五歳、私は七十二歳、この年の差は無視出来ません。旧制中学卒業の兄と、男女共学元年の新制高校卒業の私が、戦後の民主主義を賭けて真正面からぶつかり合うのですから。

主人と召使いの関係はお断わり。といつても、今までは母がこの役どころを担ってきたんですけれど。

ある日思い切って私は言いましたん。

と運び出したのです。

母は父の女関係に泣かされただけに、自堕落な男女の付き合いを毛嫌いしていたのです。三十過ぎた私が初めて恋をしたあの人には妻と子がいたのです。

「君の子供のように純な心が好きや」

「うちの家内はもう女やない。あれは今、商売にしか目がない味もシヤシヤレもないおばはん。僕は毎日砂漠の中にいるようなやつだ」

こんな常套的な言葉に騙されて、何度、胸をときめかして鴨の川原を歩いたことでしょう。私たちは小さな劇団の監督と女優の卵でした。

「お前は、騙されてる」

兄の言葉なんか私の耳に入りません。あんなに每晚騙すことなど人に出来るはずがない。あれは本物、と信じていました。いつか、あの人はあの家を出るだろう。それ迄唯黙ってあの人の喜ぶようにしてあげたい。それが恋というものです。私の横で安らかな寝息を立てて眠るあの人の顔を見て、私はただ幸せでした。

ある日、季節のものを取りにふと神戸の家に帰ると、玄関に大きな箱が幾つも積まれていました。母が出てきて小声で囁きました。

「兄ちゃん、帰って来はってん」

「え？ どこから」

私は母に兄ちゃんは何で京子さんと別れたんやろ、と聞いたことがあります。京子さんは兄と同じ会社の秘書で美人でした。勿論社内恋愛結婚でしたし、ワンマンの兄に逆らうような人ではありません。知的で穏やかな人、私から見れば理想の女性です。母は笑って、意味ありげに言いました。

「何でやろな、男と女の事は当事者でないと分からへん。

兄ちゃんは何にも言わへんし」

性格の不一致ではない……とすると、あれしかありません。きつとセックスがうまく行かなかったのでしょうか。私にはあの人とのことを思っただけに納得したのでした。

秋も深まると川の流が透き通ってきます。春と違って肌もしつとりとし、京都の空気がひんやりと身に寄り添うのです。もうすぐユリカモメもやって来るでしょう。神戸で育った私ですけど、京都の町にすっかり馴染んでこの町の四季が大好きになりました。

神戸には海はあっても川がありません。町なかを流れる川の風景は何といっても素敵です。鴨川、高瀬川、高野川……。

兄と喧嘩して出てきた私は京都のマンションでしばらく暮らしていました。

昔あの人と別れてから一人で住んだ頃を思うと、私も年

「私を解放してほしいねん」

「何から解放してほしいのや」

「兄ちゃんからやないの」

「俺、何も束縛してへん」

「そんなこと言うても、私、一日中、兄ちゃんの世話して暮らさんならん」

「何も世話してくれ、言うてへん。好きにしたらええがな」

「そうかて、あんた、お嫁さんいてへんのにどうするの」

「どうもせえへん。ここは俺の家や。お前は京都の家で暮らしたらええやろが」

「ふん、それでええのやつたらそうするわ」

兄の突つ剣呑な態度に腹を立てて、私はその日のうちに京都へ行きました。そう、私には自分の住みかがあるのです。あの人と別れて家に帰ってきた時、

「あんたはもう、傷もんや。ちゃんとしたお嫁入りはできへん。これからは自立して暮らさなあかん。あんな男に頼るなんてお母ちゃんは悔しい」

男と寝たからと言うて何で傷もんですやろ。既に父は亡く、生活の実権を握っていた母はあの人に当て付けのように、当時流行のマンションを鴨川のほとりに買ってくれました。

そしてあの人と住んでいた部屋から、私の荷物をとっと

「あんたもアホやな。京子さんと別れたんや」

「えっ！」

私は玄関で絶句しました。

かつて兄の居た部屋に、また前の様に机や座布団などが置かれ、机の上には湯飲みまであり、もう何日か暮らしている様子です。

「男の出戻りつてあるんやねえ」

私はふと可笑しくなりました。無精な兄は京子さんに毎晩あの人のように優しい言葉もかけなかったに違いありません。

「普通離婚したら、お嫁さんがお里に帰って男はそのまま居るもんやけどなあ」

母が愁嘆したように言いました。が、それでも母は決して困っているようには見えませんでした。夕方にはいろいろ料理して、兄の帰りを待っている様子なのです。

昔から母は兄ちゃんが好きでした。兄に何を言われても、唯黙って笑うばかり、私と同じことを言おうものなら、かみ筋立てて怒ったものです。特に父が不在がちな家庭だったので、兄を主人のように大切にしていました。

こうして不良の妹抜き、母と兄の二人の生活が始まりました。何故か兄が出戻ってきてから、母は私のことを煩く言わなくなりました。兄と二人きりの生活が楽しかったのでしょうか。

を取りました。あの頃は、これからまた新しい生活を始めるのだ、と意気込みがありました。劇団もやめ、愛という儂い幻想に溺れて暮らしていた馬鹿馬鹿しさに自己批判し、少しばかりストイックな生活を自分に課して行こう、と大学の生活協同組合に勤め始めたのですが。

今はもうそんな気力はありません。

単なる我儘老女の一人暮らしです。

久しぶりに日和も良いので虫干しを、と思い立ちダンスを開けました。強い樟脳の匂いと共に紫色のほかしのかかった訪問着が出てきました。初めてのお見合いの日に着たものです。もう派手で着られはしませんが、手放すのは何となく惜しくていつもダンスに戻したものです。何度かドレスに仕立て替えようとも思いましたが、やはり着物に鍊を入れるなど出来ませんでした。

それより、この着物は私の旅発ちの衣装に決めました。

わざわざその日のためにドレスなど作らなくても、私は思いついたこの着物とともに棺に入るつもりです。

しかし、それを遺言書に書いても誰が見てくれるのですやろ。兄が先に亡くなれば、子の無い私は誰かに頼んでおかなければなりません。ほつてりと重みのある絹の感触を膝と掌に楽しみながら、一人思いに耽りました。

気楽ではあるが寂しい一人の暮らし。兄が出戻ってきたころの母のはしゃぎ振りがわかるような気がします。

父は愛人を作って家を出て、その人の家で急死しました。父に捨てられ、その上未亡人になった母にとって兄は唯一の頼りでした。ぶっくら棒の傍若無人な息子でも、母は側についてくれるだけで嬉しかったのですやろか。

兄が定年までにあと少しという頃、ご近所のおばあさんから兄に縁談がありました。

私は何となく浮き浮きました。また兄が家を出て、母と女二人でのんびり過ごすのや、と。いつ帰ってくるのやら、帰らんのやら分からへん人を待つのはしんどいことです。

亭主ならいざ知らず、わがままな兄など真つ平です。私は母にお見合い写真を見せました。母はちらっと一目見て、

「年の割にえらい老けてはる」

と言いました。自分の息子も五十半ばも過ぎて、白髪の間も薄くなっているというのに。子供のとき、色白で可愛い顔だった兄は、年を取ってそのまま皺がより、締まりがなくて一向見栄えがしなくなりました。色黒でも、中年過ぎてきりつとええお顔になりました。人もありますやろ。

「吉岡京子さん、言うお名前やて」

「ええつ、また京子はんかいな」

母の顔色が変わりました。兄の別れたお嫁さんと同じ名前でした。

「今から、子が出来ても困るわな」

母の思いがけない言葉に驚きました。私にも子が無いし、兄にも子がいない。ひょっとしたら孫が抱けるかもしれない母の言葉とは思えません。

勿論、四十の人がお嫁に来て子供ができるかどうかは分らないけれど、母は喜ぶ様子はありませんでした。

結局この縁談は双方からご辞退ということで終わりました。たが。

「水入らずがええ」

その夜、お寿司を母が振る舞いました。兄も、

「今更、女の機嫌とって暮らすの、しんどいで」

「そやな、それになんか、可愛げのなさそうな人やった」

母の言葉に兄が頷きました。贅沢言う年やないのに、と私は思いましたが、こうしてまた、三人の水入らずの暮らしが続くことになりました。

私は落ち着いて針仕事などするのはあまり好きではありません。母は正反對で、着物の小布で一日中何か作って楽しんでいました。縮緬の椿の花や、赤い鯛、小袋など、それは可愛いものばかりです。私は五十坪ほどの庭の木をあとちに植え替えたり、こっちに移したりして、庭仕事が好きでした。梅の花の咲くころになるとどこからか目白も飛んできます。苔の上に散る山茶花の花びらも楽しみでした。

兄のいない昼間はのんびりゆったりと女二人で過ごすです。夕方になると俄然忙しくなりました。母が台所に立つからです。本を読んでいても、台所から声がかかるのです。

「茶わん蒸しがええやろか、お吸い物にしょか」

もちろん兄の趣向を聞いているのですよって、私が答えてもしようもないことです。

「どっちでもええやないの」

とでも言おうものなら、

「そやからあんたはええ主婦になれへんや。女は外から帰ってくる人のためにあれこれ考えて楽しんで暮らすもんなのに」

ブツブツ文句が続くのです。色白の面長の美人で、こんなに女らしい人なのに、何が不満で父は家を捨てたのでしょうか。

私は仕方なく本を置いて、母の手伝いに立つのでした。小まめに幾皿もおかずを作り、きれいに並べて食卓の前に満足げに座って兄を待つのですが、放蕩息子はおいそれと帰ってきません。どこかの飲み屋で一杯やっているに違いありません。

あの人と別れてからの京都での一人暮らしは私を強く育てました。これからは自分一人ですっきりと生きて行く、

という目標の第一歩でした。今までの目の前に垂れていた暗いカーテンが次第に上がっていく感じ。

劇団にいるときは、私の貯金と昼間の花屋のアルバイトで暮らして行けました。しかし、健康保険や年金のことも考えて、私は京大の生協に働き口を見つけました。

あの人は元の鞘に納まって相変わらず劇団の活動を続けていたようでした。

ある日突然、恋の川にぼちゃんと落ちて、泳ぎ続けて、相手が見えなくなつて一人で這い上がったような気分の私でした。私はずぶ濡れで、相手は全然濡れていない。そんな結末を私はただ悔しく思っていたのです。

これからはしっかり生きていく……。大学の生協はそんな私にぴったりの職場でした。ここは底ぬけに明るい昼の世界。皆が意見を出し合い、実践していく所。

私の家庭とはまるっきり違った理論がすぐ実行されて、過ちがあればすぐ正しい方向に修正される。何てすっきりした世界でしょう。女も男も平等なんですよ。

私の家と来たら、母より兄ちゃんが偉いのやから。毎日精一杯働いて、月末にその報酬を手にし、自分の生活を維持している。といっても、花見や山歩きや、年末の打ち上げだの楽しみもありました。

母はすっかり安心して言いました。

「もうこのまま、間違い起こさんと、行きなさいや」

を済ませて、二人は外に出ました。

鴨川の風が冷たくて、思わずぶるんと身震いしました。

「コーヒーでも如何ですか」

私は誘ってみました。と言うのは先ほどの映画の話が面白かったから。

「いいですね」

彼は素直について来ました。川のほとりの喫茶店で暖かいコーヒーを飲みながら久しぶりに私は気取った気分になりました。彼は劇団の人や生協の人のように政治的関心はなく、もの書きを目指しているように見えました。後で知ったのですが、撮影所でシナリオの下本を書くプロット屋さんでした。道理で映画に詳しくははずです。

彼の視点には私は新鮮なものを感じました。そして二、三回逢った後、私は彼をマンションに誘いました。彼に女の影がなかったからです。いつも一人で、女友達も連れてきたことはありません。

私ももうおばさんの部類に入る年齢に達していました。少しくらい楽しく遊んでみよう、と思つて。まさか、彼が本気だなんて思いもしません。風貌も悪くないし、知的で、何故彼が一人なんだろうとは思いましたが。

いつもの飲み屋で少し飲んで外に出たとき、「今日は私のお部屋でコーヒー飲みませんか」

私は苦笑するしかありません。ほんまに、間違いやつたんやわ……。しかし、私はまたもや間違いに巻き込まれていくのでした。

秋は寂しいです。川沿いの空気は冷たくしつとりして、一人身の私はそくそくと冷えます。そんなある晩、いつも行く飲み屋で一人の青年と知り合いました。私より五、六歳年下の彼は以前から顔見知りではあったのですが口をきいたのはあの夜が始めてでした。いつも一人で来て、ひっそりと店の端の椅子に座っていました。私は職場の人たちと立ち寄ることが割に多くて、一人で行くのは滅多にありません。

しかし、その夜は何故か一人真つ直ぐマンションに帰るのが寂しかった。連日の勤務で買い物もしてなかったので私の部屋の冷蔵庫も空っぽでした。

「今日はお一人ですか」

偶然隣合った彼から声がかかりました。

「あ、今晚は。あなたはいつもお一人でしょう」

「ええ。一人が好きなんですよ」

「あら、それはそれは。私は一人が嫌い」

私の答えに彼がにっこりしました。その顔が何とも人なつこくて私の心にストーンと嵌まりました。湯豆腐や焼き鳥でぼつぽつとたわいもないことを喋りました。別々に払い

何気なく誘ってみました。

「いいんですか」

彼は突然のことで少し躊躇していました。

「誰もいないから大丈夫」

私は理屈に合わないことをいいながら、どんどん丸太橋を渡りました。彼は黙つてついて来ました。私はドアの中に誘い入れました。

部屋のカーテンを開けると夜の川が見えます。「ほおっ」と彼が感嘆ともため息とも言えぬ声を上げました。

「どうしたの」

「いい景色だから」

「そう、いつも同じ風景だけど。今夜は輝いてみえるわ」

「秋は空気が澄んできれいに見えるんだね」

私は嬉しくなつていそいそとコーヒーをいれました。彼は美味しそうにコーヒーを飲み、彼の辛い恋の話をはじめました。

彼はなぜ一人だったのか、それは恋が終わったばかりだったのです。結婚の見通しが立たない彼の収入に不満だった彼女は突然他の男に乗り換えたのです。

「大丈夫よ、収入なんて女に甲斐性がないからそんなもの当てにするのでしよう。男の中身が勝負なのに……。貴方の値打ちの分からない人などよくよ思ふことなんかないのよ。今に立派なライターになって見返してやりなさい



私は彼の才能を見抜きました。この人はメジャーでなくとも何かに成る。京大で賢い男を沢山見てきた私は男を見る目に自信ができました。もうあの劇団の彼に対するような憧れと尊敬だけでほうととなることなどありません。この男は「お買い得」と思いました。いえ、結婚という形などどうでもいいのです。今度こそ主体的に人を愛してみたいと思いました。愛されることのみが何より嬉しかったあの頃を過ぎ、この人を愛して上げたいと心から思いました。結果として損でもいい。今の暮らしの中の寂寥とした状況から彼を愛することで脱出できるに違いありません。

その夜はコーヒーだけで終わりました。

しかし、男と女の関係になるのに時間は要りません。私は彼を母親のように受け入れました。と言うのは何と、彼は童貞だったのです。私は自ら身体を開いて彼を誘い入れあげました。二人して東の間でもいい、幸せになれば。

彼は以来私とのセックスに夢中になりました。若い身体で毎夜私を抱くのです。所帯持ちだったあの男と違って、求め方が強烈でした。水のない砂漠で井戸を掘るように……。

「ある意味で僕はセックスを軽蔑してただけど、間違いやつた」

しみじみと言う彼の言葉に私は微笑むほかありません。

しかし、病院の処置台に上がる女の屈辱は想像以上のものでした。二人で得た快樂の付けを女だけが背負わねばならない情けなさ。すべての女がこの思いに耐えて台に上ったのでしょうか。産婦人科というところは残酷です。生むための大きなお腹をせり出している女は誇らしげです。墮ろすために来院している女は、お互いに話すこともなく一人で重荷を背負って黙りこくって暗い廊下で順番を待つのです。

麻酔が覚めてだるく重苦しい下腹を抱えるようにゆっくと部屋に帰りました。

その夜、彼は来ませんでした。生協に有給を出して私は二日休みを取っていました。寒々とした部屋で一人うつらうつらと眠り続けて、疲れた身と心の回復に努めました。

妊娠に気づいて以来、部屋は花も枯れたままでした。新しい花を挿す心の余裕もなかったのです。次の朝、目覚めると窓に明るい日差しがありました。私の体調も良くなっていたのでしょうか。私はそっと起き上がってカーテンを引きました。

冬の川にゆりかもめが来ていました。窓ガラスに映った自分の顔はまるで老婆のように衰えていました。冬を迎えて元氣な鳥達に比べて私はなんて老けていることか。母や兄がこんな私の姿を見たら何というでしょうか。母や

「したい放題した結果がこれやないか」兄が責める声が聞

軽蔑も尊敬もすべて兼ね備えたセックスなんてあるのでしょうか。

「私は貴方が満足してくれたらいい」

これは私の偽りない心です。でも、激しい無防備なセックスは私に負い目をもたらしたのです。程なく私は妊娠してしまつたのです。

「子供ができたらしいわ」

彼は困惑しました。何と言つていいのか解らないのです。二人の間に長い沈黙があった後、私はきつぱりと言いました。

「心配いらんから。娘さんレイプしたんと違つてしょ。私、お医者さんに行つてくる」

「墮ろすのか」

「そうよ」

「大丈夫かな」

「皆してるのやもの」

その夜彼は私を抱きしめるだけで、求めはしませんでした。私もその方がよかつたのです。罪の意識をもつて関係するなんて嫌な感じですから。

初めての中絶は私の心に大きな傷を残しましたが、私は若い彼にそれは言いませんでした。彼のこれからの健全な性欲を抑圧することになつてはいけないと思つたからです。

こえてきます。

「そんなんしてたら、あんたの身体がしまいますかな」

母もきつと非難するでしょう。もうすぐ四十になるというのに私の生活はレールが外れたまま何処かへ走り続けている。

しばらくクラス会にも出ていませんでした。同窓生はほとんど結婚して子供もいる。

「お陰さんで、灘中に」誇らしげに言う奈美子の膝にブランドのバッグが光る。

いくら私はキャリアウーマンの振りをして、彼女らの築いたものの大きさには勝てないのです。夫と家庭と子供という社会的な安定。

三カ月足らずで闇に流してしまつた私の初めての子供のことを思つて涙が流れました。

ちゃんと暮らしていたら、この子もランドセルを背負つて学校へ行つただろうに……。その日の夕方彼はスーパーでいろいろ買物をして来ました。

「気になつてたけど、徹夜の仕事が入つて。今日は僕が晩ご飯作るから」

「有り難う、食欲ないけれど」

「カレー作るから」

微熱があるのか、無性に喉が乾くのです。ベッドで彼が

野菜を不器用な手つきで刻むのを見ながら、うとうととじていました。目覚めると、彼は健康的な食欲でカレーを食するように食べていました。

「起こしたけど、よく寝てたから。どう、おいしいよ。少し食べてみたら」

「ええ、あとで食べてみるから」

「朝から何も食べてないのと違う」

「飲み物ばかり」

「パンも買うてあるけど」

「パンはイマイチやわ」

彼は話をしながらお替わりしていました。若さと優しさはあっても、どす黒い女の生理などには思いが至らぬ相手は、こんな場合何を言っているかわからない様子でした。当たり障りのない話をして、台所を片付けて彼は私に触れないで帰りました。

休暇が明けて私は気合いを入れて職場に出ました。出来る限りきびきびと働きました。体も少しずつ回復して行くようでした。ともかくひと月経って、また正常な証が訪れるまで私はあの暗い経験を引きずって行くのです。彼との関係など考えもできないのです。腫れぼったい下腹部がすつきりしないことには、彼を抱く気なんか起こりません。そんな私の心が微妙に表れるのでしょうか、彼はいつ来て私も私に触れずに帰りました。そして、そのうちに来なくな

た。やはり川の流れを見るのはいい。長年鴨川を見て暮らした私には格別に馴染むのです。

「身体が悪くなるほど、何してたんや」

兄が嫌味を言いましたが、私は答えませんでした。

「まあ、ええやんか、この子も帰ってきとて帰ってきたんや。しばらくゆっくりさしてやって」

兄に言い訳するような口振りで母が言いました。ここは兄の家ではなく、私の実家なのに、と思いましたが、長い間帰らなかつたので、私の居場所は無くなつてもうたのでしょうか。母は階下の奥の座敷でゆつたりと暮らしていました。父がいた時のままです。

昔、私達子供は二階でしたが、兄は今が玄關脇の応接間を自室にしています。ここに帰ってきて私は自然に二階で一人暮らすようになりました。

物置同然だった部屋を片付けて、私は自分の部屋作りをしました。収入の無い今、京都のマンションは人に貸して、家賃を貰うつもりです。

部屋の掃除、買い物、夕食の支度もだんだん私の仕事になって、私は少しずつ元の身体になっていました。

母もこの十年で年を取りました。立居振る舞いも大儀そう、兄と二人きりの生活ですっかり兄に頼り切っていた様子です。そんな母を見て、私は帰ってきてよかったと思いました。

りました。彼の働いている撮影所も知ってはいましたが、私は追っていくのを止めました。心は渴いていましたが、体が付いていけなかつたのです。

それから暫くしてのことでした。私の視界からすっかり色彩が消えていったのは。

色のない世界。毎日の生活から現実感が失せていき、生きていくという実感がありません。鴨川の流れも、ゆりかもめもみな透明で、春になつても萌えいずる木々の芽も灰色一色の世界です。

病院通いが始まりました。内科、眼科、神経科など病院通いが仕事となり、ついに生協も退かざるを得なくなりました。

そして収入もなくなつて、私は神戸の家に帰りました。家を出てから十年が経っていました。兄はあいつも変わらず独り者で、出版社勤務もそのままです。世の中は景気のいい時代が続いて、昭和も終わろうとしています。

裕仁天皇の病が重篤とかで、母が仏壇で一心にご回復を祈つておりました。兄はともかく、戦後の高校卒業第一期生の私には母の気持ちなど解りませんでした。

神戸での暮らしは一応平穏でした。生活の心配もなし、母の心遣いで私はまた昔稽古に通っていたお茶の師匠の元に通い始めました。

週に一度、武庫川のほとり迄出かけるのもいい気分です。

時々夕暮れなどふとあの京都の部屋を思い出すこともあります。彼と過ごした夜のことなども思い、体の芯がずきんとします。でも、もうあんな生活はおしまい、と自分に言い聞かせて、これからは母の老後のために何とか役に立つて上げたいと思うのでした。

京都のマンションをきれいに引き払い、人に貸して、二階にまた荷物を入れました。私自身の足もとは一応建て直したつもりです。お茶のお稽古や、ちょっととした外出の小遣いには不自由しません。月末には京都の家賃が私の口座に入ってきました。特別贅沢な暮らしをしていた訳ではないにしても、父の残した二百坪の土地とゆつたりした家、年金暮らしとは言え兄の出戻りのお蔭で生活費も入れてくれるし、母と私は何の心配もなしに暮らして行けます。

神戸は坂が酷くてきついけれど、その分、晴れた日には海も見えて景色はいい。

三人でしばらくはいい日が続きました。私も年の所為かとげとげした所が取れてきて、今まで許せなかつた母の曖昧さも、まあ、ええやないか、とさりと躲すようになっていました。

そこへ突然やってきたのがあの震災でした。六甲山系の斜面に建つ私の家も倒壊は免れたものの、すぐ住める状態ではありませんでした。八十を越えた母を連れて私は取りあえず大阪のホテルに行きました。ボランティアの方の車

に乗って、西宮まで行き、そこから電車で大阪の街に着いたとき、心の底から訳のわからぬ怒りがこみ上げてきました。た。

大阪では奇麗に化粧した女の人がハンドバッグなど提げていつもの暮らしをしていたのでした。私達は震災ルックとでもいうのか、取りあえずコートに、要るものを入れたリュックサック、地震の日から化粧なんかしたこともありませんが。水が出ず、お風呂に入れなかつたので、髪の毛もばさばさのまま。

武庫川を隔てて人々の生活は一変してしまつたのです。

なんで私達だけが……という気持ちで心が震えまじた。

呑気者の兄がこの時ばかりは役に立ちました。会社に入りの工務店の人を頼んで、家の修理にかかりました。古い家でしたので、建具もすべて入れ替え、壁土も塗り替え、屋根瓦も一部葺き替えになりました。新しい家を建て替えるほどの費用をかけてやっと家に帰れたのは二カ月後でした。

「兄ちゃんのお蔭やで」

と言う日があるかと思うと、

「なんでこの壁はこんな色なんやろ、下品な」

と母は怒るのです。どうも家に帰ってからの母の様子が

「なんでそんな酷いこというの。施設言うても昔の養老院と違うやないの。専門の人が介護してくれはつたら、もうちよつと良うなるかもしれへん、思うて」

「良うならへん。お前にはわからへんか、そんなことぐらい。お母ちゃんは、俺等の為に一生辛抱して、辛いことも顔に出さんと、暮らしてきはつたんや。お父さんがあんな死に方しはつたときも、唯黙って堪えてきはつたんや。もう、辛いことも忘れてええ年にならはつたんや。お前もええ年して、それぐらいわからんのか」

えらい見幕でした。私は兄の言葉に圧倒されて、一言もありませんでした。兄がここまで母のことを思っていたとは知りませんでした。それから母が亡くなるまでの数年間は私たち兄妹にとつて苦しい日々でした。

機嫌のええ日と、悪い日が交代に来て、私の神経を逆なでします。でも、兄の手前荒い言葉も出せません。じつと我慢して、母の言う通りにするしかありません。椎茸と高野豆腐の煮物が好きだったので、炊いてあげても、

「こんな不味いもん、食べたことない」

と言うのです。だんだん私すらも識別できない日があるようになりましたが、兄はわかるのです。兄のすることに素直に従います。惚けても、やっぱり兄は偉いと思つているのですやろか。

おかしい。

「長いホテル暮らしで疲れきつてるのや。あんじょうしてやらなあかん」

と兄は言うのですが、感情の起伏が激しくて、つい私も声を荒げてしまいます。

ある日、窓に向かって動かない母の表情を見て、どきつとしました。まるで能面のようなのでした。明らかに母の内部で何かが壊れていました。何かを窓越しに見ていると思つていたのは私の間違いでした。母はなにをするでもなく、ただぼんやりと動きもせず居続けたのでした。このままどんどん正気をなくしていったら、私の手に負えません。それに、頭のはつきりしている日も今までの母とすっかり違つた人格になるのです。ちよつとこのことに腹を立てたり、頼まれたことが遅かつたりしたら苛々します。

あの、おとなしくて、優しい振る舞いの母はどこに行つたんでしようか。

思い余つて私は兄に相談しました。

「どこか施設に入れた方がお母ちゃんもええんやないかしらん」

その時、兄の声が裏返りました。

「おまえ、なに考えてんねん。お母ちゃんに人一倍心配かけて、これから親に恩を返すときやないか。施設に入れるなんて……。おまえ、鬼とちゃうか」

兄もさすがに立派でした。母に絶対に逆らいませんでした。最後は車椅子でしたが、家のトイレへも兄は自分で連れていきました。女の私が連れていっても間に合わないこともあるのに、不思議と兄のときは失敗が少なくなります。母も気をつかつているのか、とアホらしくなります。やっぱり母は兄ちゃんがええのや、と。

大体、昔から母は兄を大切にしました。妹の私より何でも兄が一番でした。食べるもの、着るもの、お年玉、夕飯のおかずに至るまで兄が先でした。

お風呂も兄が一番、それから手の空いている女二人のどちらかが入るのです。そんなふうに私のいない間もずっと、まるで主人と女中のような関係の母と兄の間に私が帰つてきて入り込んだのでした。

私は戦後の教育を受けた女です。母と同じようには行きません。ましてや、兄の収入で暮らしているわけではありません。私と母は父の残したものとや年金もあるのです。母を頂点とした関係なら当然ですが、兄を頂点にするとはおかしいやありませんか。

私は意識的に兄を変えようと思いました。

夕食のおかずもまず母の前に置きました。すると母はするりとそれを兄の前に置き換えるのです。兄もそれを何食わぬ顔で箸をつけるのです。

兄だけでなく、母も変えなければ……。私は疲れまし

た。

それに八十近い母は色白でつるりとした肌で物腰柔らかかに兄のご飯をついでやり、兄は亭主のようにいい気分であつたりご飯を食べる……。

こんな光景を変えようとするのは土台無理なんです。兄にとつては申し分のない母。

食堂での夕食が済むと、兄は自室で仕事をします。母は丁寧に煎茶を入れて、湯飲みの蓋をして兄の部屋に運ぶのです。

「何様やろ」私が一人で呟くと、ふと母の耳に入ったのか、母はくすつと笑いました。

兄が出かける時は必ず玄関で見送ります。

「お早うお帰り」

「うん、遅うなるで」

「氣いつけて」

子供の頃、兄は色白で、母の自慢の可愛い坊やでした。私は父親似で真つ黒。元気で一日中表で駆け回って遊び、

女の子なのに金太郎ってあだ名がついてました。兄は物静かで、家の中が好きで、服など汚してきたこと

もありません。作文や図画でよく賞をもらってきて母を喜ばせました。親子の間にも相性があるのでしょうか。

悲しいかな私はお父さんっ子だったので。その父が女

親心かとも思うのですが、すべてが万事で私は頭に来るときもあるのですが、

「そやかて、あんたも出戻りみたいなもの。そんなに文句いって暮らすことない」

母の言葉に私は妙に納得してしまいます。

男と暮らして、帰ってきたら出戻りなんや、と。今度こそ、ええ人見つけなあかへん。このままではクラス会も出られへん……。

母が亡くなって、半年経った秋に兄の具合が悪くなりまりました。

私は永い母の介護の生活から解放放たれて、京都の家で季節の移り変わりと年中行事を楽しんで暮らしてました。

昔の生協仲間の紹介で京都の有名な句会に出るようになってました。

俳句はこの年頃にちょうど似合いで、そう真剣に考えることもなし、短い時間でできるし、吟行もまた楽しい。兄も私を解放した気分で好き勝手に暮らしていましたが、夕方からは毎日決まったところに食事に行っていたようです。

カラオケの好きな兄にちょうどよいお店があったのでしよう。突然、「ちよつと帰ってきてくれへんか」と電話が

を作つて家を出て、その人の家で突然亡くなりました。

それ以来、私は母と兄の絆の外で暮らしたように思います。

進学も就職も母は兄の将来に熱心でした。私はどうせお嫁に行くのやから、と呑気なものでした。それがお嫁にも行かずこの年まで母と暮らすなんて、不甲斐ない話です。

朝、起きて私は玄関から表の掃除をします。それから朝ご飯の支度をして兄に声を掛けます。そのころ母は既に髪もとぎつけて食卓に座っています。兄を待っているのです。

兄が来ると、お茶を入れるためにです。私が入れると、薄いか渋いかで兄の気に入らないのです。味噌汁やら目刺しに季節の野菜の浅漬で兄が美味しそうに食べ終わるまで、母は側で見えています。私はさつさと自分で食べ始めます。

兄が会社に行くのを見送つてから、母はゆっくり兄の残り物を食べます。

「きのう食べた貝新の佃煮、まだあつたやろ」

「ああ、忘れてた」

「あれ、兄ちゃんに出して上げたらよかつたのに」

「また、今度」

「あの人は夜外で食べることが多いよつて朝出してあげないかん」

美味しいものは何でも兄に食べさせてやりたいのです。

あり、私は急いで神戸に帰りました。

兄は母の部屋に布団を敷いて寝ていました。

「どないしたん」

熱があるようでした。私が額に手をやると、兄は振り払いました。

「微熱が続いて何にも食べられへん」

「いつからやの」

「二週間ほどかな」

「早よう言うたらええのに。お医者さんに行つたん」

「うん」

「なんて言うてはつた」

兄は黙っていました。顔色や兄の様子で私はちよつとこれは難しそうやな、と思つたのです。病院の薬の袋を見て、私は主治医を訪ねました。すい臓の腫瘍がかなり進んでいるとのことでした。

帰り道で、私は兄の好きそうなものをいろいろ買いました。出来るだけのことをして送ろうと心に決めました。

間もなく兄は勧められて病院に入りました。手術もしましたが、どんどん衰弱していききました。痩せて顔が猿のようになり、我儘を言う気力もなく目を閉じて眠り続けました。話しかけても答えるのが大儀な様でした。

意識のなくなる少し前に、家に帰りたい、と言いました。



るのだろうか、と考え続けました。

以前テレビで見た臨死体験の話で、花と明るい光に満ち溢れた一筋の道を行く死者の姿が心に残っていました。次の朝五時過ぎに兄は逝きました。

母が亡くなってからまだ一年も経たないというのに。

とうとう私は独りになりました。葬儀も済んで、親戚の者も皆帰ってから、私は仏壇の前で声を上げて泣きました。

母が亡くなっても、男と別れてもこんなに泣くことなかなかなかったのに。

兄が寝ていた座敷の布団の場所がからんとして、それが辛いのです。

この家で三人で暮らした長い年月を思うと胸が痛くなって目の前が真っ暗になります。少しずつ片付けて、いずれこの家も処分しなければなりません。

子のない私には余分なもの不要です。また京都の鴨の流れの側で川を見て暮らそうと思います。

浅はかな恋も、ほんまの恋も、初めての子もすべて流れていった鴨川です。

俳句友達もいるし、これからの余生、もう自分のためだけに使えばええのです。

あれだけの長い時間を自分のために使っていたら、もっ

「先生に聞いて、明日いっぺん帰ろうな」

私はとても無理だと思いましたが、逆らえませんでした。もう命の火も消えかかっています。間もなく看護師がばたばたと部屋に入ってきて、「個室に移って頂きます」と言いました。頼みもしないのに、となるといよいよだな、と私は思いました。

からんとしたベッドだけのこの狭い部屋で最後を迎えるのかと思うと兄が心底哀れでした。私は花を買いに走りまわりました。ガラスの瓶にコスモスを活けていると、兄が目を開けました。

「お母ちゃんか」

乗り出して見た私の顔に眩くように兄が言いました。

ああ、お母ちゃんがお迎えに来はったんやわ……。その時です。

「お母ちゃんはトロの味……」

紛れもなく兄の口から出た言葉でした。え？ と聞き返しましたが、兄はそれっきり深い昏睡に入りました。

私はその夜、家には帰りませんでした。ふと昏睡から醒めた時に、側にいてやりたいと思ったからです。何か伝えたかったのに、聞いてやれなかつたら可哀相やから。

兄のベッドの側に簡易ベッドを入れてもらい、晩まんじりともせず、兄は今、母の手を取り、どの辺りを歩いている

と賢く生きられたかもしれなかつたけれど、これが私の業だったのか、とも思います。

男と別れる度に一人になったのですが、神戸に帰ればいつも母も兄も居ました。

今度こそホンマの一人です。若い頃のようにとげとげと肌を刺すような寂しさはありませんが、やはり秋の気配が身に沁みます。

昨日、久しぶりに俳句仲間の吟行に顔を出しました。

「氣い落とさんと、いきよし」

みんな優しい言葉で迎えてくれます。

仁和寺から衣笠山をゆつくりと歩きました。いつも見慣れた風景でも、やはり秋は素敵です。暫く、家の中でごたごたと兄の死後の用事の片付けに追われていた身には、目に映るすべての色が鮮やかでした。衣笠山の緑と、少し遅い御寺の御所の紅葉を満喫して、

紅葉見てそれなりの良き余生かな

と、俳句手帳に書きつけました。

私は根っからの楽天家なのでしょうが。

今日は兄の古い友達が来てくれるというので、ご馳走することにしました。

お刺身、煮物に酔の物、天ぷらにお酒の用意もしました。

中学時代の友達ですから気をつかう人はいません。昔から

家に寄って麻雀などしていた連中です。

母は兄の友達が家に寄ってくるのを喜び、いつもいそいそとご飯の支度をしていました。

カレーライスやサラダにトンカツなど。

兄の仏壇の前でひとしきり思い出話が弾んでいました。

「こいつ、なんであんな綺麗な嫁さんと別れたんやろ」

「ホモやないやろな」

「いや、マザコンやで」

「あ、お母さん、綺麗やったなあ」

「そう、いつもつるつるの顔してはった」

「親子丼やったんやないか」

「あほ言うな、仏さんの前で」

一杯機嫌で笑うのが台所の私にも聞こえてきました。その後の会話は何故か私の耳に聞こえてきませんでした。おやごどんぶり……。聞き慣れない言葉でしたが、彼らの、どこかくぐもった野卑な笑い声で私ははっと思い当たりました。

兄の最後の言葉、「お母ちゃんはトロの味」。おかしいな、と思いましたが。

おふくろの味が何でトロですよ。考えたけどその時は分かりませなんだ。

今、あの人が言うので、はっと気づいたのです。

第三回 銀華文学賞優秀賞

しろいゆめ

梨場貞人



なしば さだと

1956 北海道芦別市生まれ  
 75 千葉県立千葉高等学校卒業  
 89 放送大学「産業と技術」卒業  
 77 年よりプラント関係の装置配管設計に携わり、1983 から 84 の一年間当時の東ドイツシュベートに赴任その後、プラントから建築設備の仕事に就き、現場監督として主に大学関係、研究施設の建設に従事する  
 3 年前に伯父(福島文学賞受賞)の影響で小説を書き始める  
 第2回銀華文学賞で奨励賞受賞  
 趣味はスキューバダイビング、水泳、ランニング

「夢を見た」

「本当に夢だったの?」

「うん、間違いないよ、夢だった」

「そうかなあ、夢ではないと思うけど」

男は首を疎めた。女には何を言っても無駄だ。女の事は何もかも分かっている心算だ。こうと決めたら梃子でも動かない。それでも何故か今回は自分を曲げたくなかった。

「絶対に間違いないさ、あれは夢だよ」

「信じられないな」

女はいつもの男と違うなと思った。いつもなら此処迄食

い下がったりしない。自分を好きだと言う男はそのうちに自分の間違いを認める筈だ。だって夢ではないのを私は知っているのだから。男は必ず折れる。付き合ひ始めてから今迄ずっとそうだった。必ず間違いを認める筈だわ——そんな風に女は思っていた。

「君が信じようが信じまいがあれば夢だった」

「じゃあ、私の見た夢は夢でなかったと言うの?」

「なんだ、君も見たのか夢を」

「そうよ、大体あなたと同じ時刻よ」

男は結局「そんな筈はない」と、言い掛けて言葉を飲み込んだ。いつもの男の諦めだと女は思った。この手の男は扱い易い。

私と、母と兄二人の間にあつた結界みたいなもの、どうしても越えられなかったものが。

おそらく兄の若い頃、父が不在勝ちだったあの頃、母と兄は間違つた関係に落ちたのではないでしようか。

父に触れられなくなった熟れた甘美な母の体に兄は溺れたのでしようか。

いえ、そんなことではなく、ただ母の尽くしてやまな

い兄への愛が歪んだ関係になってしまったのか……。母と息子とはそんな危険なものまで孕んでいるのでしようか。考えるだけで暗い穴に無限に落ちていくような気がします。

彼らの帰つたあとで、私は仏壇の前にへなへなと座りました。

「お母ちゃん、兄ちゃん、あんたらも間違うてたんやないか」

いえ、男と女の間には間違いで説明できない深い淵があるのかもしれない。

長かった水入らずの関係は今、崩れました。

砂漠に消えた楼閣は美しい余韻を残しますが、私の場合、それは沈める寺です。

深い沼の底に沈んでもなお、鈍い響きの鐘が鳴り続けます。

受賞の言葉

雀百まで



山田春夜

やまだ はるよ  
 大阪教育大卒業  
 50 歳過ぎよりものを書き始め、あちこちカルチャーしながら  
 60 歳過ぎから小説を書く  
 心斎橋大学で藤本義一に師事  
 酒折連歌大賞受賞  
 津村節子「風花随筆賞」優秀賞受賞  
 長野文学賞小説部門賞受賞

山田春夜

近年、孫がどんどん大きくなっていくのに、ただただ驚いていました。でも、自分がその分どんな年とっているなんて思つても見なかったのですが。

六十過ぎから小説を書き始めて、年と共に書く世界が広がつていきました。もう面白くてやめられませんが。平凡な主婦の暮らしの中から、びっくりするような手品が出来たとき、一、三日うっとりとして二日酔いです。

この度は受賞を有り難うございます。自分が好きで書いて、人様に読んで頂き、評価して頂くなんて望外の喜びです。

七十でもの書きはやめて、あとはのんびりと、と思つていたのですが、やはり書くことは楽しい。世にも書きのタネは尽きまじ。

男は起き上がり窓に向かう。女との会話をこれ以上続けたくなかった。いつもなら女の言うことが正しく自分が間違っていたと謝るだろう。謝れば自分が間違っていた事を認める事になる。かといってこのまま突っ張っていれば折角の旅行が険悪な雰囲気になる。

窓を開けると凜とした空気が部屋に入り込んで来る。初夏とはいえ標高の高いこの避暑地は朝晩の冷え込みに驚く事もある。

近くの湖から霧が流れ出ている。この時期は必ず毎朝霧が出る。男は高校一年の夏休みに友人の昌巳と新宿発の夜行で早朝此処に降り立って、その幻想的な雰囲気魅了された。白の中に全てが飲み込まれ足元も見えない。真綿の中に包まれ現実の世界を忘れる。が、いきなり白の帳の向こうからけたたましい鳥達の鳴き声が出て現実呼び戻される。時折風が流れ一瞬湖面が見える。林道の所々に掛けられた木の橋の上を歩きながら、まるで湖面を歩いていると錯覚したものだ。

ホテルの周りの白樺の木々が霧の中に溶け込み緑の梢までも白濁の中に隠してしまう。白は新しい色、白は全てを隠す色、白は哀しみの色、白はあなたに染まる色、そして白は男にとって特別な色……。

東にある山並みもその姿は霧に隠れている。白く輝きを失った生気の無い太陽が霧の裏側に申し訳なさそうに昇る。「シャワー、浴びてくる」男は女の横を通りバスルームに向かう。もう少しだったのにと思いながら。

三

不思議な関係が続けて半年が過ぎようとしている。周りからは間違いなく仲の良い似合いのカップルと思われる。確かにそうだとも男も女も思っている。しかし周りは二人の事を何も分かってはいない。誰にも話す心算は今のところない。当事者の預かり知らぬ所で何を噂されているのかなど一々気にしてもいられない。

バレンタインデーの夜の些細な喧嘩がきっかけだった。馴染みのレストランを予約してシャブリを飲みながらコースを食べた。いつもなら男のマンションに行くのだがその夜は女が嫌がった。

「食事してセックスして、なんだかそれだけの私達？」  
「なんだよ、今更」

「何かねえ、三年もそうして来たけど、何だか嫌なのよお」

「何が？」  
「何がって言われてもこれだとは言えないけれど、今日はしない。したくないの」

っている。母親に叱られた男の子の様に哀しげに男には見える。

二

「ねえ、ねえたら」  
男は二度寝をしてしまった。女が男の体を揺すっている。男が漸く目を開けた。

「何だよお、良い所だったのに」  
「何よ、良い所って」  
「それは内緒さ」

男は女の問いをはぐらかして枕元から煙草を取り出して火を点ける。大きく吸うと胸に暫く溜めてから横を向いて煙を鼻から出した。

「もう、煙草は止めたらあ、値上がりもしたんだし、煙草は百害あって一利無しよ」

「お前までそんな事言うのか？ 寝覚めの一服に勝る喜びはないから、俺にとっては少なくとも一利はあるよ」  
「ねえ、お腹空かない？ もう食事の準備が出来ているわよね」

女は男の喫煙に対する自己弁護を聞き流した。男はベッドサイドの時計を見る。七時半を過ぎている。ホテルのバッキング形式のレストランは七時から開いている。

「何だよ、まるで俺がお前と会うのは体の為だと言っている様に聞えるな。ちょっとそれは心外だよ」

「ごめん、そう言う心算じゃないのよ。でもこのままだから関係が続けて多分結婚するわよね私達」

「うん、でもだからだらないだろう、だからだはさ」  
「ごめん、そう言う意味じゃないんだけど……そうしたら何ていうのかなあ、皆子供を期待する訳でしょ。特に親なんか早く孫が見たいとか」

「そうだなあ、孫を見たくないと言う親はあんまりいないよな」  
「そうなるよね、私達は生殖の為に結婚する事になっちゃうじゃない」

「何だよお、そんな事考えていたのかあ、分からない女だなあ。俺はお前が好きだから……」

「そのお前って、人を物みたいに言わないでよ。それも嫌なの。貴方の所有物じゃないんだから」  
「分かったよ。今日は帰るよ。送っていかないよ」  
「うん」

その夜以来、男は女に求めるのを止めた。女の方からも求める事はなかった。

男は決意した。女の偏屈な考えを変えるには体だけが目的で無い事を分からせなければならぬ。絶対にこちらから求めない。頑固な女にはそこ迄しなければ駄目だ。

女は男の決意などわかる筈はなかった。が、男と一緒にいるのは楽しかった。話題が合うし、ちゃらちゃらした今の若い男とは違う。本もよく読んでいるし、頭の良い所が好きだ。

二人はバレンタインデーの後もデートを重ねたし二人だけで旅行にも出掛けもした。が、食事をして話をして枕を並べてただ寝るだけだった。手を繋いで歩くしある時は女が男に甘えて腕を絡める事もあった。たまにはキスもした。が、体の関係だけは持たなかった。持たなかったと言うのか持てなかったのか。男の意地があった。女のエゴもあった。何となくお互いに改まってその訳を訊くのが憚れていた。ただそれだけの事に過ぎなかった。殊更それを取り立てて話す必要はなかった。ただそれだけの事だ、ただそれだけの——男も、女もそう思っていた。

#### 四

もう少しだった。男は女以外を抱くのを嫌悪した。女に操を立てるとか倫理観からそうしていたのではない。金を出せば簡単に男に体を任せる女がいる場所は知っている。昔はそういう場所の世話になったのも事実だが女と知り合ってから当然のことながら足が遠ざかっていた。他の女、それも商売女を抱く気になれなかった。それでいて他の

は今でも男の脳裏に浮かぶ。それ以来男は粒状の食物を食べられなくなった。鱈子、イクラ、カレイの煮付けに出てくる卵。粒粒が銀蠅の産み落とした白い蛆を連想させる。男は思った。俺も死期が迫った事を知ったら苦しみながらも命を残そうとするのだろうか？

銀蠅を潰した夜「サルセン小僧」と、周囲から声が聞え出した。周りの仲間が指を指して男を笑っている夢を見た。猿にセンズリを教えると死ぬまでやるのだそうだ。男も猿と同じだと思われているのではと思った。それで絶対にマスはしないと決意した。

しかしそれが大きな理由ではなかった。十日後に夢精した。それが余りに気持ちよかった。あの蕩ける様な気持ち良さはマスを男に馬鹿らしくさせた。それがマスをしなくなった一番大きな理由だった。

高校三年で彼女が出来た。それ以来女には不自由無く過ごして来た。以来夢精の気持ち良さを経験していない。

もう少しだった。もう少しであの気持ち良さが体中を駆け巡る所だった。それなのに女に起こされてしまった。今夜辺りにその最高の時がやってくるだろう。下半身の疼きがそれを教えている。

夢を見たい。夢の中で俺は最高の女を抱いている。俺の理想の女で俺の命令に忠えてくれる。ある時は長い髪をベッドのシーツに緩やかに広げて男を見つめて挑発した。あ

女と懇ろになりたいと思う程女を忘れる時間はなかった。半年間肉体関係は持たなかったが女とは殆ど毎日会っていた。他の女と出遭う機会は皆無だった。その上出遭いたいとも思わなかった。

マスは高校二年の夏休みに止めた。背中から頭に掛けて白い桶妻が走った後の虚しさ。一瞬頭の中が真っ白になる。それを繰り返すと取り返しが付かなくなるのではと不安になった。真っ白な頭のまま馬鹿になると思った。多い時など一日に五回もした。特にテスト勉強で徹夜した時の夕方はちよつとの刺激で勃起した。

「疲れマラって言うんだよ」

昌巳が得意げにそんな話をした。動物の遺伝子に情報として伝えられた本能なのだ。体に危険を感じるとそれだけ子孫を残さねばと男性ホルモンが活性化して精巣に指令を出すのだそうだ。

成る程と思える経験をもはした。部屋の中を飛び回っていた銀蠅。殺虫剤が見当たらず、手元にあったプラスチックの物差しに輪ゴムを引っ掛けて窓ガラスに止まった所を狙った。二度三度外れてやっとな潰した。窓ガラスに飛び散った銀蠅の残滓をティッシュペーパーで拭こうと近づいて、白い小さなものが動いているのを見つけた。断末魔の中で銀蠅が産み落とした蛆だった。白い小さな蛆の動きは男の手を止めさせた。血の赤の中に蠢く白のコントラスト

る時はショートカットの髪を金色に染めて豹柄の殆ど下着としての用が成さない布切れを巻きつけて四つんばいになって挑発した。ある時は黒の革の下着に黒のアイマスクを装着して細いガラスのヒールを履き男を弄んだ。夢の中では男は最高の男になれた。どんな女も男の自由になった。

今夜夢精したら女を求めよう。

女はどう思うだろう？

#### 五

「夢を見損なつたよ」

「ええっ？ 夢を？」

「うん、夢をね」

「そう」

女は哀しそうに目を男から逸らすと下を向いた。細く長くしかも白い指を組んで手持ち無沙汰に落ち着き無く動かし続けている。女の指は朝霧に隠れた白樺の梢の様に生氣がない。

男は女の憔悴振りに慌てた。そんなに責任を感じているのか？

「ごめん、大丈夫だよ。また見れるさ」

「また見るってどういうこと？」

「いや、何でもなし」



危ないところだったと男は思った。夢精の事は女に隠しておかねばならない。気持ち良さの後の気持ち悪さ。目の前に何の前触れもなくぶつけなければならぬ。それが男の計画だった。

それにしても女は何故あんなに悲しそうな顔をしたのだろう。男はバツが悪くなり部屋に居辛くなった。

「ちよつとその辺歩いてくるよ」

「私も行く」

男は拍子抜けした。女の哀しみは何だったのだろうか？

朝といい、今の会話といい、私は勘違いしているのかな——と、女は思った。彼が言っている夢って私の思っている夢と違っているのかしら……と。

男は女の哀しそうな顔に責任を感じていた。今迄一度も見せたこと無い哀しい顔だった。「夢を見損なった」と言うべきではなかったのだろうか？ でも本当の事だ、嘘で塗り固める生き方は自分には似合わない。今迄もそうして過ごして来た。自分の生き方を変える訳にはいかない。たとえ女に嫌われよう。嘘で塗り固めた自分を好きだと言う女には一生本当の自分を見せられない。そんな窮屈な人生など送りたいくない。本当の自分を見せてそれが好きだと言う女を選べば良い。それがお互いの為だ。決して我儘だとは思わない。

女が男を見て笑う。男も女につられて笑う。この女を守りたいと思う。この男に付いて行きたいと思う。二人の思いが一つに絡まる。ウグイスを探して見上げた女の顔に木漏れ陽が揺れる。

「御免ね、夢を見損なつたのは君のせいではないから」

男は歩く先を見ながらぼつりと言う。女が見上げていた顔を男に戻して小首を傾げる。

「私勘違いしていたみたい」

「何の事？」

男の右手に女は両手を絡める。

「私、妹の夢子の事だと思つてたの」

男は大袈裟に首を大きく縦に振る。

「そうかあ、夢は今どうしているんだろう」

どうせ車だからと女の双子の妹を連れて来ていた。もちろん部屋は違う。

「テニスでもしているんじゃないかしら。夢子も華子も二人とも今はテニスに夢中だから」

男は先程と朝の会話を思い出していた。夢を見損なつたでは確かに姉として一言言いたくなるのも分かる。哀しい表情をしたのも納得できる。同じ時刻に夢を見たと言っていたなあ……。朝方、五時前に夢を男は見た。同じ時刻？ そんなに朝早く夢子を女が見たと言うのか。夢子は何をしていたのだろうか。そんな朝早く。女も女だ、そんな朝早

夢の中で泣いた事がある。一人しかない祖母が死んだ。その時の事を夢で見て泣く。それ以外の夢では決して泣かない。

男は女に話したことがある。「まだ貴方の中にお祖母さんが生きているのよ。最高の供養よ。優しいのね、貴方つて」と、女は男に答えた。女にはありのままの自分を見せってきた。女々しいと思われようと涙で目覚めた朝、理由を話した。でも……もしその時傍に女がいなかったら果たして話をしていただろうか。自分のありのままを見せると言うのも自分の都合でと付け加えなければならぬのかとも思う。

都合で話したり話さなかつたりするならばそれをありのままの自分を見せると言えるのだろうか？と男は少し悩んだりもする。

## 六

二人は何も話さずただ歩いていった。男が何を考えているか女が何を考えているか互いに詮索する事もしなかつた。男も女もただ歩く事に没頭していた。クマゲラが啼いている。ウグイスはまだ上手く歌えない。ホーホケで止まってしまう。

「オオボケって聞えたわよね」

く何処で夢子を見たと言うのだ。

男は女の顔を見つめた。女は男を見ようとしなかつた。

男の疑惑と女の秘密が絡みあつていった。ウグイスがまた啼いた。相変わらず上手く啼けない。女は梢にウグイスを探した。男は女を見つめ続けていた。

男は自分があるのままを見せていたのだから女にもそれを望んでいた。女が嘘をつく事は無いと信じていた。でも——と、思う。女の事を本当は何も知らないのではないか。自分だつて全て話していないのも事実だ。夢を見て泣いた時だつてそうだ。その場に女がいたから話しただけだ。女だつて多分一々報告されたとしても聞き流す事もあるだろう。

真実とは何なのだろう。正直だとはどういう事だろう——と、男は思う。自分の事だつて分からない時もある。分からない自分を分からないまま語つたとしてそれが正直な事なのだろうか？ 今思つた事が次の瞬間に百八十度がらりと変わる場合もある。

今、女に話していない秘密の計画もある。気持ち良さの頂から谷底に落とされて目覚めた後の気持ち悪さ。その場に女にどうしても居て欲しかった。百八十度がらりと変わるその刹那を見て欲しかった。理性が及ばない男の男としてのそのまますみを見せたいと願っていた。

眩しさに額に右手を上げた。木漏れ陽が男の目元に揺れ

た。女は相変わらず梢を見ていた。女の顔は緑の翳の中にあった。

七

湖畔に着いた。ぐるりと湖を回る周囲五キロの遊歩道が続いている。湖面を流れて行く風が所々に小波を立てている。黄色い手漕ぎボートがオールをたてながら軽やかに沖に走っていく。

岸辺には木々の緑が影を落としている。白いペンキが剥がれた木のベンチに男は腰を落とす。女は男の脇を通り過ぎて水辺に進む。小さな波が打ち寄せる。女は腰を屈めて手を湖水に入れる。男は女を眺め続ける。

ポケットから煙草を出して吸う。風に乗って紫の煙が流れて行く。女はサンダルを脱いで湖水に入って行く。スカートを少したくし上げて白い脚を見せている。湖面に女の影が映る。女の影が小波に千切れる。

ツツウと音を立ててシオカトンボが男の頬の横を通り過ぎる。あんな薄い羽根が立てる羽音。女の足元につながったトンボが卵を産み付けている。ツツツツと水に腹を付けてはまた飛んで行く。

ツツウとツツツツの間で男は女と対峙している。女は男の視線を感じながらも知らない振りをしているよう

八

に見える。張り出した梢の向うに夏の空が広がる。白い雲が眩しい。白は新しい色、白は全てを隠す色、白は哀しみの色、白はあなたに染まる色、そして白は男にとって特別な色……。

トンボはあるがままに生きている。自分の命を次の代に繋げようとしている。ただそれだけの事だ。ただそれだけの事で女と暮らせたなら男は思う。

トンボの尻から白い卵が落ちるのを見た気がした。窓ガラスに潰れた銀蠅の残滓の中に蠢く白い蛆が脳裏に蘇った。昌巳がやりとしながら言った言葉が耳元で何度も響いた。疲れマラ……。

女に声を掛けずに男は歩き出す。振り返って女の様子を見るが女は男を気にはしていない。男は溜息を吐くと右回りに湖の周りを歩き出す。陽に暖められた夏草から陽炎が登る。草いきれの中早歩きで歩くと直ぐに額に汗が浮かぶ。時折湖面からの風が男の頬を撫でる。

男は尚も歩く。無心に今は歩くことだけに神経を集中する。疲れる為に歩く。自分の命を未来に繋げる為に疲れなければ駄目だ。耳元で昌巳が吠えている。

「気が付いたらいないんだから。ホテルに戻ろうと思ったけど、もう少し歩くのも良いかなと思ってね」

「でもよく反対側から歩いてきたね」

「だって貴方って几帳面だから右回りだと思ったの」

「几帳面だと右回りなのかい」

「うふふふ、女の勘よ。それに貴方の事これでもかなり理解している心算よ」

男は女の言葉を嬉しく思う。嘘でも理解していると云ってくれた事がただただ嬉しい。女の細い腰を抱き締めて口付けをする。下半身の疼きは抑えられない程昂まっている。

「嫌だあ」

女が腰を引く。男の強張った下半身に目をやる。

「ごめん」

何と言えば良いのか分からず思わず男の口から出た言葉。女はぶいっと踵を返すと来た道を早足で逃げて行く。男は女を追おうとしない。その場で興奮を鎮める。空を見る。相変わらず白い雲が眩しい。疲れマラと囁く昌巳の言葉が襲い掛かる。白い雲の中に夥しい数の蛆が蠢いて見える。

男は目を閉じ深呼吸してから歩き出す。女はまだ男を受け入れようとしていないのだろうか？ それともその逆だったのか？ 今夜間違いない夢精すると男は確信してい

後もう少しで一回りだと思った。女が左の草むらの向うから歩いて来た。こちらに向かつて大きく手を振っている。可愛い女だと思ふ。周りに人がいなくて良かった。顔に朱みが差すのが分かった。下半身が疼いている。疲れ……昌巳の得意げな顔が脳裏に浮かぶ。

「置き去りにするんだもの」

女が頬を膨らませて拗ねる。その頬を男が突つつく。

「だって、君が余りに気持ち良さそうだったし。そっとしておこうと思って」

た。何処からか栗の花の臭いが流れてきて男の鼻腔を擦った。

九

ジャズにアレンジされたビートルズの曲が静かに流れていた。ロビーには大きな水槽が置かれている。高原なのにカラフルな南の海をイメージした水槽で、イソギンチャクの中でクマノミが体を擦りつけている。枝珊瑚の上にはコバルトブルーのデバスズメダイが群舞している。人工の光が南の島の浅瀬を演出している。岩の陰には小さなフリソデエビが砂を掬っては餌を口に運んでいる。女は水槽を背にしてソファーに座りエントランスを見ていた。空調の利いた建物の中は火照った身体に気持ち良い。汗がスーッと引くのが分かる。

「ごめんね」

男が反対側に座ると女が声を掛けた。

「何か飲まないかい？」

男は女の言葉を無視して飲み物を訊く。パツが悪かった。

口で幾ら言っても矢張り女を求めている雄である事を見破られてしまった。でも今夜それが全て女に説明出来ると思う。その後の事は分からない。分からないが自分が半年続けてきた禁欲生活を女に知らせたかった。

「クマノミと言ってもこれはハナクマノミって言う種類なんです」

「ええ、知ってますよ。とても愛らしく見えるクマノミだけど、縄張り意識が強くてダイバーが近付くと歯をカチカチ鳴らして威嚇するし手に噛み付いたりもするんですよ。二番目に大きなのが成熟した雄で、あとは全て子供だって知っていました？」

「へえ…それは知らなかったです」

「もう一つの無駄知識、交尾する魚がいるんです」

「魚が交尾？」

「ええ、私も信じられなかったんですが、カサゴって交尾するんですよ。でね、雌の腹の中で子供になって生まれてくるんですよ」

「本当ですか？」

「ええ、伊豆の海洋公園というポイントに潜った時にガイドに交尾の瞬間を見せてもらいましたよ。中々見れないらしいのでとても貴重な体験でしたね」

「魚がですか？」

「はい」

「どんな風に？」

「雄一匹の縄張りに雌が五匹ぐらいいて、雄はそれらの雌達に次々に求愛ダンスをして回るんです」

「求愛ダンス？」

「ううん、私シャワー浴びたい。汗かいちゃった」

男は女の誘いだと思った。女も求めているのだ。でも計画がある。この日の為に我慢して来たのだ。無に出来ない。

「じゃあ、先に部屋に戻っててよ。喉が渴いたから、アイステイーでも飲んで行くよ」

女は一瞬怪訝な表情を浮かべた。が、直ぐに立ち上がりフロントで鍵を受け取るとエレベーターに向かって行つた。

男はウエイトレスを呼んでアイステイーを頼んだ。下半身が再び熱くなっていた。

水槽を見ながらアイステイーを飲んでいた。

「数年前のデイズニー映画の人氣で……」

男の横に顔見知りの支配人が来て話し始めた。男はちらりと支配人の顔を見ると頷いた。

「クマノミって最初は全て雄なんですって知ってました？」

「うん。これでもダイビングするので魚には少し詳しいですよ」

「それはそれは……。お客さんに『雄の中で一番大きなのが雌になるんです。性転換するのです』と話すとても興味を持たれるんですけど」

「そうでしょうね」

「ええ、左右に細かく体を揺らしながら雌の体に寄り添うんですよ」

「それが求愛ダンス」

「で、雌が少し浮かぶと雄が腹を雌に押し当てながら上昇して交尾するんです。一瞬ですよ」

「一瞬ですか」

「一瞬です。でもその後雄はくりりと一回転して胸鰭で雌の生殖口を押さえて精子が流れるのを押さえるんです」

「へえ…まだまだ知らない事ってあるんですね」

「そうですね」

支配人のお陰で興奮が鎮まった。支配人は水槽を黙って見つめていた。これから水槽を見る客への説明に一つ知識が増えたのを喜んでいるのかもしれない。無駄な知識などはないのだ。まだまだ海の中の話はしようと思つたら出来たが知識をひけらかしていると思われるのも嫌だったので止めた。

十

部屋に戻ると女がバスローブを纏い髪を乾かしていた。

男はその脇を通りバスルームに向かった。女は鏡から視線を動かさなかった。何かに怒っている様だった。男にはその理由が一つだけ分かっていた。が、自分で決めた計画を

是が非でも最後迄遣り遂げたかった。それが女に対する男の愛情だと思つていた、……独善的にも。

シャワーから出ると既に女は化粧を終えて着替えも済ませていた。

「夢と華の部屋に行つてくるね。夕飯はどうするの？」

「二人に訊いてみて。ホテルでも良いし町まで行つても良いよ」

「時間は？」

「君らに任せるよ」

「分かつたわ。もしも外に出る時は内線で知らせてね」

「ああ、分かつた」

男は本を取り出した。テラスに出てリクライニングチェアに体を埋める。野鳥の啼声、風の音、蟬の声、自然の中で本を読む。何にも束縛されない自分だけの贅沢な時間。

本を読み始めると睡魔に襲われた。顔を本を被せてまどろむ。途切れ途切れに野鳥の啼き声が耳に届く。

女が夢の中に出て来た。エントランスロビーのソファにバスロープ姿で座っている。男が近付くとバスロープの前をはだけける。その下には何もつけていない。組んだ脚を大きく組み替える。男は大きな音を立ててごくりと唾を飲み込む。

その音に目が覚める。危ない所だった。眠気防止にコー

っているの。此処からなら歩いても十分ほどで行けるみたいだし、どうかなって思つて」

「歩いて行けるならワインも飲めるな。いいね」

「結構人気があるみたいで予約した方が良くと思うの。七時でどう？」

「ああ、いいよ。じゃあ六時四十五分にロビーで」

「はあーい」

夢は電話を切った。それにしても男は思う。お兄さんと呼ばれている。姉妹で男の車で出掛けて来ている。女の両親も男の事を認めている。両親公認の関係だという事だ。

今夜の結果次第では兄で無くなるかもしれない。二度と夢にも華にも会えなくなるかもしれない。そう思うと少し寂しい気がする。

陽がかなり傾いた。西側の雑木木の影がテラス下の庭に伸びている。テラスに揺れていた木漏れ陽も今は無い。カナカナカナ……蜘蛛が夕方を告げている。黄色いアゲハ蝶がテラスの手摺に止まる。羽根をゆっくり動かす姿は深呼吸をしている様だ。動きにあわせて呼吸をする。男の呼吸のリズムが羽根の動きにシンクロする。一瞬アゲハ蝶の目と合う。

夜に変わる風で身震いして目が覚めた。テラスで転寝し

ヒーを頼んだ。五分で部屋の呼び鈴が鳴った。ルームサービスに係は背の高い金髪の若い女だった。何と一糸も纏わぬ姿で部屋に入つて来てコーヒーをサービスする。

ワゴンの上にコーヒーカップを抽斗から取り出そうとして腰を屈めた女を男は後ろから羽交締めにする。ウエイレスが悲鳴を上げる。

悲鳴がドアの呼び鈴に替わる。はっとして目が覚める。尚もドアの呼び鈴が鳴っている。今度は本物のルームサービスだった。入口でトレイを受け取ると伝票にサインをする。危ない所だった。疲れマラ、疲れマラ。男は呪文の様に繰り返す。

電話が鳴る。男が電話口に出る。

「お兄さん？」

まだ女とは結婚していないのにお兄さんとは何だか擦ったい気がする。

「その声は夢ちゃんか、華ちゃんか？」

流石に一卵性だけあつて区別が付かない。

「夢よ」

「夢かあ」

「何だか、変だなあお兄さん。私じゃ不服みたいに聞えたわよ」

「ごめん、ごめん」

「あのね、ガイドブックに美味しいイタリアンのお店が載

ていた。黄色いアゲハ蝶のいた場所にトンボが止まっていた。蝶は男を真似て寝床に戻つて行ったのだろう。トンボの腹はまだ赤くない。まだ秋迄は時間が残っている。これから籠の町に下りて行くのだろう。少しずつ腹の色を赤く染めて行きながら。

白樺の葉に朱味が差していた。西に傾いた夕陽の色だ。時計を見ると五時半を回っている。くしゃみが出た。油断をしてしまった。熱いシャワーを首筋に当てて冷えた体を温めようと男は思う。

髪の毛を濡らさない様に注意した心算だが洗髪したのと変わらない程髪の毛が濡れた。ドライヤーで乾かす。濡れたままで外に出たら間違いなく風邪を引きそうだ。

時間ぎりぎりになった。慌てて部屋を飛び出す。女は戻つて来なかった。妹達と一緒に出て来るのだろうか。

既に三人がロビーで待っていた。夢か華かどちらかが手を振っている。同じ髪型、同じ服を着ている。男には全く区別が付かない。右頬に出来る笑窪の位置が違うので見分けが付くと女は言うが男には笑窪があつたかどうかさえ思ひ出せない。



最後の太陽の光りが当たりそこだけ金色に輝いている。ど

うやら一雨来そうだった。ホテルの傘を借りた。レストランに着く頃に遠くから雷の音が聞えてきた。

タールの塗られた木が道から店の入口まで芝生の間に埋められていた。その上を歩いて行くと漆喰が無造作に塗られた外壁の小さな店が見えた。芝生の上にもテーブルが並べられて何組かがそこで食事をしている。店の中も外も皆テーブルの上にキャンドルが明かりを揺らしている。オーナーの趣味なのかなかなか小綺麗な店だと男は思った。

イタリアンはそこそこの味を出していた。自家製のハーブは香がとて強かった。裏の畑でコックの妻が栽培していて必要な量だけその都度採るのだと言う。採り溜めしないので香が逃げないのだとウエイトレスが説明した。

男のも採り溜め出来ない。だから臭いがきついのだ——と、男は心の中で思っていた。昔読んだ「料理人」と言うタイトルの奇妙な本を思い出していた。コックが自分のザーメンを調味料として使う。まさか此処ではそんなことしていないと思うが……。気持ち良さの後の気持ち悪さ。布団の中から立ち込めるむっとした栗の花の臭い。虚脱感に動けずそのまま眠り続ける。朝、目覚めると下着がゴアついている。陰毛が何かに引っ張られて痛い。慌てて風呂場へ飛び込む。朝シャンならぬ朝風呂。母親は薄々感じていたのだろう。下着を汚してしまった

恥ずかしさ、罪悪感。でも、あの気持ち良さは忘れられない。

前菜が出た頃に降り出した雨は激しさを増していた。遠くで聞えていた雷は近くになり時折窓ガラスを青く光らせている。

「お兄さん、怖い」

夢だか華だかが眉根を寄せる。女の時折見せる表情にそっくりだ。女にも笑窪があったらどうか？

「夕立だから、直ぐに上がるさ。少しゆっくりしよう」

男の言葉にウエイトレスが微笑み、空いたグラスに水を注ぐ。男はメニューを開き姉妹にデザートを選ばせながら夕立に対比する言葉を頭の中で弄んでいた。

運ばれてきたコーヒートを飲むとカップを持ち上げると店内の明かりが消えた。周りのテーブルで息を飲む音が聞えた。テーブルのキャンドルはその輝きを増した。

「すいません、停電のようです」

黒のバタフライを白のワイシャツの首元にきつちりと締めているオーナーと思われる中年の男が客に声を掛けた。雷は尚も近付いて稲妻とほぼ同時に雷鳴がなっている。その度に薄暗い店内に明かりが入りキャンドルが揺れる。

停電は二十分程続いた。電気が戻ると雨が上がるのが同時だった。雷も東のほうに遠ざかって行った。

「1、2、3……」

外灯で照らされたホテルは雨で洗われた様で白い壁が明らかに白さを増している様に男には思えた。ひよつとした暗闇が白さを引き出しているのかもしれないと女は思った。が、二人はその思いを口にできなかった。

エントランスに入ると水槽の周りに従業員が集まっていた。フロントで部屋の鍵を貰いながら何事かと男は尋ねた。女も妹達も水槽を気にしている。

「実は、先程の停電で魚達が死んで……」

背が高く頬骨が高い瘦せぎすの女性従業員が声を響めて答えた。水槽の前で腕を組んで若い男達に指示しているのは支配人で男に気が付き頭を下げた。男は鍵を女に渡すと水槽の前に進んだ。女と妹達は原因が分かかって興味が無くなったらしくエレベーターホールに向かった。

「参りましたよ」

男に支配人が話し掛けてきた。

「全滅ですか？」

「八割方駄目です」

「停電は二十分程度でしたよね」

「ええ」

「そんなもんで死んじゃうんですかね」

「停電だけが原因でないみたいです。雷の音に驚いたのかもしれない」

若い作業服姿の男達はホテルのメンテナンス要員のよ

夢と華が顔を見合わせて数を数えている。

「何しているんだい」

「稲綱が光ってから雷が鳴るまでの時間を計っているの。音は秒速三四〇mでしょう。もう雷は五キロほど向うに行つたから大丈夫」

そう言つて笑っている。男がオーナーを呼んで支払いを済ませた。

十二

女と手を繋ぎホテル迄ゆっくり歩く。夕立が昼の暑さを奪い去り急に涼しくなっていた。女の産毛が逆立っているようだ。静電気がまだ近くに残っているのだろう。触れ合う二の腕に女の産毛を感じ妙に擦りたい。女の鼓動を産毛を通して感じる。女の鼓動と男の鼓動が重なり合う。

妹達は遠慮して男と女の前を声高に話しながら歩いている。町の大通りからホテルへの近道の脇へ入る。細い道の両側を水がチロチロと流れている。激しい雷雨は脇道の土砂を削り取つたと見えて大きな石がごつごつと剥き出しになっている。男は女を氣遣つて繋いでいた手に力を入れる。女がそれに応える。時折頭上の葉に残っていた雨が落ちて二人の顔を濡らす。二人は見詰め合つて女がうふふと笑う。

うだ。水面に浮かんだ魚や、水流を作るポンプの吸い込み口に挟まって動かないクマノミを網で掬っていた。網がクマノミを守っていたイソギンチャクに触れて裏の裏を見せた。男の目に夥しい数の朱色の卵が見えた。

死ぬ間際にクマノミは卵を産み付けていた。水槽の下が心持ち白く濁っているのは雄が放精したのだろう。底の白く濁る水に男の目は釘付けになった。

## 十三

男は部屋に戻った。女の顔が朱いのに初めて気付いた。襟ぐりの大きく空いたブラウスから見える胸元も朱い。冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを取り出す。キャップを開けてそのまま口を付けて飲む。ワインの酔いが少しだけ鎮まる。

女が男に抱き付いてくる。男は女を抱き締める。甘いイタリアンワインの香りが女の口から漏れる。男はその香と女の唇と一緒に吸う。激しく吸う。女は目を閉じたまま男に身を任す。

疲れマラ……昌巳が耳元で囁き始める。男は慌てて女の体を離す。イソギンチャクの襞の裏にびっしりと産みつけられた卵を思い出した。トンボの腹から落ちる白い卵を思い出した。銀蠅が産み落とした白い蛆を思い出した。こんな女との関係はひっくり返って脚をばたばたさせるしかないカブトムシと同じだ。カブトムシを男は暫く見続けた。洗面所からドライヤーの音が聞えてきた。女が髪を乾かしている。冷たい水を浴びようと男は思った。最後にカブトムシを見るとサッシの縁から下に落ちそのまま何処かに

なとこで誘惑に負けられない。もう少しで計画が遂行されるのだ。

「どうしたの？」

荒い息で女が訊く。

「いや、今日は止そう」

男も荒い息で応える。

「何故？」

「自分の為」

「自分の為？」

「そう、これだけは曲げられない」

「貴方のエゴというの」

男は何も答えず女から離れて窓辺に向かいカーテンを引いて窓を開ける。網戸越しに夜風が入り込む。光に誘われて虫が網戸に群がる。ブン：大きな音がして網戸が震える。カブトムシがサッシの縁でひっくり返っている。脚を動かしているが中々起き上がる事が出来ない。

女は暫く男を見ていたがベッドからバスローブを取るとバスルームに向かう。直ぐにシャワーの音が聞えてくる。

男はカブトムシを見続ける。もがいてももがいてもひっくり返ったままのカブトムシ。助けてやりたいが網戸を開けると虫が部屋の中に入ってくる。平らなサッシの縁は引つかかる手がかりが無い。まるで自分の様だと男は思う。

飛んで行った。

男の耳に大きな羽音が残った。大きな羽音が昌巳の笑い声に変わった。長い夜になりそうな予感がした。

## 受賞の言葉

## 梨場真人

その日、左下の親知らずを抜いた。かなり時間がかかった。医者も疲れただろうが私も疲れた。上唇も下唇もそして舌まで痺れた状態で帰宅した。今にして思えば思考回路も少し痺れていたのだろう。

「文芸思潮の五十嵐ですが、この度は優秀賞おめでとうございませう」

五十嵐編集長より受賞の知らせの電話だった。ところが、文芸思潮13号に掲載された前の作品の事だと勘違いした。

「はい、その節は有難うございました」

「今回は、当選作品に該当がなく、優秀賞が五作品で、梨場さんの作品が優秀賞に選ばれました」

「はあ」

「ああいった世界を書かれたのは梨場さんしかいなく、私ともう一人の選者で推したのですが……最後のもう一ひねりがあれば、当選したかもしれませんねえ」

「私も、最後のところが……」

「それにしても、あんなテーマで書ける力に驚きました」

「はあ」

「それでは、作品と、プロフィールと、受賞の言葉と写真、また送ってください」

私はその「また送ってください」と聞いて初めて第三回銀華文学賞の事だと知った。と言うのも、昨年は選考結果が郵送で届いていた。今回は何も連絡がなく正直なところ半分諦めていたのだった。

小説を書き始めて三作品目で初めて奨励賞を受賞した昨年の「バンザイクリフに沈みゆく夕陽」。私の小説の師匠である伯父に喜び勇んで報告した時に、もつと哲学を入れないと駄目だと一蹴されて、今回はがらりと違った作品で挑戦した。かなり突っ込んだ作品なのでどのように評価されるのか正直言って不安があった。

電話を置いてから喜びが体中に広がった。叔父の言う哲学を入れられたかどうかはまだ不安が残るが、これからも切磋琢磨して書き続けたいと思う。「最後のもう一ひねり」を忘れないで……。評価していただいた選者の皆様有難うございました。

## 天窓の下

## 楡木啓子

夏のあいだ賑わいを見せていた色彩は影をひそめ、枝に白い帽子を載せた木々だけが柔らかな表情を見せている。が、背を丸め足早に歩く文の目には何も映っていない。足下の動きにならってまだ踏み締められていない氷混じりの雪が横に流れ、その度に六十歳半ばの小柄な体も左右に揺れた。

猿山の横を通り過ぎようというとき、はじめてそれと分からぬほど微かに頭を上げたものの、一瞥をくれただけで別段足を緩めるふうもなく、文は目指す獣舎へ向かった。いくら歩かないうちに囲いの前に立った。

降り積もった雪が全てを覆っていた。主の気に入りの高い場所にもこんもりと雪が居座っている。どう目を凝らしてみても、足跡の一つもなかった。

思いも寄らなかった光景に、文は途方に暮れていた。少しして、真冬にゴリラが外にいるはずがないと気付いたが、昨日からのことが、こんな当たり前のことさえ分からぬほど自分を逸しさせているのだと、恐れにも似た想いが襲ってきた。

足下の雪が揺らいでいた。うねりの幅が大きくなり、内からドクドクと鼓動が聞こえる。その響きを打ち消すかのように、バサツという音がして、雪が文の顔に降りかかった。

頭上で、細い木の枝が揺れていた。

大きく息を吸い来た道を戻ろうとして、屋内館への案内図が文の目に留まった。矢印に従い裏手へまわると、「類人猿館」と書かれた建物の前に出た。体についた雪を払い、

頭の中を、昨日の佐伯の声が響いている。

ドアに手を掛けた。

館内は暑すぎも寒くもなく、通路と獣舎は分厚いガラスで仕切られている。そのためか、拍子抜けするほど動物特有の匂いは感じられなかった。

出入り口近くはまだ若いオランウータンの檻で、目指す相手はその隣にいた。

ベンチに腰を下ろし、文はいちだんと高い場所に座るゴリラを見上げた。

高く隆起した眉の奥から、二つのビー玉がこちらを見ていた。

見慣れた薄茶のビー玉は、室内ではほとんど黒に近い褐色で、瞳とあいまって暗い光を放っている。

「しばらくだったね……。柵のうしろにこんな部屋があったんだね」

ひとつこ一人いないのを幸いに声をかけてみても、聞こえているのかいないのか、その表情が変わるのを読み取ることはできない。

頭上の大きな天窓の下、ゴリラは丸太のような両腕を抱えじつと座っている。二十数畳ほどの空間がゴリラにとりどれほどのものかは知らないが、なすこともなくただ座っている姿は惨めに見えた。

次第に文は、ガラスの向こうにいるゴリラがそのまま自分のように思えてきた。

\*

「文さん、やっぱりあなたはすごい女だよ。一人息子を東京に出したんだからなあ。そうそうできるもんじゃないよな」

「仕方がないですよ」

転動なんだから、と続けようとして、文は佐伯の次の言葉にそれを慌てて飲み込んだ。

「しかしなあ、勇ちゃんから東京への転属願いの話を聞いた時には正直驚いたよ。嫁さんの親が寂しがつるって言ってもなあ。あちらは二人でこっちは文さんだけなんだから」

体中の血が勢いよく流れ、胸の辺りではじけた。

「まあ、それでも文さんが承知のことを私ごとやかく言うのもどうかと思ってね。それはそれとして、今日は頼みがあったんだよ。あんたの家でね、若い者を三人ばかり置いてもらえないかね。勇ちゃんたちがいなくなつて、こも一人で住むには広すぎるだろう」

優しい嫁さんをもらつて子供たちがいっぱい家にしようよな、母さん

帰る佐伯には、考えさせてくれと言つたような気がする。

茶の間に座っていると、二階の和室から、換気孔のカタンカタンという音がした。

春の異動で勇一夫婦が孫の大輔を連れて慌ただしく引越したあと、文は住み慣れた家が様々な音を立てるのを知った。

ポイラーや暖房器具が温度差からときおりカンカンとい、柱時計は、ボンボンという前に打ち鳴らす準備のためか半呼吸をする。その少しの間で、聞き慣れた音が始まるのが分かった。

同じように、骨董品と言われながら手放せないできた古い電話のベルが鳴る前も、かすかに空気を震わせる気配があり、何をしていても文はそれと気づいた。

ただ、柱や壁がきしむのにはいつまでも慣れず、心持ち身が縮まった。

佐伯との付き合いは、もう何十年であろう。夫の同僚のなかでは一番気が置けなく、五歳の勇一と三十三歳の文を残し夫が膀胱癌で亡くなったあと、なにかと力になってくれていた。初めのうちこそ幼い勇一が不憫で、外に出るよりはと仕立物の内職とわずかな蓄えでどうにか暮らしていた文が、勇一が小学校に上がるころ思いもよらぬ良い働き口を持てたのも、佐伯のおかげだった。

何より条件がよかった。勇一共々住み込みでかまわないというのだ。佐伯の遠縁にあたる老婦人が脳梗塞のため休

の視線に気付いたのか、こちらを見上げ、ニコツと笑いながら、繋いでいた手を強く握り返してきた。

それは、「母ちゃん、だいじょうぶだよ」とも、「母ちゃん、だいじょうぶかい」ともとれた。

はしゃぎ過ぎと思えるほど笑いながら、文の手を引き動物たちを眺めていた勇一の足が突然止まった。

子の毛づくろいをしている母猿、賑やかに奇声を上げながら走り回る小猿たち、辺りを威嚇するかのようによく大猿など、猿山の前で、勇一は長いこと動こうとしなかった。

柵に凭れた勇一の小さな体が、陽が傾くにつれて茜色に染まっていた。

その背を見守る文の顔も、染まっていた。それからは幾度婦人に勧められても、気持ちにはあがりたかと思うものの、出かけようという気にはなれなかった。その代わりと言うのものはばかれるが、仕事のあいまに編み物の内職をすることを願った。これなら仕立物とちがいで、わずかな時間の隙間にも楽にこなすことができる。

給金に不足があるのかと訝しがった婦人に、文はいつか自分の家を持ちたいという夢を話した。子供たちと別居している相手には気がひけて言えなかったが、それは勇一のためであった。

が不自由になった。十分な資産はあるものの、頑固で我が儘な性格が災いし同居を申し出る子供たちがいない、という話であった。

住んでみると、思いのほか婦人との同居は苦にならなかった。確かに聞いていたとおりの気性のようではあったが、意地の悪いところがない。癩症であったり、そのときの気分次第で激することはあっても、そこに悪意はなかった。

勇一も、文がかわいそうと思うほど一所懸命静かにするようにと気遣っていたためか、ときおり部屋によれば、珍しい菓子などを両の手の平で包むようにして戻ってきた。

十分すぎるほど与えられる手当てのためだけではなく、文は骨身を惜しまず婦人に尽くした。働きながら同じ屋根の下で息子を育てられるというのは、何物にも替えがたい幸せであった。

世話をする動作ひとつにもそれが出ていたのである。一、二か月も過ぎたころ、婦人の方から、休みをやるから子供をどこかへ連れて行くようにと言われ、動物園へ向かった。が、その日がたまたま日曜日だったのがいけなかった。

父親の逞しい腕にぶら下がったり、肩車してもらっている子供が得意げな顔で母親に話しかけているのを見て、文は思わず勇一の顔を盗み見た。

口を半開きにして肩車を見ていた息子は、ほどなく母親が宅を出て以来、子供ながらに親の立場が分かるのか息を潜めるようにしている息子を、思いつきり伸び伸びさせたかったのだ。おなかの底から大声を出し、親子で笑い転げてみたかった。

数年の寝たきりの生活の後、婦人が亡くなったのはちょうど勇一が大学に入った年であった。寿命を終えようとする花が萎み朽ちていくように、最後は枯れ木のようになった体を横たえたまま、ひっそりと息をひきとった。

葬儀が終わりが帰ったあと、文は身内だけの席に呼ばれ型通りの礼を言われた。それがそのまま解雇通達である。早々に屋敷を出ることを考えねばならなかった。この時も、かねてから文の胸中を察していた佐伯がいち早く動き、一軒の売家を探ってきてくれた。

緩やかな坂に沿った住宅街の一番奥に、その家は板塀に囲まれひっそりと立っていた。中古ではあったが、部屋数の多いどっしりとしたたずまいである。玄關脇には、こぶりが形の良い山法師の木が小さな影を作っていた。

思い描いていた以上のものを目にし、初めはあまりに不相応とためらった文であったが、思ったより値が手頃であったのと、何より嬉しそうな勇一の顔が迷いを吹き飛ばした。

幼い勇一を抱えていた時とはちがいで、どこにだって働きに出かけられる。体力だって、まだまだその辺の若いもの



には引けを取らないだろう。もうひと踏ん張りするだけさと、決めたあとには、文の心はかえって弾んでいた。

せつかくの我が家で親子でゆつくりするというわけにはいかなかったが、その気になればいつでもかなえられる夢は、先に延ばすのも楽しみであった。

病院で付添婦をしながら、その相手も何人めかになるころ、勇一が大学を卒業し、これも佐伯の勧めで夫と同じ会社へ建築士として就職した時には、さすがに文も込み上げてくるものを押さえることができなかった。

病弱で入院を繰り返していた佐伯の妻が亡くなったのが、ちょうどこのころである。蒸れるような夏の昼下がり、文は佐伯に喫茶店へ呼び出された。

思い当たることはないわけではなかった。

所帯を持ったばかりのころ、夫が佐伯と連れ立って帰ってきた。

野菜の炊き合せに、干物、豆腐のみそ汁と、珍しくもない菜を前に上体を揺するようにして箸を運ぶ佐伯に、まるで子供のようだと、思わず文が微笑んだ時である。ふと顔を上げた佐伯と目があつた。

悪さを見つけた幼児が咄嗟に気をつけをするように佐伯は箸を置くと、

「いやあ、奥さん、びつくりしたでしょう。僕があんまり

声高な声が返ってきた。

少しでも自分の意に添わない事が起きそうになると、夫の声は徐々に高くなっていく。わかっではいたが、その時ばかりは後に引くわけにもいかず、

「奥さん、いい気持ちはしれないと思うのよ」

と、急いで付け加えた。

「なんだ、佐伯が来るのに文句があるのか。あいつのかみさん、病院を出たり入ったりなんだ。別に飯くらい構わないだろう」

そう言うなり、足音を立てて部屋を出て行った。

それから、邪気のない笑いを浮かべながら佐伯を連れてくる夫を恨めしく思いながら、文の方も、それ以上は言ひ出しかねていた。

赤子だった勇一が大人たちと食卓につくようになり、三人の夕餉が四人のそれに代わるころ、奇妙な関係も一応のバランスを保ったまま落ち着いていった。

だが、数年が立ち、夫が病に侵され亡くなってからは、食卓に佐伯が加わることはなかった。それは文の節度であり佐伯にもそう望んだが、文が口にするまでもなく、佐伯も同じように考えているようだった。

ただ、そうやって初めて文は自分の気持ちに気づいた。勇一との二人きりの食事、いつのまにか文の目は主のいない席に留まりその面影を追っていた。それが夫の席で

大食らいだから」

と言って、照れたように笑った。

「佐伯のところね、奥さんが入院しているんだよ。こんなのでよかつたらいつでも来いよ、なあ」

文と佐伯を交互に見て、最後は文の方を向きながら夫が高らかに笑った。それが、どこか得意げな気がして、窘めようと文が口を開きかけた時、それを制するように佐伯の大きな声が響いた。

「本当に美味い。お前は幸せもんだよ。奥さんを大事にしろよ」

あれから時おり夫は佐伯を誘い、佐伯の方も悪びれた様子もなく、文を挟んでの夕飯を楽しんで帰っていった。さすがに勇一が生まれてからは間遠くなっていたが、このころから、文はひょんな時に自分を見つめる佐伯の眩しげな視線に気づき始めていた。

最初のうちは、それが子を持たない男の、赤ん坊を産んだばかりの健康な女に対するものと片付けようとしたが、注がれるものが長く、熱を帯びてくるのに従って、文の方も息苦しさを覚えた。

「佐伯さんをあまり家に呼ばない方がいいんじゃない」

佐伯が帰った夜、勇一の襦袢を畳みながら思い切った口を開いた文に、

「どうして、別に構わないだろう」

なかつたことが、文をうるたえさせた。

思いが千千に乱れたまま、いつもの癖で足早に歩くうちに、文は目当ての喫茶店の前に立っていた。

窓にかかった薄いカーテンの向こうに、佐伯の大きな体が見えた。

グラスの水を飲み、タオルでせわしなく顔をぬぐっている。

他に客はいないようだった。

ドルフィンと描かれたドアをゆつくり開けると、ドアにぶら下がったベルがチリンと音を立てた。

こちらを見た佐伯の方へ歩きながら、

「すみません、お待ちになりましたか」

そう声をかけて、テーブルの上を見た。

いま来たところだという佐伯の言葉とは裏腹に、カップの底に乾いたコーヒーがこびりついていた。

店の女の子が文の前にもコーヒーを置いて去ったあと、「文さん、俺と一緒ににならないか、俺の気持ちは文さんも知つてのとおりだ。今更と思うかもしれないが、死んだあいつの席にすぐに滑り込むようなことは、やっぱりできなかったんだよ。それに、かたちだけの女房でも別れるとないと不憫だね、それでも、何度も話をしようと思った。でもなあ、文さんと勇ちゃんの間には絶対に入り込めないも

のがあったからなあ……今は勇ちゃんも一人前だし、もう力を抜いて俺に甘えてくれよ」

佐伯は一気にそれを口にした。

シャンパンの栓がポーンと勢いよく飛び出すように、佐伯のどこかの栓が抜けたようだった。

予想したとおりではあったが、佐伯のあまりの性急さに文は黙ってうつむいた。

数年前、勇一がよく口ずさんでいた曲が流れていた。

カウンターの向こうからは、電話で話をしているらしい女の子の忍び笑いが聞こえている。

甘えてくれよ——そう言われても、どこにそんなものが残っているのだろう、女が妻と母と女でできているのなら、今の自分は体の隅々まで母の部分に浸されているに違いないのだ。残りのわずかなかけらを慌てて拾い集めても、いつかテレビで見たロボットの動きのようにぎこちないものになるだろう。

スイッチを切り替えるには遅すぎるのだ。

どこからか、それでいいのか、という囁きが聞こえたような気がした。

いつのまにか音楽がとぎれていた。

顔をあげた文に、

「いやあ、悪いことを言っちゃったなあ。文さんは勇ちゃん一筋だものなあ。いやあ今の話は気にしないでくれ」

つのままにか文の体に忍び込み居座っていた。

それでも、答えはいつもひとつであった。

自分は間違いなく勇一との暮らしを取るだろう。女手ひとつで息子を育て、あれほど願っていた家まで持てたのだ。

これからは勇一と、やがてはその嫁と孫に囲まれた穏やかな生活だつてくるだろう。これ以上望むのは贅沢というものだ。

佐伯とのことは初めからなかったと思えばいいのだと、文はさわぐ気持ち横へ押しやった。

しっかりと流し台の縁に掴まっていなければ崩れ落ちそうだったあの夜が嘘のように、目を追うごとにそれはゆっくりと文の意識から締め出されていった。

何かの折に佐伯に会うこともあったが、相手の目の中に以前のように自分がいないのを認めても、寂しいとは思うものの、文の心はもう揺れることはなくなっていた。

ただ、時々一人でいるとき、口の中の飴玉をころがすように、切り取ったひとこまひとこまを思い起こし、懐かしんだ。

数年が過ぎた。勇一がじきに三十歳になろうというとき、一人の娘を伴って帰ってきた。

「母さん、この女、雪子さんっていうんだ。綺麗だろう」

そんなあとというふうには勇一の肩を軽く叩くそぶりをしながら、娘はすくい上げるようにして文を見た。

そう言うなり、佐伯は椅子を大きく引き、横のテーブルにぶつかりながらドアへ向かった。

出て行く佐伯の広い背中が汗に濡れ、白いシャツが肩甲骨に張り付いていた。

チリンチリンという音が残った。

それから半年もしないうちに佐伯は文の知らない女と所帯を持った。

「佐伯さんが結婚するんだってさ」

仕事から戻った息子のひと言に、「あつ」という声が文の口から漏れた。

台所に駆け込み、蛇口をおもいきり捻った。つかえ棒が、水飛沫とともに音を立てて倒れていった。

自らの手で外しておきながら、いつまでもそれがあると思っていたこちらの方が虫がいいのだ。

そうは思ってみても、体の中を冷たいものが走っていくのはどうしようもなかった。

「それでさ、母さん、祝いの品は何にする？ 特に式はあげないらしいよ」

茶の間から、勇一の屈託のない声が聞こえていた。

あれからしばらくのあいだ文は、胸の中にもぼっかり開いた穴の大きさを帯て余すことになった。

あの日に戻れたなら、自分はどうするだろう。気がつくとき、あの時佐伯を呼び止めていたら……という思いが、い

細面で、物腰も物言いも柔らかく、まるつきり自分とは反対の所にいるような娘を前に、文は息子にはぐらかされたような気がしていた。

どこかで、自分のような女を選ぶに違いないと思っていた自惚れがおかしかった。

ほんの少し、勇一に裏切られた気がした。

それでも、大輔が生まれたのを機に、文は仕事を止めた。やっと思いついて描いていた日がやってきたのだ。これからは息子たちの生活を快適にしてやろうと、心を砕いた。

ある日、外出先から戻った三人に、夕食の用意ができた。とドアの外から声を掛けようとして、文は立ちすくんだ。

「俺、こういうのにずっとあこがれていたんだ。お袋は働いただけだったからなあ」

「勇一って、かわいそう。でも、もうだいじょうぶ、私がいるでしょう」

ふっふっふっという含み笑いを背に、やっとおもいで息を整えた文が戻りかけたとき、追いかけるようにして雪子の声が聞こえてきた。

「悪い人じゃないっていうのは私にも分かるのよ……でも、何だか疲れるのよね。ほら、あなたのお母さんて、いつも針巻きして暮らしているみたいでしょう」

文には文なりの言い分があったが、仕方なかったじやないかとは言い切れないものがあつた。

遠いあの日、勇一は猿山の前から動こうとしなかった。あの時、勇一の目には何が映っていたのだろうか。

時計の針が九時を少し廻っていた。今ごろは勇一も食事を終えゆつくりしている頃だろう。佐伯が来たときから鉛が住み着いてしまったような体を引きずるようにして、文は電話に手を伸ばした。

「勇ちゃん、元気かい。ん？ 母さんはいつだって元気だよ」

自分の声がいつもと変わらないことに安堵し、それでもなお何気なく聞こえるようにと気遣いながら、佐伯の持ってきた話をかいつまんで告げた。

「でもねえ、私も歳だからね。思いきつてここを売っちゃって、老人マンションでも買おうと思つてさ」

「母さん……」

ひと呼吸があり、

「そうだな、こつちへ来ても誰もいないしな……母さんさえよければ好きなようにしなよ」という答えが返ってきた。

母ちゃん泣かないで、僕がいるから……ね

夫が息をひきとつた夜だった。勇一の柔らかな手が、文の頭の上に置かれた。

わずか五歳の息子の体にすがり、文は思い切り泣き崩れた。

「私のこと……知ってるんですか」

文の驚いた顔をよそに、どうということのないといった調子で男は続けた。

「いやあ、話すのは今日が初めてだけど、春からこつち、猿山の前で何度か見かけたもんだから。ほらっ、こういうところはお客さんみたいな人、珍しいから」

言われてみればそのとおりだった。動物園に老人一人は似合わない。

「そうですね。ずっと昔、小さかった息子とここへ来たことがあるんですよ。懐かしくてね……。息子は猿山が気に入ったみたいだったけど、わたしはこのゴリラが気に入って」

「ゴンがですか？」

「暖かいときだったから、表の方にいたんですよ。一番高い所に座って柵の外を見下ろしてました。『糞を投げますから気をつけてください』っていう看板があるでしょう」

「ああ、あれ、そのころもあつたんですか」

「私、思ったんですよ。どこで生まれたのか知らないけど、こんなところまで連れてこられて……、悲しいですよ。そりゃあ、誰かに糞でも投げたくなるだろうってね」

突然、飼育係の笑い声が響いた。

「いやあ、お客さん、違うんですよ。その逆、逆。あれねっ、面白がつてやってくるんですよ」

た。

受話器を戻し、手ごかの椅子に座り込んだあとも、文の耳元で、誰もいないしな、誰もいないしなと、勇一の声が繰り返して聞こえていた。

知らぬ間に小さな柔らかい手は大人の男の手になり、その中には雪子も大輔もすっぽりとおさまるが、自分の入る隙間はなくなっていたのだ。

受話器を置いた文の耳に、柱時計のボンボンという音が響いた。

今朝になり、雪子から電話があつた。

「お義母さん、老人マンションを買ってますって？ やめた方がいいですよ。実家の母から聞いたんですけど、お金を巻き上げたあと経営が悪くなってドロンする業者もいるっていうじゃありませんか。それより、こちらでアパートでもお借りになったほうが」

黒い電話線の向こうに、どちらが得かと算盤を弾いている雪子のつるりとした顔が見えたような気がした。

\*

「お客さん、来てたんですよ。元気だったですか？」

いつの間に入ってきたのか、飼育係らしい若い男が文を見ていた。

「……」

「糞を投げるとね、皆キヤアアって言うでしょう。だからゴンのやつ、そういう相手を選んでわざと投げてるんですよ。女の子たちとかカップルなんてよく狙われているな」

呆気に取られている文に、飼育係は続けて言った。

「そうかあ、そういう風に思ってる人もいるのかあ。俺ねっ、ゴンはけっこう楽しんで暮していると思えますよ。あいつがビールを飲むとこなんて見せたいくらいだなあ」

「ビールですか」

「缶ビールをね、あの太い短い指を使ってヒョイッと器用に開けてね、グイッと飲むとこなんて人間顔負けですよ」

「グイッとですか」

「それに、お客さんたちからは見えなけれど、あのドアの陰に金魚の入った水槽があるんですよ」

「……」

「横に餌箱があるんだけどね、ゴン、時々餌をやりながら、眺めてますよ」

もう一度、そう見えるのかあと笑い、まあ、ゆつくりしていつてくださという言葉を残して飼育係は出て行った。

再びベンチに座る文だけになった。

少しして、小刻みに体を揺らせる文の口許からクッククックという音が漏れてきた。

もう腹の底から沸いてくる笑いを押さえることができなかった。

その波がようやくおさまると、文はドッコイショオといふ掛け声とともに、ベンチから立ち上がった。

さあ、急いで家に戻り、佐伯に返事をしよう。しばらく締め切っている部屋には風を通さなくてはならないし、若人向けの献立も作っておいた方がいいだろう。

そんなことを考えながら、出て行きしな、文はゴリラの方へ振り向いた。

ちょうど天窓から差し込んだ明るい光の下で、ゴンはごろりと仰向けになり、振り上げた片足の指を弄んでいた。

## 受賞の言葉

楳木啓子

嬉しいお知らせでした。それも飛び切りの嬉しい知らせに、通話を終えた後も、しばらくのあいだ私は右手に菜箸を（電話をいただいたときキンピラ牛蒡作製中）左手に子機を握ったままでした。

それからフツフツと喜びが込み上げ家族に報告。わいわいとひとしきり騒いだ後、台所から焦げ臭い匂いが漂ってきました。夕食の菜が一品減りました。

小説を書き始めてから五年です。ひよっ子です。ですから、昨年『仰向いた人形』で奨励賞をいただいたときには恐いもの知らずの喜びで一杯でした。賞状とメダルをいただいたて、空を飛んで帰ってきました。

しばらくして、さあこれからが大変と気付きました。諸先生がお話しくださったことを肝に銘じました。ですから、今度の受賞は格別です。じんわりと染みてきます。

今、我が家の庭では寒さの中で薔薇の花が縮こまって咲いています。まるで人生の終盤のようです。それでも頑張つて咲いています。私も、終わりがくるその日まで、小さくてもよいからずつと咲き続けに行きたいと思えます。

このような素晴らしい夢を持たせてくださったこと感謝に堪えません。ありがとうございます。バンザイ！



楳木啓子

ゆぎ けいこ

北海道、滝川市に生まれる  
大学を卒業後、航空会社勤務  
現在札幌市在住、主婦  
道新文化センター／藤原ていさんのエッセー教室、朝倉賢先生の小説教室、菊地寛先生のシナリオ教室にて学ぶ  
「河の会」同人  
平成16年 第1回「北のシナリオ大賞」  
北海道放送（HBCラジオ）にて平成17年3月21日放送  
平成17年 第2回銀華文学賞奨励賞受賞

## 第三回 銀華文学賞優秀賞

# 河津桜は終わった

# 柏木節子

河津川に沿った長い堤が、巨大な濃い紅色の帯に染め上げられていた。

桜のトンネルに入る。

下向きに開いた五枚の花びらの、ひとひらひとひらが濃い紅色に縁取られ、蕾は桜桃のように赤い。それが幾枝も重なり合い、頭上を蓋っているのだ。

遠目に見たのどかさがここにはない。咲き誇った花のみずみずしい精がひたひたと肌に染み込んでくる。行き交う人の肌がみなそれを吸っていく。奪っていく。トンネルの出口からまた戻って桜色に染まる。

これが父の愛した河津桜なのか。  
敦子は車椅子に乗った茂子を見やる。どう、と心の中で囁いた。あなたも負けたでしょう。

桜に吞まれたかのように、茂子は背凭れに寄りかかったまま言葉失っている。

敦子は以前、家業の割烹料亭、松寿館がまだ辛うじて温泉旅館として成り立っていたころ、露天風呂の周囲に河津桜を植えようと父に提案したことがあった。

同じ伊豆の東海岸だから、河津の桜が網代の土に馴染まないことはあるまい。毎年河津に桜を見にいった父が、晩年肺炎を幾度も繰り返し、外出することもなくなったので、屋敷に花を咲かせて父に見せたいと思った。河津桜は早咲きの上、一月下旬から三月上旬までの長い期間楽しめる。と聞いていたので、減り始めた客を呼び戻せるかもしれないと正直、打算も働いた。

ところが、



「駄目だ」

父が即座に反対した。

「そうよ。花が散ったら後始末がたいへん」

すかさず父の側に付いた茂子の言葉などには耳も貸さず、

「こんな狭い庭にあの激しい色は似合わない。落ち着かん」  
苦虫を噛み潰したような不機嫌な顔で父は一蹴した。  
今その桜の真下にいる。

あのととき反対した父の気持ちがなんとなくわかったような気がした。

「艶やかすぎて馴染めないわ。どちらかというわたしは、  
染井吉野の方がしっとりとして好きだわ」

車椅子の茂子の耳近くに身を屈めて言う。

「あたしはこっちの花の方がいい。旦那さんが好きだった  
こっちの花の方が」

喉にからんだ低い声で茂子は言い、花の香をふっと吸い込んだ。

茂子に脳梗塞の症状が現れたのは、二カ月前、十二月半ばの寒い朝のことだ。

その日は、松寿館ランチに十人、夕食のコースに十五人と予約客が少なく、敦子はいつもより一時間遅い七時ごろから厨房に立ったが、セーターの上に薄いカーデイガンを羽織るほどの寒さだった。

た。

客からの予約の電話を、敦子や義雄に取り次ぐのを忘れ、あとで大慌てさせられたりしたが、本人はけるっとして電話を受けたことすら覚えていない。

障子や襖をちくはくに締めてみたり、洗濯物が上手に畳めなくなったりしたが、いつもおかしいというわけでもなかった。

「まだらボケっていうやつですかね」

義雄が敦子に声を潜めて言ったものだ。

「ねえ、来週予定入ってる？」

いつもながらの、ぶっきらぼうな聞き方で茂子が声をかけてきたのは、先週の日曜日の夜、敦子が暖簾を下ろしていたときだ。

松寿館の休業日は木曜日と決まっており、敦子はないが親しい友人と食事をしたり、日帰り旅行に出たりしていた。

「今のところまだ未定だけど」

「あたし、河津桜を見に行きたいんだけど、あんた、連れていってくれない」

かすかに媚びを帯びた口調で言う。

「旦那さんが好きだった河津桜を一度くらい見ておきたいと思つてさ。冥土のみやげ。向こうで旦那さんと会つても話題がないと困るでしょ。桜も時期のものだしね。病気が

板前の義雄が魚河岸から戻ったところになつても茂子は起きてこない。不安を感じた敦子が母家の茂子の部屋に行つてみると、開いたドアの内側にもたれるようにして茂子が立っていた。

「右足がいうこと聞かないのよ」

七十六という年にしては艶のある白い肌。若い頃から旅館の仲居の仕事をしてきたから、余計な脂肪はついていない。それでも、二重瞼の大きな目の下には黒い隈が隠しうもなくくつきりと現れている。いまだかつて、敦子に弱音を吐いたり、弱みを見せたことのない茂子が、当惑し、悲壮な眼差しで敦子を見上げていた。

敦子はその場にかがみこんで茂子の右足をそつと持ち上げる。手を離すと足はだらりと床に落ちた。

「右手を上げて」

茂子の右手は肩より上には上がらない。

救急車で総合病院の脳外科に運ばれた。医師の素早い対応で、それ以上の悪化を防ぐことができたのは幸運だった。

一カ月の療養とリハビリで、右手足が弱くなったものの、簡単な店の仕事や家事はこなせるようになった。言語障害も残らなかった。しかし、入院するまではほとんどなかった認知症が出はじめた。

ほんやりしている時間が多くなり、物忘れが激しくなつ

またいつ起きるか分からないし、来年まで生きていられないかもしれないから」

敦子はふっと吹き出した。

「わたしより長生きするわよ、茂子さんは」

「そりゃあ、ないね。十七も若いんだから、あんたは」

桜を見なければ一年が始まらないといつて毎年欠かさず出かけていた父が、車ならこの網代から二時間足らずで行ける河津の花見に、茂子や敦子を誘ってくれたことは一度もなかった。

昔から旅館家業は女に任せ、自分一人で外回りの仕事にでていた父にとつて、花見もその一環であったのかもしれない。敦子にしても、茂子と二人で桜を見る気持ちにはさらさらならず、また友人と訪れることもなく、今までその機会を逸していた。

父が生前使っていた車椅子を用意し、義雄に車で送ってもらった。シーズン中は駐車場を捜すのに苦労すると聞いていたので、二時間後に館橋のたもとまで迎えにきてくれるように頼んでおいた。

桜並木は河口から峰温泉までの川沿いに三キロも続いている。狭い堤の歩道をとめどなく人が流れ、行き交う観光客の顔がみな紅く染まっている。花びらに溶けて漏れた光のせい。異様な世界に足を踏み込んで、気持ちが高ぶっているせいか。

紅いトンネルに目を当てたまま黙りこんでいた茂子がふと何か言いたげに顔を上げた。

敦子は車椅子を止めて、茂子の口元に耳を近付ける。

「旦那さんは毎年、ここへ誰といっしょに来てたんだらうか」

「誰って」

「だから、小料理屋の女のだから」

思わず薄くなった茂子の頭髪を見やり、

「死んだ後まで詮索しなくてもいいでしょ」

冗談めかして笑った。

一瞬ではあったが、敦子も妙な妬みを覚えた。しかし敦子の場合には、多分桜が染井吉野だったら感じなかったであろうほどの単純なもので、それほど河津桜の華やかさに圧倒されたということだ。

「ご招待で来てたのよ。お父さん、網代の商工会とか伊豆の観光協会の役員を長くやってたでしょ。だから」

敦子の説明に納得した様子もなく、

「毎年ご招待はないでしょ。きつといたのよ。この桜をいっしょに見にきた女の人が」

茂子の疑いは簡単には払拭されない。

「そんな人いないわよ」

敦子は再び車椅子を押しはじめた。

父が花見に通ったのは、第一回目の河津桜祭りが行われ

た平成三年から、七十八歳で亡くなる平成十二年の春までの、十回ほどだ。

松寿館が隆盛を誇っていた時代ならまだしも、すでに疲弊しきっていたところ、老いた父といっしょに、花見をしてくれるような奇特な女の人などいようはずもない。

事業を拡張していた時期に父が五軒にまで増やした小料理屋も、経営不振になると真つ先に売り飛ばされた。

敦子には、茂子の一途な思い込みが尋常なものと思えない。認知症のせいかもしれないが、父に対する執念の深さには、哀れみより驚きと恐れを覚えることが多い。

あれほど望んだ父との結婚も、松寿館の女将になる夢も実現できなかった茂子の無念さを、今さらながら思う。しかもそれらを阻んだのは、他のだれでもない、敦子自身なのである。

父の死後、ささやかな割烹料亭として、敦子と義雄と茂子の三人でなんとかやりくりしてきた松寿館も、昭和二十年代後半から四十年代前半までは、漁港の街網代でも屈指の温泉旅館として繁栄していた。

東京オリオンピクが開催された昭和三十九年、東海道新幹線が熱海に停まるようになり、網代は東京の奥座敷と呼ばれ、新鮮な魚と温泉を求めた多くの観光客が足を伸ばした。

て自ら包丁を握って御馳走してくれた。

ピチピチした小鰻の皮をはぎ、頭をとって骨ごと叩いて潰す。父はそれに生姜の擦り下ろしと葱の微塵切りをたっぷり入れ、醤油をちりちり落として旨そうに食べるのだった。

若い女将は敦子のために、骨のない身だけを叩いたものに、生姜と葱を混ぜ、醤油を入れて熱いごはんに乗せ、お茶をかけて食べさせてくれた。

その女将は父の世話で熱海の旅館に嫁いだということになつていたが、実際のところは、嫉妬心に燃えた茂子のひどい仕打ちにいたたまれず、逃げるように熱海に移ったのだというのが専らの噂だった。

板前の義雄もそこに出入りしていた漁師の一人だった。父に可愛がられ、十代の終わりがら松寿館に板前として住み込んで修行を積んできた。

旅館組合長や観光協会長などの役職にあった父は、これと思つた客とは必ず悪意になり、常連を増やし、人脈を広げる営業手腕を持ち合わせていた。

松寿館では毎晩ほとんどの部屋が、金に糸目を付けない上客でいっぱいになり、狭い廊下を料理やお銚子を運ぶ仲居の女中たちがせわしなく行き交った。

敦子の夕食は賄いの女中が部屋に届けてくれ、一人で食べるのが常だったが、朝食と弁当は板前が入る前の厨房で

自分で作っていた。従業員たちは客に付き合つて明け方まで騒ぐので、朝が遅かった。

「旅館は何とかするから、おまえはせいっぱい勉強して、したいことをやれ」

合格した進学校がこの辺りの有名校だったので、当時父は大喜びをした。そのとき敦子は、三年後はできるだけ遠くの大学を受験して家を出ようと心に誓った。

折り合いの悪い茂子から逃れたい一心だった。小料理屋の女将から松寿館の女中頭になっていた茂子が、敦子の生活の細かなところにまで口を挟むようになったからだ。

ところが、受験勉強が本格化してきた初秋のある日、酔つて饒舌になつた父親が、搦め手から攻める手口で、以前の言葉を翻すようなことをとつとつといい始めた。

「俺が苦勞を重ねてこの松寿館をここまで大きくしてきたのは、誰のためでもない、アツを母さんみたいな女将にしたかったからだ」

三歳のときに病死した母を敦子は覚えていない。手元に残る数枚の日本人形のような写真と、あれほど何もかも揃つた女将は見たことがない、という周囲の賛辞だけが、母を知る手立てであつた。

折々の父の言動から、父が敦子に跡を継がせたがっていることに、敦子はなんとなく気付いていた。しかし、娘の気持ちを含んで、決して口にはしないだろうと高をくくつ

声でだれかれ構わず怒鳴り散らす。どうして叱られているのかわからず、頭上の雷が通り過ぎるのを頭を垂れながら待っている男衆をよく見かけたものだ。

そうでなくとも、ごつごつした肉厚の皮膚と、大きな鷺鼻という父の風貌は、見る者に、武将のようないかめしい印象を与えた。

父ほど気難しく、扱いにくい雇い主はいないであろうと思つていたら、

「あんなに面倒見のいい旦那はほかにいませんよ」

「女ばかりじゃない、男も惚れるいい男だ」

などと、板前や街の旦那衆が話しているのを聞いて、評判はまんざら悪くはないのだと、内心父を見直したことがある。

父が苦勞してここまでにした旅館を一人娘に託したいと考えるのは、自然なことだとは思ふ。そのつもりで、母の死後も正式な女将を置かなかつたのだろう。

しかし、一日も早く家をでたいという敦子の気持ちは、進路が具体化すればするほど強まった。茂子と顔を突き合わせて生活するのも限界にきていた。

それが、あの冬の夜を境に、事態は一変した。

あの日、学校から帰つた敦子は父に頼みごとがあつたので、旅館中を捜し回つていた。

父を捜すのは至難の技だった。いつどこにいるのか見当

ていた。

「でも、わたしは大学に行きたいの」

すでに志望校も決まっていた。あこがれていた先輩の男子学生が入学した薬科大が関西にあつた。手紙のやりとりをしたり、彼の帰省のたびに会つていた。彼といっしょに薬剤師になって大きな病院に勤める。その夢に近付くために、必死になって勉強していた。

「だいたい母さんのような女将になれるはずないじゃないの。あいにくわたしはお父さんに似て、色黒だし、美人でもないんだから」

父は敦子の繰り返す言などまったく聞いてはいなかった。

「家から通える大学はどうだ。勉強もしながら、女将の修行をするってえのは」

「そんなこと不可能です」

頭を垂れ、上半身が揺れるほど飲んでいる父を敦子は見据えていた。

飲まなければ自分の娘に父としての思いを伝えることができない。素面であれば怒りが先行して、勝手にしろ、と怒鳴り散らす。勝手にするわ、と言われてすべてが終わりになることを父は恐れているのだ。

普段から親分肌で、娘を含む他人に決して弱みを見せないところがあつた。寡黙で一徹。一本気で押しが強く、潤癪持ちだった。自分の氣にいらぬ場面にくわすと、大

がつかない。旅館の外にいることも多く、十日や二十日顔を見ないことはしょっちゅうだった。

それなのに、久しぶりに会つた父から、最近悪い男友達ができたとつていうが、けしからん、とか、夜八時の門限を守らなかつたそうだな、とか、一方的に叱責された。

父の叱る声は、本人は自覚していないようだが、大きな怒鳴り声なので遠くまで響く。

茂子の差し金だとすぐに気付いた。悔しい思いで強く反論すると案の定、茂子がそういつてた、口答えするな、と、またまた怒鳴り返してくるのだった。

茂子と旅館の廊下ですれ違つて、いつも鋭い目つきでいられた。それが不愉快で、敦子は茂子の居そうなところではできるだけ避けるようにしていた。

父の部屋は旅館の建物の二階の一番奥にある。テレビを置いてある十畳の居間と襖を隔ててやはり十畳の寝室がある。

居間と寝室を覗いたが父はいない。

帳場があるいは、外の小料理屋を回っているのかもしれない。

もともと旅館の主役は女である。料理や酒を運び、客をもてなし、客からつがれた酒を飲んで、いっしょに歌つたり、踊つたりする女中や、采配を振るう女将がいなければ、やっていけない。母が亡くなってからは茂子が女将代わり

に女中たちを束ねていた。

父の仕事は営業や経理が主であるが、事業を拡げてからは、ますます仕事に忙殺されていたようだ。

敦子は父の部屋を出て、階段を下り、準備中の宴会場脇の廊下を通り、温泉浴場の前を足早に過ぎて帳場までやってきた。番頭さんが細身の身体にゆるゆるのはんてんを羽織って帳簿に見入っていた。そこに父は居ない。

隣の客用の厨房の方に移る。十人もの女中たちが、着物の裾をはたはたさせながら右往左往している。ここでも邪魔にならないように、壁に張りつくように歩く。

もしかしたら父と入れ違いになったのかもしれないと思いい、再び父の部屋をめざす。浴場や宴会場の廊下を通って二階に上がる。居間にはだれもいなかったが、先ほど閉まっていた寝室の襖が少し開いている。

「お父さん」

敦子は居間を通って、襖をそつと開けた。茂子が着物の裾を端折って布団をせつせと敷いている。

足がすくむ。

宴会は長引くと夜半を過ぎ、未明まで続くこともあるので、女中たちが会場の支度をしている間に、茂子が父の夜具を敷きに来たのだ。手のあいた女中がしていた父の身の回りの世話を、いつか茂子が一人できるようになっていた。敦子が父と居間でテレビを見ていると、茂子が父の寝る

布団をきれいに敷いていった。

父の一人分の寝具、マットレスと敷布団に毛布と掛布団。冬はネルで作った袋に入れた湯たんぽを布団の中の足元のあたりに置いていった。

敦子は母が亡くなると、賄いの女中が交替で世話をしてくれ、小学校五年のとき母家の玄関横に自室を建て増してもらうまでは、女中たちといっしょに寝起きしていた。

布団を敷き終わった茂子は着物の裾を直すと、鏡台の前に座り込んで、化粧と髪を整えはじめた。これから座敷に出るのである。

ふと畳に目をやると、敦子ははっと息を呑んだ。そこには二組の布団が並べて敷いてある。これはいったいどういうことだろう。

思わず部屋に一步踏み入った。

茂子は敦子の入ってきたのに気付いたはずなのに、まったくの知らん顔で、鏡台の前に座ったまま、栢の櫛で一心に髪を直している。敦子は自分の顔がひきつっていくのがわかった。

小料理屋をやらせている女将はみんな旦那さんのこれだつてね。

松寿館で仲居をしている女中たちが、小指を立てて意味ありげなやりとりをしていたのを幾度も目撃していた。

激しい怒りと屈辱に涙がにじんだ。

敦子の告げ口をしながらかくそ笑んでいる茂子の本性に、父はどうして気付かない。なまけなく、はがゆい。

「おとうさんは、どこ」

声が揺れた。

「さあ」

鏡越しに敦子をちらと見やり、茂子は冷ややかな声で受け流した。

敦子は茂子の後を通り抜け、床の間の横の仏壇のすぐ前に座り込んだ。そして母の遺影をじつと見上げた。すると突然茂子の鋭い声が飛んできた。

「出ていきなさい」

あつげにとられるほど強い口調だった。

「出ていきなさい」

目を吊り上げて繰り返し返した。

「何いつてるの。そちらこそ出ていきなさいよ。ここはお父さんの部屋よ」

唇がぶるぶる震える。

「ふん、何も分らないくせに。生意気な子。旦那さんにいつけるわよ」

「どうぞ。わたしもお父さんに、あなたを辞めさせてもらうように頼んでやるっ」

茂子の目が鬼面のように歪んだ。

「わたしを辞めさせるって。できるものならやってごら

ん。あなたに旅館の何がわかるっていうの。何もできないくせに何さ、お嬢さん面して。松寿館はわたしがいなければどうにもならないってこと、あの人が一番よくわかってるわ。あなたがうろろろしてると、邪魔で迷惑なのよ。もう、大学でもどこでも、早いとこ、どんどん出てつてちょうだい」

あの人、という茂子の言葉に煽られ、敦子の臍に火が回った。胸が破裂するほど高鳴り、齒も噛み合わない。

「ら、来年からわたしが、女将になるのよ。お、お父さんがそう決めたんだから」

がくがく震えながら、唐突に言った。言いながら、いたい自分は何を言ってるのだろう、と思つた。

ふつと茂子が不敵な笑いを浮かべた。

「あなたが女将？ 冗談じゃないわ。あなたはこの家出て大学に行く人間でしょ。そんな者に旅館を任せられるかどうか、旦那さんに聞いてみたらいい。あなたはまだ何にも知らないようだけど、あたしは近いうち、旦那さんと祝言して、女将になるのよ」

鼓動が止まった。

「嘘！ そんなこと、許さないわ」

自分の知らないところでそんな話が進んでいたとは知らなかった。信じられないことだった。

「絶対に許さないから」



収まりのつかない焦りと失望感が身体中を突風のように吹き荒れた。父に対する激しい怒りも加わった。

敦子はいきなり傍らの枕を二つ持ち上げ、茂子の頭髪目がけて思いつき強く投げ付けた。結び上げたばかりの髪が乱れ、茂子が金切り声を上げた。

敦子は父の部屋を飛び出し、家を飛び出し、街道を漁港に向かって走り続けた。

父はなんだってあんな笑顔のない、目をぎらぎらさせた女がいいのか。涙が溢れてとまらない。海の端に夕日が傾きかけていた。

海辺の小料理屋へと自然に足が向く。

母に似ている女将がいるかと、幾度も戸口をのぞき込んだ。やがて障子が開き、暖簾をかけたにできた女は、見たこともない痩せた年増の女だった。

「あのう、女将さんは」

と聞くと、

「熱海に嫁いだそうですよ。わたしが跡をやっています」

ふっと力が抜けた。父の相手があの海辺の女将だったら許せたかもしれない。いや、この年増の人でもいい。とにかく茂子以外の女だったら、だれでもいいと思った。

「あれ、あっちゃん、一人でどうしたの」

馴染みの漁師が近付いてきた。慌てて涙をこすり、なんでもないの、ときびすを返したが、ふと思いついた。

ほろ酔い加減の一番機嫌のいいときだ。茂子はいない。

大騒ぎして女中たちに髪を直させて座敷に出たのである。今日は芸技が呼ばれるほどの客が来ているのだから、茂子は席を外せないはずだ。

「テレビつける。なんかおもしろいもん、やってみるぞ」

めずらしく父が気遣いを見せる。

「いいよ」

ぶつさらほうに答え、父のおちよこに酒をついでやる。

父と敦子の好物の鰯の叩きが出ていた。

父が飲んでいる間に、敦子は自分の分だけご飯をよそり、鰯と葱と生姜と醤油を混ぜた好物のお茶漬けを食べた。

「今日はアツの酌だから、酒が特別うまい。ほれ、網代の最高の御馳走だ。叩きをもっと食え。鰯の干物もあるぞ。

湯豆腐もこっちの煮物も旨いぞ。たくさん食えや」

上機嫌で言う。先ほどの振舞いを茂子からたつぷり聞かされているだろうに、父は何も言わない。台風の前静けさかと父の様子を上目使いに見たりするのだが、そんな素振りはない。敦子のついた酒をつつとあける。

長い沈黙があった、父の酒をすすする音が襖や障子や畳に染み込んでいく。

「お父さん、わたし、大学を、家から通えるところにする。そして女将の修行もしようと思う」

冷静にそう言い切った自分に、どこかで別の自分が驚い

「ねえ、茂子さんがうちの女将になるって、本当の話」

漁師はきよんとんとして敦子の顔を見返し、ああ、その話か、とうなずいた。

「そうか、旦那もさすがにあっちゃんには言いにくくて、まだ何にも話しちゃあねえのか。組合の旦那衆がな、まあ旦那が旦那に茂子さんといっしょになれてって勧めたんだが、旦那が今ひとつはつきりしなくてな。もう、女将の十七回忌も終わったことだし、そろそろよからうってな。そしたら、最近どうも旦那が折れたって話だ。あ、俺がこんなこと言っちゃつていいのかな」

家まで猛烈な勢いで走った。ゆっくりしていたら、なにもかも取り返しがつかないような気がした。とにかく父に会うことだ。

部屋に戻ると同時にノックがあり、女中の声があった。

「旦那さんが夕食を奥でこいっしょにといってますので、向こうに運びます」

緊張と安堵の両方が頭をよぎる。

父がいよいよ宣言するのか。もう遅いのだろうか。でも父の前でわめきちらしたら、すべてご破算にしてくれるかもしれない。

二階の奥の居間に入ると、父は一人でちびちびと酒を飲んでいた。

「よう、来たか。たまにはお父さんの相手をしるよ」

ている。本当にそれでいいの、と言いながら。

父は一瞬ちらつと敦子を見やり、そうか、そうか。形相を崩してうなずいた。何回もうなずき、自分で酒を継ぎ足し、継ぎ足し呑み続け、また、そうか、と繰り返した。

敦子の胸の奥で、大きな潮がさあつと引いていく。潮の流れは目の奥から突然あふれだした。ふわっと部屋がかすんでいく。耐えることができず、敦子はその場にひれ伏し、声を限りに泣いた。泣きじやくった。

唯一の支えとして長くしがみついていた夢が消えた。深い喪失感と、こうなる運命だったのだという諦め。

あれは、すべて父の陰謀ではなかったかと後になってよく思うのだったが、父に確かめたことはなかった。

ようやく落ち着きを取り戻した敦子は、青ざめた顔で父に言った。

「お父さん、その代わりに、茂子さんと結婚しないで。絶対にしないで」

河津桜を見て帰った日の夜、茂子は熱を出した。花見で冷えて、風邪を引いてしまったのかと敦子は心配し、夕食後に薬を飲ませ、早目に床に付かせた。

敦子が風呂からでると、茂子の声が出て、部屋に入ってくるようにと言う。

廊下を隔てた茂子の部屋に一步足を踏み入れた敦子

は、一瞬後退りした。八畳の和室には、艶やかな色とりどりの何十枚という和服が広げられてある。折り重なっているものもあり、畳はまったく見えな。茂子はその中央にべたっと座り込んでいた。

風邪どこの騒ぎではない。いよいよ完全に惚けてしまったかと青ざめながらも、その数の多さに敦子は驚いた。敦子も女将になってから着物に凝って、それなりに買いはしたが、これほどはない。

仕事着として見慣れていたもの以外に、華やかな色模様の小紋や付下げや訪問着まである。外出を嫌い、人付き合いもまったくなかった茂子がどんな気持ちで揃えたのか。

そのほとんどに袖を通すこともなく、箆の底に眠らせていたのであろう。

「これだけあると壮観だね」

着物の海に浮かんだ茂子は上機嫌である。

「呉服屋みたいね。初めて見るものばかり」

風邪の具合を聞くのも忘れ、敦子は入口の一枚を避けてその場に座りこんだ。

「六十年間働いて買った宝物さ。あんたと違って、十五までは口に入る物もろくはないような暮らしをしていたからね。きれいな着物着るのが夢だったのよ」

茂子は松崎で生まれたが、幼いころに両親を亡くし、西伊豆のあちこちの遠縁を転々として育った。子守や下働き

に、お茶やお花、そして関心があつた日本舞踊と三味線の稽古に励んだ。

気が付けば、茂子以外のほとんどの従業員が敦子に好意的になつていた。

「あつちゃん、最近垢抜けてきれいになつたねえ。立ち居振舞は前の女将を彷彿とさせるよ」などと街の旦那衆や古い鬚眉筋が口を揃えて誉める。世辞とは思いつながらも、敦子は素直にうれしかった。自信を得、茂子の威圧から自由になつていくのを感じるのであつた。

茂子は相変わらず、敦子のことを「あんた」と呼び、「女将」とは口が滑つても言うことはなかったし、態度もその限りであったが、敦子はいっさいを気にすることなく、大様に構えて今日までやってきたのである。

敦子は手の届くところにある薄い黄の地に牛車と花の模様のある着物を手に取つた。

「ああ、これ覚えてるわ。お正月の朝、伊豆山にお参りに行つたとき、茂子さん、よく着ていたじゃない」

あのころ松寿館では、十一月に入ると、表玄閨の女中部屋はいつになく華やかになった。馴染みの呉服屋が葛籠を背負つて通ってくるからだ。畳の上に広げられた反物を手の空いた女中が順番に見にやってくる。あれこれと大騒ぎになる。一年に一回、正月用の着物を新調するのがみなのお楽しみなのだ。

で、小学校も行った行かなかつたりという状態だった。終戦の翌年、ちょうど敦子が生まれたころ、網代に来て料理屋に雇われたようだ。

後年、松寿館の経営が逼迫し、わずかに残つた従業員もすべて解雇せざるを得なくなつたとき、病床にあつた父が敦子を呼んだ。

「茂子と義雄は家族同然だから、最期まで松寿館で面倒見たいと思つてる。頼むぞ」

父と二人になったら廃業し、土地を売つて気楽なマンション住まいでもしようと考えていた敦子の思惑はずれた。

四十年前、希望の大学進学を諦め、近くの短大の家政科に通いながら、同時に女将としての仕事を始めたとき、敦子は茂子が松寿館を辞めていくに違いないと確信していた。

去り際、どんなに悪態をつかれ、悪口雑言を吐かれても、出ていってくれるならば、それに耐えようと心の準備さえした。

ところが茂子は出て行かなかつた。それどころか、敦子の女将としての仕事に平然と口を出し、その未熟さを笑つて父や女中たちに告げ口をする始末だった。

それは短大を卒業するまで続いたが、敦子の中にも妙な意地があつて、そんな茂子をひたすら無視し、学業のほか

「呉服屋さんきたわよ」

と誘われて、敦子も女中部屋に足を運んだ。高校生になつて初めて父が敦子にも着物を新調してくれた。周囲からあれこれ飛んでくる賑やかな助言をもとに、薄い桃色の地に牡丹の花が浮いている柄を選んだ。

大晦日の夜、除夜の鐘が鳴り始めると、泊まり客も宴会場からそろそろ引き上げていく。女たちは、後片付けと元旦の朝食の準備をしながら、順番に二、三人ずつ交替で、すでに予約をしてある近くの美容院へ行く。

胸の躍るときであつた。誰もが自分の晴れ姿を想い、心浮きだち顔を上気させている。

美容院から戻ると、整髪料と化粧の匂いにむせかえつた女中部屋で、真新しい肌襦袢と長襦袢と着物に袖を通す。

そして、表玄閨に呼んだ三、四台の、普段は高価で乗ることもできないハイヤーに、五人ずつぎゅうぎゅう詰めて、伊豆山に初詣でに出かけるのだ。

初詣でから帰るとすぐ元旦の膳を出す。客が起き出す前に、父と敦子を中心に、従業員が広間に全員揃つて新年を祝う。

食事が終わるころ、玄閨に艶やかな声がして、置屋の芸妓たちが、それぞれの名前の染め抜いた手ぬぐいを持って挨拶に訪れる。

御披露目と正月にしか見られない芸妓の黒い正装姿を一

目見ようと、みないっせいに玄関に向けて走り出すのだっ

た。

「ねえ、これ見てよ」

茂子は着物に埋もれたまま、首だけぐるりと動かして、それだけ畳紙に包まれていたものを取り出し、開いて敦子に見せた。

「これ、河津桜だよね」

「あら、ほんとだ」

濃い桃色の大振りのはなびらと、それを縁取る濃い紅。まさにあの華やかな桜の花が袖と身頃の裾に広がっている。

「小料理屋の女将になったとき、旦那さんがあたしに作ってくれた、生まれて初めての自分の着物。きょう河津桜見て、この着物の模様だつて気が付いてね。箆笥を捜し回してようやく見つけたのさ」

それでこのありさまなのか。

しかし河津桜の来歴によると、河津川沿いの雑地に苗木が発見されたのが昭和三十年、開花はそれから十年後の昭和四十年となっている。父が茂子のために着物を作ったころにはまだ、河津桜の苗木すらなかったことになる。

つまり父は河津桜など知らずに注文した。

桜の模様を依頼された絵師が、誇張して図案化した結果、

偶然に後の河津桜そっくりの花が仕上がったと考えるのが

がほとんどで、数もそれほど多くないが、義雄の腕のお陰か、口込みで毎日予約が入る。

今の松寿館での茂子の仕事量など知れたもの、いなくても何とかなると思っていた敦子だったが、日がたつにつれ、一人でこなすことの厳しさを感じ始めた。

着物の裾を気にしつつ忙しく動き回りながら、こんなとき茂子がいたら、習い性となっている客へのサービス精神で、店内の雰囲気や和らげ、こちらの気持ちにも余裕をもたせてくれるのにと思ったりした。

膳の上げ下げでは、膝と腰に鈍い痛みを感じるが多くなった。自分もそろそろ無理のきかない身体になってきたなど改めて思った。そういえば来年は還暦。もう六十になるのだ。

病院から、茂子の姿が見えない、と電話があったのは、退院を控えていた五月始めの昼過ぎのことだ。

昼食はデザートのおレンジゼリーまで完食し、歯磨きをした。歩いてトイレに行つて用をすまし、ベッドに戻るのを確認した看護士が、他の患者の面倒を見ているうちに姿が見えなくなったという。

「病院の中をもう一度よく捜してみます。外に出たとしてもまだそれほど遠くには行つてないと思います」すぐ行きます。車で捜します。青ざめてそれだけ言うと、

妥当であろう。

河津桜はヒカンザクラとハヤザキオシマザクラの自然交配の新品種というから、元来、これは自然の神秘が大きく関わつて生まれた花なのだ。

翌日になつても茂子の熱は下がらず、食欲もなかったのだ、敦子は車で行き付けの病院に茂子を連れていった。その結果、肺炎との診断が出て、茂子はそのまま入院することになった。

新築間もない病棟で、十畳程の個室はいかにも清潔な感じがした。今は良い薬が出回っているので、体質に合えば完治するのも早いだろうと医者は言う。

「ちょっとあなたに頼みごとがあるの」

点滴され、酸素マスクを付けられた茂子が、帰ろうとしていた敦子を呼び止めた。

「きのう見せた河津桜の着物、あれ、ここまで持つてきて」

くぐもつた声で言う。どうするのと聞くと、部屋に吊して毎日眺めるのだと答える。

「衣紋掛けも忘れないでね。それから他の着物は全部あんなに上げる。箆笥ごと全部」

話半分は聞き流し、敦子は外に出た。

松寿館に戻ると、昼の予約客が八人テーブルに付いて、茶を飲みながら楽しそうに雑談していた。女客か家族連れ

敦子のかたわらのバッグを引つ掴んで店の裏口を出た。察しの良い義雄が厨房からできて大きくうなずくの目を隅に捕らえながら。

見つけても決して叱らないで下さいね。

電話の向こうでケースワーカーの言つた言葉が、車を走らせた敦子の耳に、こだまのように返ってきた。

途中よろよろ歩いている茂子に出会ふかもしれない。そう思つてできるだけゆっくり走つた。しかし、茂子の姿はない。

毎日、どんな忙しいときでも、五分、十分と空いた時間を見つければ、敦子は病院に通い詰めた。食事時であれば、車椅子に乗せ、明るいサロンに連れ出し、スプーンでお粥やゼリー状にした野菜スープなど病院の食事を養つてやった。また、タオル類やパジャマなどの汚れ物を持ち帰り、洗濯して陽に干し、翌日替えをもつていくのが日課になっていた。休業日に友人と会うのも控えた。

自分はなんでこんなに一生懸命茂子を見ていたのだろうかと思ふに思ふに、足は毎日病院に向かうのだつと不思議に思ひながらも、それは毎日病院に向かうのだつた。

肺炎は一時完治したと思ふたが、飲み込んだ食事や飲み物などが、スムーズに食道を通らず、器官から肺に入つてしまふ、新たな肺炎を起こすということを繰り返した。

それに加え、茂子の認知症はどんどん進んでいった。

「今、旦那さんが帳場に顔を出していたから、ちよつと呼んできてちょうだい」

「旦那さん、組合の会合で今夜は遅くなるそうだから、裏のカギは掛けないでね」

「旦那さん、どこにもいないから、あの海辺の小料理屋を見てこなくちゃ」

大きな目を異様に光らせて起き上がろうとすることがしばしばあった。

現在と過去が混然とし、二分前のことを忘れ、二分先のことや想像できない世界。説明すれば一瞬わかつたような顔付きになるが、すぐ朦朧としてしまう。妄想を抱き、それに固執する。肉体的、精神的な快さや不快さには敏感になる。相手をする者にとっては幼児より始末が悪かつた。

幻聴や幻覚に襲われ、ふつと自分が自分でなくなるような不安を持つようになります、と言った医者言葉の思ひ出す。

そんな混沌の世界に居る茂子の姿を、自分も含め、一個の人間として長く尊敬を持って生きてきた人の、いづれ行き着く先の姿として、敦子は見るようになっていた。

病院を通り越した左手の空き地に車を停めると、敦子は車を降り、右に伸びる緩やかな上り坂を歩き始めた。

「あの上からは松崎の海が見えるかね」

かつて高台を指さして茂子がぼつんと呟いたことがあつ

た。茂子は大きな虚ろな目で敦子を眺め、

「うちに帰ろうと思つてさ」

無表情で答えた。

うちに帰る。

茂子にとつてのうちとはどこなのだろう。はたと考える。

松寿館か、それとも松崎の生家か。

「お盆を過ぎるとばたつと客が途絶えるのさ。二月までは駄目だね。強い西風に煽られて、海は騒ぐし、雨戸は叩かれるし。裏口の戸を何枚持っていかれたか」

以前茂子から聞いた松崎の話をもと思ひ出す。

茂子にとつて松崎は、どんなに西風が吹き荒れようが、両親と幼少時代を過ごした故郷なのだ。

認知症の友人の母親は、八十を過ぎた病いの床で、すでに亡くなった実家の弟の名を出して、弟が外で待ってるから、うちに帰ると言つて起き上がったという。

人は、生まれた場所、生命の始まった場所を、記憶の底にある温かな懐かしい場所として、本能的に求めているのだからか。

しかし、実家に居てさえも、うちに帰る、といつて荷造りする者もいるそうさ。

どこということなく、人は魂の落ち着く場所を常に求めているのだから。

敦子は自分のカーディガンを脱いで茂子の肩に羽織らせ

たからだ。

「松崎は西海岸だから、反対の方向、ここからは無理ですよ」

敦子がそう言うと、ふつと黙り、二度とその話はしなかつた。

高台一带はいづれ分譲地として売り出されるのである。今はまだ人通りも少なく、茂子がどんな格好をして歩いていても見咎める者もない。

道の両側の木々は濃い緑の葉に被われ、鮮やかな色を散りばめたツツジが点在している。五分も歩くと、海側の視界が開けた。木製の柵があり、その手前の木のベンチに茂子が腰を下ろしているのが見えた。

緑の地に細かな花模様のパジャマは一番のお気に入りである。不自由な右足を引きずつて、ここまでゆつくり歩いてきたのだ。

目の前に広がる大海原を眺めているのでもなさそうさ。前屈みになってじつと座っている。疲れきつて休んでいるといった風情だ。

白いバスタオルを膝の上に置き、両手でしっかりと抱えている。不自由な右手を左手で支えながら。

敦子は携帯で病院に連絡を入れてから、茂子に近付いていった。

「茂子さん、どこへ行くの」

た。

「じゃ、いっしょに帰ろうか」

促すと、茂子は素直に立ち上がった。

そのとき膝のバスタオルが道路にはざりと落ちた。真っ白なバスタオルの中から現れたのは赤い河津桜の着物だった。きちんと畳んである。

敦子が病室の衣紋掛けに掛けてあつたものを、下ろして病室の床に広げ、正座のできない足を気にしながら一心に畳んだのであろう。

崩れもせず畳んだ形のまま落ちていた着物を、敦子は屈んで拾い、タオルにくるんだ。

「ねえ、わたしのこと分かる」

突つ立つたままの茂子に顔を向け、人差し指で自分の鼻のあたりを指さした。

「あっちゃん。松寿館のあっちゃん」

敦子は正直跳び上がるほど驚いた。なんとまともで正常な答えだろう。知らず顔が綻んでくる。茂子と出会つて五十数年、名前を呼ばれたのはこれが初めてであった。

その日から一週間後に、茂子は退院した。

けれども松寿館には戻らず、そのまま病院の経営する老人介護ホームに入居することになった。

「松寿館から車で十分のところだから、近くていいでしょ」  
「ただ理解できてきているのか、判断の難しいところだが、



柏木節子

かしわぎ せつこ

静岡県裾野市生まれ、北海道苫小牧市在住  
 静岡県立沼津東高校、静岡大学卒業  
 田久保英夫、三浦佐久子に師事  
 著書『洋上の祝宴』（成山堂書店）、『最後の航海』（龍書房）、『汽笛の鳴る街』（龍書房）  
 『螢の行方』（龍書房）  
 「航跡」／中央公論女流新人賞佳作  
 「裏見の滝」／伊豆文学賞佳作  
 「最後の航海」／とまみん文学賞大賞  
 「突然の客」／とまみん文学賞大賞  
 「十八歳の夏」／とまみん文学賞佳作  
 「螢の行方」／とまみん文学賞佳作  
 「せせらぎの路」／とまみん文学賞佳作  
 「竹」／静岡県芸術祭奨励賞  
 「海の絵」／静岡県芸術祭朝日新聞社賞  
 「船員しんぶん」（全日本会員組合）にショートストーリーを連載中



「わかった。来年まで、桜が咲くまで預かっておくわ」  
 茂子が素直にうなずくのを見て、敦子は胸が詰まった。  
 茂子が茂子でなくなったような気がして、それが妙に寂しかった。  
 老人介護ホームの白い大きな建物が、通りの左側に見えるてきた。

受賞の言葉

柏木節子

優秀賞をいただきありがとうございます。五十代、六十代こそ小説が書けるときと常々思っておりましたので、五十代の終わりにこのような賞をいただけたことは大きな励みになりました。  
 今年は二月に初孫が誕生し、三月に父が亡くなりました。五月に苫小牧市でとまみん文学賞佳作をいただき、十月に四冊目の小説集を出版しました。そして、十二月に還暦を迎える直前に、この優秀賞という嬉しいお知らせをいただいたのです。平坦な私の人生の中で、特筆すべき今年がさらに特別な年になりました。  
 脳梗塞と肺炎を繰り返し、認知症を患った父を三年ほど家族ともども身近で介護しましたが、症状が日に日に進み、弱っていく様子を目の当たりにし、その切なさや悲しみに胸のつぶれる思いを幾度味わったことでしょう。  
 「河津桜は終わった」では、老いていく老女と主人公の姿を父に重ね、また自分の行く末の姿を重ねて書いてみました。  
 本当にありがとうございます。

茂子は、急に顔を歪めて泣き出した。声を出さず、ふわあ、ふわあとう肩を上下させて泣き泣いている。

「毎日行くから心配しなくてもいいのよ。家にいるみたいなものよ。しかも大勢の人たちがよく面倒を見てくれるから、家にいるよりずっと安全で楽しいと思うよ」

茂子はふっと泣き止み、ちいさくうなずいた。

細かな荷物を積み込むと、車の助手席に茂子に乗せた。膝には今日も河津桜の着物がある。白いバスタオルではなく、敦子を持つてきた松葉模様の絹地の風呂敷に包まれて。車が走り出すと、茂子は周囲をきよろきよろ見回し始めた。そして突然、

「河津桜見にくんだね」

と言つて敦子を驚かせる。

「違うわよ。桜なんてもう咲いてないの。五月だもの。桜は終わったの」

桜前線は北海道を北上しているころだ。

「なんだ、そうか」

表情にかすかな陰りを見せてつぶやくと、茂子はそのまま何かを考えるかのように、しばらくうつむいていた。ところが、ふっと顔を上げ、

「ねえ、河津桜見に行こう」

たった今思いついたように、目を輝かせて言うのだった。

五分前に自分が何を言ったのか、なにを言われて納得したのか、まったく理解していない。それが病気のだから仕方ないと思いつつも、ふっと溜め息が出る。

「もう桜の花は散ってしまったのよ。花が終わった桜の木を見に行ってもつまらないでしょ。また来年見に行こうよ」  
 ゆっくり噛み砕くように言う。すると、

「来年まであたし生きてないよ」

敦子を意地悪い目つきでにらんだ。こんなところは茂子らしくて至極まともだ。

「大丈夫。きつと連れていくから」

車は赤信号で停車した。茂子は唇を真一文字に閉じ、前を見据えていたが、やがて、

「そうか、桜は終わったのか。寂しいね」

独り言のように呟いた。それから膝の上にあつた風呂敷包みを、アクセルを踏み始めた敦子の方に押しやった。

「これ、あんたに預ける。旦那さんからもらった大事な着物だけど、もう着ないから」

「お部屋に飾っておけばいいのに」

敦子が正面を向いたままそう言うと、茂子は黙って首を横に振った。そして、

「いいよ。もう桜は終わったんだから」

うつむき、悲壮な面持ちで自分に言い聞かせるようになった。